

いづみが城

一名勝負分

(一) 思へども
 (二) 思ひつき、心を寄せる
 (三) 當番の對としてならば非番なるべし
 平三景時
 (五) 景高
 (六) 蓮忍
 (七) 勸修房、南都興福寺の周防得業聖弘
 (八) 吾妻鏡文治三年三月八日の條
 官南都へ忍び御出ある事關東より召さる事等(參照)
 或は承る上はか

去間判官殿、高館の御所にうづらせ給ひ、昨日のふ今日とは思ふるども、三年になるは程もなく、秀衡入道いつきかしのつぎ申し、合度典お州五十四郡の大名小名、皆此君に思ひつき申し、合度典去る利成高敏のまわりのついでに、いままは思ふるども、三年、あはれは、まゝく、秀衡入道いつきかしのつぎ申し、いと、お少少、四郡の大名小名、皆此君に思ひつき申し、いままは、あはれ、まゝく、いままは、あはれ、まゝく、あつて、いままは、あはれ、まゝく、て、いままは、あはれ、まゝく、

木宮 源氏之辰野高士博學文

此事關東へかくれもなく、梶原早く聞付、合度典嫡子の源太景末、次男平次を近付て、合度典此度判官殿、奥州へ御下向あり。御いせいの程を、合度典申さば、月にかさなり日にまさり、合度典事さら、合度典此間は、合度典鷹尾の文學上人、鞍馬の東光房、奈良の、合度典のとつこの御房にて、御兄弟の御中なをし、合度典申さばとの御内談と承る。上は御一たいな

平家物語一、逆
構、壇浦合戦、櫻
越、盛衰記四一、梶
原逆構、四六、頼朝
義経中途、義経記
四、義経平家の討
手に上り給ふ事等
参照

ひとへ(偏)に

ししゆ(四種)の壇
なるべし

阿彌陀の誤寫なる
べし
梵字なるべし
うすさま(鳥羽沙
摩)の誤なるべし
關の神

れば、つゆには御和ぼく有るべしカ、リもしもあらば判官殿、津の國渡邊福島にての逆坂ろのい
恨 こん今迄も、いかでか忘れ給ふべし。さあらんに於ては、我々父子共引いだされ、切れん事は
治 理定なり。いかゞはせんと申すつ、あんじわづろふばかりなり。コト源承て、お、せの如
く此君、在鎌倉ましまさば 我らが家の大事、これにすぐべからず候。されば、昔しが今にい
たる迄、力におよばぬかたきを 佛神に申す習ひの候、かなわぬ迄も判官殿を、調伏召されて
御らんせよと申す。梶原げにもと思ふび、やがて若宮の別當そうじやうに参り 判官殿を調伏
すべき由を、しとるに頼み奉る。曾上かたく有りけれども、一名をかけて頼み申す間、
力及ばず領承し、イロカ、リ吉日ゑらび給ひ、いしやうを清めしやうごんし、しめんの段の飾て、
調伏の、ごまをぞたかれける。
ツメ抑し、その段と申すは、そくさいぞふやくけい合調伏とて、上段はしたんなり。そくさいの
段は、東向にてをこなはる。ぞふやくは南向、敬合は西向、さて調伏をば、北へ向てをこなは
る。具物の用こそおそろしけれ。入木に山うつぎ、しやう香に毒蛇のほね、ぐにはひつちの
飯をもち、ともしびにいものあぶら、あかには白蛇の水をなれ、御しき日々にかわりて、初
七日た地藏の方、二十七日た南彌はう、三十日にまなりしかば、取てぼしをうして、内ばく外ば
くのいんのふむすんで、うすさな明王金剛どうじのせいごんにて、かさねて七日のりける。

流れ落つる意
大威徳明王、五大
明王の一
詞利帝母なるべし
文殊菩薩延命が
利観が
しるし(験)

原本綿、今錦に改
む。以下同
正しくは泉
本吉冠者高衛
又比爪、火爪
櫛爪五郎季衛、但
し秀衡の子に非ず
(考説参照)

此方にてかなはずば、曾上がめいを召さるべしと、とつこを以て胸をたき、三光以てなづき
を打、いたゞきをぶちやぶり、頂上よりもあゆる血を、ごまの火に取てかけ いら高珠すを押
しもんで、せめにくしてぞいのりける。あまりつよくせめられて、西方に立ち給ふ、大位とく
の召れたる、智者の牛がわつとはへて、北へ向て諸ひざ折て臥ければ、行者是に力を要、一字
きんりん五段の方、六字かいてい、八字文十不動圓明大徳明王、ないばくげばくにさしかり、
せめにくしてぞいのりける。あまりつよくせめられて、四七日の明ほのに、段の上に黒雲が懸
て、不動の地けんになま血の付て、いき首段よりころびをち、しつと笑て臥ければ、一方成
就したりとて、段の破らせたまひけり。
コトあら有難や、佛はこふたい慈悲とは申せども、いのるしゆるしぞあらはれける。され共、
判官殿にはをい給わで、秀衡が身の上となり、やもふのゆかにふし、今をかぎりで見えし時、
角て秀衡、子を六人持て候らいしが、兄は錦木戸の太郎、二男伊達の二郎、三男和泉の三郎、
四郎基義、ひづめの五郎とて、五人は男子にて、乙は姫にてぞ候らいける。今を限りと見えし
時、兄弟五人の者共を、後や枕に近付て、イロカ、リいかに兄弟物を聞け。それ弓取のなき後に、
一門兄弟ふわなれば、フシかならず家をやぶるなり。兄は弟をれんみんし、弟は兄にしたがふべ
し。君をうやまい奉り、民をもふかくあわれむべし。其外神拜(いまつりごと)秀衡がなき後に、

ちが(違)ふる
正しくは義盛
かみ 袴を着けず
上表ばかりの意
此供より先に、
嫡子錦戸の太郎頼
高くと、極めて大
け高く、ゆいしく
能もすぐれ、し
男剛の者、強弓
にたてたり、謀か
くあるを、嫡子
にたてたり、謀か
十五より内に、設
たる子なば、男の
とて、當腹の二男
を嫡子にたてけり
義経八郎秀衡
謀叛の事
戸脱か
信夫郡か
刈田郡か
柴田郡か
安積郡か
葛田(一)に新田に
作る)郡か
本義か

す。こしもちこふをる事なけれ。コトハいかに和泉の三郎、高館殿に参り、君の御供申せ。それが
しが最後に、申したきしさいの候。忠衛承で、急ぎ高館殿に参り、此由角と申し上る。
判官大きに驚かせ給ひ、伊勢の三郎義森、龜井の六郎重清、かれら二人の御共とし、秀衡が館に
移らせ給ひ、秀衡な、めはよろかうで、五人の子供にかいしやくせられをき直り、手水うがい
をし、ひた、れの上み計りを着し、君に對面申し、只今我君を申し入る事、別つの子細にて候
らはず。秀衡こそ、砂婆の縁つきはて、冥道かう泉の旅に趣き候。子供あまた候らへ共、いづ
れも若き者共にて候程に、おそれながら、君を證人に立て參せ、所領がわけた候。先兄にて
候程に、錦木の太郎にこそ、惣領を申付度候らへ共、君御存じの如く、秀衡が子孫に於ては、伊
嫡子に惣領持する事の候らはねば、家の惣領を伊達の次郎に取らせ候。先東海道に取ては、伊
達の郡深延の郡、十五郡の所をば、惣領式にて候程に、伊達の次郎安衡に取せ候。西海道に取
ては、勝田の郡柴田の郡雲井、安泉、かれこれ十五郡の所をば、錦木戸の太郎に取らせ候。松
島七郡は和泉の三郎、しう釜六郡四郎元義、皮づめの郡をば末冠者に取する也。武隈、西海ぶん
二た郡をば、乙の姫に取らす也。片田の郡をば後家分に參らす。扱て又出羽は十二郡、小
國にては候らへ共、我君に奉る。御馬の草かり所とも思し召され候べし。あら名ごりをしいの
我君や。君の角て御座ある事、御本きにてはあらね共、世にしたがへばくるしからず。秀衡む

しんみやう(神明)
の誤寫か
思ひしに
權大夫、陸奥押
領使、奥御館と稱
す。藤原秀郷五代
の孫、巨理權大夫
經濟の長子
出羽押領使、中御
館と稱す。秀衡の
父としの誤か
二(護)脱か
冥道の誤にや

なしくなるならば、鎌倉殿よりも、我君討て參らせよと、たばかり御はん下るべし。それをま
こと、心得て、君に不忠をいたすならば、しんにやうのにくまれ蒙りて、秀衡が子孫たへぬべ
し。なにとてか世の中の、思ふ様にはあらざらん。御兄弟の御中直り、在鎌倉の御供をも申さ
ばやと思ふ、只今むなしくなる事よ。これのみ心にかゝるとて、不學の涙流しける。
コトハ子供承で、君にまつとう一心あるまじき由を申し上る。秀衡聞て、ほふく、うれしい物
かな。其儀で有るならば、未だ今生に息のかやううち、記書を書いて我れに見せよ。安き間の御
事とて、松島大明神の御護王申しおろし、兄錦木戸を始め、各記書をぞかいたりけり。
イロカリ、抑、記書文のいしうは、八幡太郎義家、此國(下)向有て、阿部の貞土せめほろぼし、
我らが先祖美達の權太郎清衡に、此國の守護を給いしより此方、其子に小次郎基衡、今秀衡迄
三代は、國おだやかに納り、忝なくも一天の君のせんじを承り、弓矢の家の名を得し事、しか
しながら當家の御おんたり。なんぞ此君の御恩にいとしからずや。これを位背申さば、カチキ
り神は凡天多釋、下はし大天王、下界の地には伊勢天照大神の始め奉り、王しやうちんしやう八
幡大菩薩、鹿島かんり、すわあつた、べつしては氏のしん、松島の大明神、惣じて六十六ヶ國
の大小のじん儀、入道をおどろかし奉る所を、なんぞ此君に二タ心あるならば、秀衡が子孫た
いはて、今生にては弓矢の冥加長くすたり、來世にてはならくにしづみ、ぐれん大ぐれんの氷

淨かむ世なるべし
起請を
三の訛なるべし
申しそ

達谷窟(たつこく)谷戸(やう)作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る
谷戸(やう)に作(は)る

跡澤郡上衣川村に
往來して森谷窟に
り麻衣川と云ふ東
尺頂平に断岩千
故にこれを断岩千
多頂と云ふ山深
記一山
思ひもよらぬ
思ひ
思ひ
思ひ
思ひ
思ひ
思ひ
思ひ
思ひ
思ひ
思ひ

にとちられ、浮世さら候まじい、依而状如件。文治四年十二月廿三日、錦木戸の太郎頼衡半
と書きければ、次ぎ弟も記書をかき、各々半のすへたるは、扱身の毛もよたつばかり也。
コト秀衡これを見て、記書のおもて眞明なり。先惣領安衡が記書を松島大明神の御護王天に
納むべし。錦木戸が記書を我君に奉れ。和泉の三郎が記書を某がカリ冥道の證かうに持べしと、
フシはだの守りにかけにけり。ツケ残る貳人が記書おはいに焼て、なんぢらご胎いにしつかと納
めよ。承り候とて、灰にやいて水に入れ、兄弟五人の者共が、次第く吞だりしは、ためし
すくなきしだいなり。(秀衡申しけるは)これ人の死しるには、末後の一つくと申す事の候。某か
しが一句には、戦きの用を申すべし。秀衡むなしくなるならば、鎌倉より判官討て參らせよと、
たばかり御判下るべし。一度の使に返事な申しさふ。貳度の使を討て捨よ。イロカ、リ三度にもな
るならば、鎌倉勢が立つべし。ツケ討て下ると風ぶんせば、軍兵共お相ふれさせ、伊達の大城戸
切ふさぎ、龜わり坂に關をする、(兄弟五人は)大將にて、西藤の辨慶をいくさ奉行にさだめて、さ
目ざましくいささせ、軍兵つぎる物ならば、高館殿に火をかけ、たつ國が岩谷か、切山せん
丈え、君を移し奉り、兄弟五人の者共は、干ばく、金澤、鳥の海、勝田、村田、秋田の城、四十八の
城かくにおつ取り込りて、五年も拾年もふせぎ戦物ならば、鎌倉勢の長陣は、思ひもよらぬ
事にてあり。さあらば時こく移て、御兄弟の御中は、つゆに直らせ給ふべし。若もあらばなん

等
ちらは、九郎に忠ある侍とて、關東を召し出され、くんかうけしや、にあづかるべし。警秀
衛死たりとも、草のかげにて某が、黒金のたぐととなりて、守るべきぞや子供とて、左も口書
にの給へども、次第くによはりければ、君を始て子供皆泪をぞ流しける。コトハ猶々申したき
事の候らへ共、あまりくたびれて候程に、カリしばらく休み申さんと、イロカ、リ是をさい後の言葉
にて、文治四年十二月廿四日の明ぼのに、フシ九十八と申すには、あしたのつゆときへにけり。
子供一族あつまりて、なげくと申すもおろかなり。事さらなげかせ給ひしは、高館殿にて留め
たり。果報なの義經や、二才の春の頃はなれ申せし父子をば、夢とも更にわかまへず。今秀ひ
らにはなるべ事、二親におくる(思ひ)かや。義經こそ世にあらば、いかなるおんおもあた
べきに、あまつさは秀衡が、ゆづりををる事どもを、何より以てはづかしけれ。なにと
り行く浮身ぞと、りうていこがれ給ひけり。只とに角に思にしくはあらじとて、御いろを召さ
れて野邊迄送らせ給ひけり。只々義經の御果報のつくる故とぞ聞えける。
コトハ去問、七日くを子供請取て、思ひくにともらいける。三十五日に當る日は、閻魔の廳
に參る日なれば、カリ義經申らはんと給ひて、イロ自から御經をあそはし、數のおそを供養し、
様々の御弔らひなり。草のかげにて秀ひら、左こそよるこび申すべきが、コトハさても父秀衡申
せし如く、あんにもたがわす、百ヶ日にも過るに、鎌倉より判官討て參らせよと、たばかり御

受領か

判 半錦木戸がたちに着く。(兄弟五人の者共が 開て拜見仕る。其御教書にいわく、(下す状)何とて奥の一徒は、世になき義經と云ふんし 頼朝にてきをなす條いわれなし。早く眞のひるがへし、義經がかうべを切て關東えつゝさぐるならばけしやうには、上野下野申斐・信濃武藏五ヶ國をあておこなう。同きしう領はのぞみたるべし。依て狀如件。文治五年三月一日、源の朝半とぞ讀たりけり。

コト(兄錦木戸が申しけるは) おのせの如く(此君) 世にて御坐なき義經を、主と頼み申さば、お下

同じの誤

の間敷き所にて、馬よりおるゝも無念なり。いざ此君を討申し、上野下野申斐・信濃武藏、五ヶ國を(玉わりて)五人して智行せんと申す。おのゝく此儀に同事けり。其中に三男和泉の三郎鳥帽子の先を地に付 涙を流し申す様、扱も父秀衡 我に記書をかへせ、世にも嬉しげにすぎさせ給ひて候に、今行程も無き間に、左様にむほんの起し、父を地獄におとし申さば、て名いかでのがるべし。此事に於ては、思し召し留まるべし。フシそれに證いんなきならば、忠衡は御免なり。きやうかう對面申すまじと、座敷を立て歸りしを、ほめぬ人こそなかりけり。

天命なるべし

向 免なり。きやうかう對面申すまじと、座敷を立て歸りしを、ほめぬ人こそなかりけり。コト(忠衡我宿所に歸へり、女房を咄出し、なんぼ面ほくもなき事の候。それをいかにと申すに、兄弟の人々の、我君を討申さんする工を、めぐらされて候ぞや。何んばあさましき) 事にては候らはずや。イロ フシ女房聞て、あら御いたはしやさむらう。秀衡殿にをくれさせ給ひ、今行

呼の誤か

たぐみ、謀計なんぼ

なんぼ

は候らはずや。イロ フシ女房聞て、あら御いたはしやさむらう。秀衡殿にをくれさせ給ひ、今行

なにとか

程もなき間に、兄弟の人々のてきとならせ給はば、扱て君はなにとかならせ給ふらん。警自から女(女)でもさむらとも、高館殿に參り、君の御供申(べき)が、扱忠衡は何にとか思し召さるらん。コト(忠衡此由聞くよりも、さらく別つのしさいにて候らはず。兄弟の人々のけしきには、今宵の内に、高館殿に夜討に寄る事も有り。いそぎ身付勢を參らせんと、くつきやうのつわ者を廿七騎すぐつて、カ、高館殿に參らせ、ク、御身は只打とけて、最後を知らぬぞあはれなり。

寄する

コト(扱ても錦木戸がたちえは、残る四人の兄弟の人々、さもあれ和泉の三郎が、我れくをせいし兼、坐敷をけ立て立つる物かな。先忠衡につめ腹を切らせ、九萬八千のいくさ神の血まつりにせさぬ。尤も然るべしとて、照井金澤鳥の海に、三千餘騎を相そへ、和泉が城にぞ寄にけり。かの忠衡が城と申すは、三方は衣川、吉方に堀をほり、さかもぎを引かせ、用心きびしかりけれど、げには寄手は案内者、又はにはかの事なるに、一二の木戸に押寄、時をどつあぐる。城の内のつわ者共、思ひよらざる事なれど、我もくも切て出る。爰をせんと、ふせぎ戦ふ。扱も高館殿と和泉が城、其間十八丁の處なれば、時の聲矢さけびの音が、手に取る様にぞ聞えける。判官武藏を召れ、和泉が城にあたて、時の聲のきこふるは、如何様兄弟の者共に、討れぬると覺たり。急きみつけとの御誕なり。承ると申して、御所侍三十五騎、和が郎等貳十七騎、カ、リほそなはでに懸て、駒を早めて打たりける。道にて武藏云う様は、ましてしばしかたなく、

みつぎせい、援兵

照 考説(六七〇頁)參

どつ下のとの字脱か

あつて

あつて

みつけ(應援せよの意)

泉の字脱か

カ、リほそなはでに懸て、駒を早めて打たりける。道にて武藏云う様は、ましてしばしかたなく、

かへつて

照井太郎高直(一説高春)泰衡の臣、後、文治の役に戦敗れて自刃す。墓陸前國柴田郡基神山の西北に在り。陸中國勢井郡照井にも其墓と稱するものを傳ふ

大勢の誤
本城、根城

此合戦と申すは、和泉にやしんがあらば社、たんだ我君えの、心かはりの合戦なり。高館の御所えも、やがて打て向ふべし。押しへだてられ叶ふまじ。いざや御所へかへて、君を守護し申さんと、みちよりも引かへす。これと申すも忠衡が、うんのつきたる處なり。

和泉が郎等申す様、主のせんとて候らへば、いとま申してさらばとて、駒にむちをもみそへ、まもみにくしてぞ急ぎける。照井の太郎が是を見て、すわや高館殿よりも、みつぎ勢の有るぞとて、左右にばつとぞのいたりける。陣の二つを懸割て、内え一所にくわはつたり。照井の太郎が申す様、是程の城かくに、時こく移て落ぬは、むげに不覺とおぼへてあり。出々高野先がけせん。我と思ふはん人々は、つゞげやと云儘に、長刀をよこたえて、眞つ先にこそすゝみける。つゞく軍兵たれくぞ。庭の六郎宇田の藤次間の兵衛を先として、七拾五騎にて切て入る。城の内の兵者共、杉橋高野先として、貳十七騎切て出で、爰をせんと、戦ふたり。此者共と申すは、かたきみかたと云ながら、あるいわおち甥兄弟なれば、他人よりもはづかしく、一足もしりぞかず、凌ぎをけつりつばを割り、切先よりも火えんの出し、爰をせんとと切り結ぶ。寄ては間中村古堀兄弟討るれば、城の内の兵者共、堀のはたで十七騎、枕をならべ討れたり。あるいは手おひくたびれ、城の内にぞ引たりける。寄手はさすが體勢なれば、荒手を入かえせめければ、一二の城戸をも打破られて、つめの城にぞこもりける。

コトハ去る間忠衡、兄弟の人々に向て、合戦すべきにあらずと、物の具もせて居たりしが、味方事々討死す。早城中え亂れ入ると聞ければ、小具足ばかりをかため、廣ろんさしておどりいづる。女房此見るよりも、カ、ゆむけのたもとをひつ留め、イ、それ引取のなきあとに思ひを殘しぬれば、ふ學の死にをする由を、承りてさむろうぞや。兄弟の若どもを、なにと成れと捨て、は行かじ。かなはじ、とも角もよき様にはからひ給へ忠衡殿。コトハ忠衡此由聞よりも、げにく

いむけ(射向)

原本、板

原本、施

がい(害)してか
大頁にも
兄弟の若者を三
刀にがひして
とあり

コトハ去る間忠衡、兄弟の人々に向て、合戦すべきにあらずと、物の具もせて居たりしが、味方事々討死す。早城中え亂れ入ると聞ければ、小具足ばかりをかため、廣ろんさしておどりいづる。女房此見るよりも、カ、ゆむけのたもとをひつ留め、イ、それ引取のなきあとに思ひを殘しぬれば、ふ學の死にをする由を、承りてさむろうぞや。兄弟の若どもを、なにと成れと捨て、は行かじ。かなはじ、とも角もよき様にはからひ給へ忠衡殿。コトハ忠衡此由聞よりも、げにく

わつとばかりを最後にて、同じ枕に押しふせて、(兄弟の若共を三刀にがひして) 我身をだいて

泣き居る、心の内ぞ哀れなる。イ母は此由見るよりも、あゝためしすくなき次第かなとて、兄弟にいだき付、しばらくまてよ若共よ、母がおつゝき手をひかへ、死出三津を行べしと、ふししづみてぞ泣きいたる。コトハ忠衛此よし見るよりも、あゝら名残おしいや女房、婦夫のちぎりも今ばかり、いとま申して更

ばとて、一間所につゝと入り、重め結の直垂の、四ツのくゝりをゆるゝと寄せ、糸日おどしの鎧、綿がみつかんで引立、踊りあがりて高ひも懸、ゆつて上帯丁としめ、太刀はき矢をおい弓取て、廣るんさして踊り出る。女房此由見るよりも、あゝらなげな忠衛殿、御身十八、自十四の秋よりも、へん時もはなれ申さず。ツ今此所にいたつて、我をば見捨給ふか。しばらく御持さむらへとて、一間所につゝと入、紅ないの二ツぎぬ、引つちがえてきるまに、萌黄

泉と供切て出る。心のがうなるも道理かな。西國八島の合戦に、義經の御供申し、能登の守の矢先に當て、むなくなつたりし。佐藤次のおお州五十四郡が其内にて、かくれも無き大力のがうの者、忠衛矢藏に上がれば、女房城戸をかためて、手おふた味方の軍兵に、しばらく息をつかせんとて、重立取てさしかざし、大手の木戸に向ひしは、實に頼もしうぞ見え

待の誤
くれなる
供(共)の下に
の字脱か
平教經、門脇中納言教盛の子、越前三位通盛の弟
三郎兵衛嗣信、信夫莊司元春が嫡男
四郎兵衛忠信の兄
(平家一、嗣信最後、後醍醐四二、頼信季養の條等参照)
重箱

にけり。

コトハ去問忠衛、矢ぐらの上よりも、大音上て申す。只今爰もとに寄られたる人々は、照井金澤鳥の海か。なんぢら程の云ひがいなしに、角云べきにはあらね供、儘に聞て能くかたれ。父のゆい言記書のばち、三代惣恩の主の久は、かれ是以て、天名如何でのがるべし。あはれ忠衛がいのち今一つほしいぞと云。一ツを我君に奉り、一つを思ひ残し置、兄弟の人々の、なれのは

てが見たいぞと云。只今某はなつ矢、なんぢらに在る矢にあらずと、兄弟の人々に、恨の矢一筋、受て見よと云儘に、三人張に十三束、取てからと打つがい、きり／＼と引きしをり、かなぐりはなしにかつきとはなつ。一陣にすゝんだる、金澤の九郎が胸枚にばつしと當り、押つけぐつとぬけ、裏に扣へたるばん場の兵衛が、兜の弓手のいかへしに、火花をちらして立たりける。

是をばあじめと仕り、矢だはねとひで押しだし、さし取引つめ散ん／＼に射たりける。くつ強の兵者を、十七八騎はらりといられ、すこし矢ごろ引しりぞき、矢つたねつくれば、矢藏らをゆらりととんでおり、討物のさやをばつし、婦夫共に切て出る。忠衛が手なみを、兼て知たる事なれば、荒に木の葉散る如く、おもてをあわする者はなし。にくしを／＼つめ、諸膝をなぎふすれば、うつ臥に臥もあり、兜の真向から竹わりに割れて、弓手馬手えのくも有り。忠衛が手

(七)はじめ(始)
矢たばね(矢把)なるべし
矢種(やだれ)
あらし(嵐)か
憎し追詰めなるへし

に懸け、屈囚の兵者を、廿七騎切臥れば、女房が手に懸、よき兵者を七八騎、手下にてなき臥れば、残りの兵者共に痛手うすでおふせて、四方えはつとぞおいちらし、婦夫手に手を取り組で、味方の陣のしづくくと引たるは、人間のわざでなかりける。

コトへ惣て寄手は奥方の軍兵二百八十騎討れたり。城の内の兵者共五十餘騎討死す。今は落行ければ、月王・武王丸とて、わらは二人ぞ候らひける。去問忠衡、二人の者を近付、如何になんぢらふせぎ矢を射。心しづかに腹切らん。尤も然るべしとて、武王丸は大手の矢藏に走り登て、爰をせんとふせぎ戦ふ。月王丸は火打つけだき取り出し、丁くとぶち付、屏風障子に火を懸、天下かすみと焼立る。去問忠衡、子供が死たる死がいのあたりにどうど居て、如何や女房、子供とつれて行けやとて、がいせんとしければ、女房刀にすがり付、あゝら愚かなり忠衡殿、自がいのち惜むべきにはあらねども、女は何と死たりとも、苦しからぬ事にてさむろうぞや。さすが御身は名を得たる弓取りにてましまさば、フシあしく自がいをしたまひては、かばねの上のふかく也。まづ御腹を切りたまへ。御供申すさむろうべし。ツメさらば忠衡切るべしと、腰の刀引ん抜で、弓手のわきにがばと立て、馬手をきりくと引まわし、返す刀を取り直し、心元にさし立、袴の着きわへをしをらし、ぞふをつかんでくり出し、すん／＼に切て捨、如何にや如何にと云ければ、女房此由見るよりも、すゞしく切らせ給ひたる。しばらく御持さむらいへと

如何なる様にの意

し、の訛なるべし

待の誤候へなり

て、和泉が刀おつ取て、切先をふくんで、うつ臥にかつばとふす。女房は二十九、忠衡は三十三、其外の者共も、同じけむりと成たりしは、ためしすくなき次第なり。かの忠衡が真中をば、きせん上下おしなめて、かんせん者はなかりけり。

笛の巻

牛若笛のまき物語

うわひくうーりらふらふら
 うまえつてのくそんまいの
 さいふてとりのあまも
 ぶつんこくをいりてんく
 ーはりしれまのわしんま
 のりまのまはあひまは
 のまひるまはまはまは
 けいしつをわらこのま
 わしひまふくまはまは
 ままんまはまはまは
 のまままはまはまは
 くれつひまはまはまは
 まままはまはまは

〔二〕さるほとに
 〔高野本〕
 〔三〕山〔高〕
 〔四〕縦に引く眞の末を
 はれずして押へと
 むること
 〔五〕新類従本
 〔六〕ならひぞ〔新〕〔高〕

〔二〕間
 さるあひだ、牛
 若かどの、鞍馬
 〔三〕寺
 のてら東光坊にて
 學問究はめた
 がくもんきはめた
 まふ。筆を執
 ての筆法に、魚
 りんこさうすい
 露點孔子老
 う子の筆のあと、
 文書敷かずを
 ぶんしよのかすを
 残さすならひき
 はめたまひける。

去間東光とうかうの阿闍梨、常盤の御前
 にかしこまり、見ぐるしげなる草庵
 を結で持て候。庭の花の御興にも、
 御出とこそ申されたれ。常盤聞しめ
 し、呼すとも尋行、坊中の案内をも
 見ばやおぼしめさるれば、時刻う
 つさず御出ある。忠切興を盡し、爰
 をせんとぞきらめきける。酒も半
 成し時、常盤仰せけるやうは、いか
 にやとうかう。牛若と申て、世にな
 しわらは一人あり。別當に參らする。
 よくば弟子ともおぼしめせ。あしく
 ば下の草きりともおぼし召れさふら
 へ。憐人なくしては、いかでかかな

おほしめすは〔高〕

常 管心 雅兒 既 ときはおほしめすは、それちこのもてあそびは、なに／＼と申とも、くわげんにすぎたる事はなし。その中にとつても、ふえはいちのめいぶつなれば、よからんふえをもとめてくらまへのばせ、うしわかにとらせばやとおぼしめし、みやこまぢかきよどの津のみだ次郎がもとよりも、ふえをくわんかいとりて、くらまへのばせたまふ。うしわかなくめにおぼしめし、さらぎなかのころよりも、ふきはじめさせたまひつ、そのとしのかみな月のすゑのころになりければ、百二十てうしのがくをばふききはめさせたまひけり。うしわかこゝろにおぼしめすは、それ人のもつた威徳から、いとくをきかねば何ならず。このふえのいとくをきかばやとおぼしめし、よどの津のみだ次郎をぞめされける。

ナシ〔新〕〔高〕

みだ次郎うけたまはりて、くらまのてら東光坊にまい

〔高〕

承 馬の寺

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

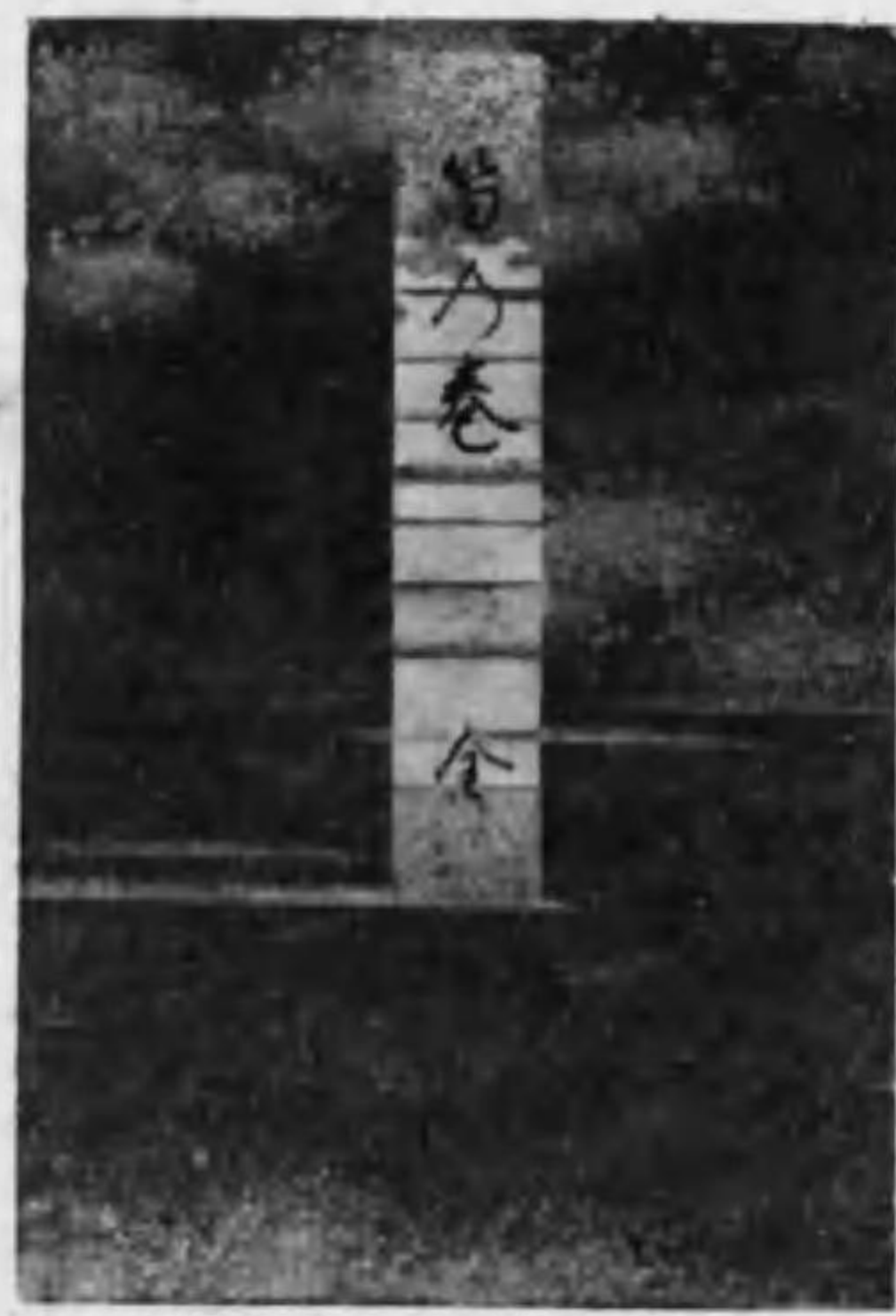
吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ

ナシ〔新〕〔高〕

吹こそきはめ給ひ



本寫藏氏之成好高士博學文

うもんじ 珠 文 大しや 聖 おはしま 山 ゆせんに 二〇 霊 やうじ 天 てんちく 二〇 霊 やうじ 二〇 霊 やうじ 二〇 霊 やうじ

ひ侍らふべき。みなし子にてさふらへば、よきやうにとりたて、御らんせよとぞ仰ける。とうかう聞しめし、やがてりやうじやう申、別當自身御迎に参らる。角て牛若殿、鞍馬にあり給ひ、學文せさせ給ふに、師が一字を教ゆれば二字と悟り、二字を教ゆれば百字にくらからず。筆を取てのひつばうに、魚鱗虎爪すいろのてん、くしらうしの筆の跡、文書の數を残さずならひぞ盡し給ひける。寺門他山のその中にも、かゝる名譽の兒學匠の、ありつべしとも覺えずと、譽ぬ人こそなかりけれ。六波羅原におはします常葉傳へ聞しめし、御悦はかぎりもなし。それ兒のもてあそびには、なに／＼と申とも、管絃に過たる事なし。その中にとつても、笛は一の名物なれば、よからん

光仁天皇寶龜五年六月十五日誕生。仁明天皇承和二年三月二十一日、高野山に入寂。二十一年十月弘法大師の謚を給ふ。根武天皇延暦二十三年遣唐使藤原葛野麻呂に隨ひて入唐。宗々傳ふ。しやうれう寺〔高〕長安青龍寺塔院の和尚。くわ〔新〕香開。摩羯陀國五山の、高峯。鷲峯、又靈山。釋迦如來説法の聖地。ま〔高〕

牛若殿の、ましますていしやうにかしこまる。うしわか殿は御らんじて、よどの津のみだ次郎とはなんちが事か。さん候と申。此ふえはかんちくか本ちくか、きかまほしやととほせけり。みだ次郎うけたまはりて、さん候。このふえと申は、さぬき國びやうぶが浦らにて、ほうき五年にむまれたまふこうぼう大しにつたうし、青龍寺にましますけいくわおしやうをしと頼の、しんごんのひみつをきはめ給ひわれ入唐のつ

笛をかひとつて、牛若にとらせばやとおぼしめし、都間近き淀の津の彌陀次郎がもとよりも、笛をくわんかひ取て、鞍馬へ上せ給ひけり。牛若君斜におぼしめし、衣更著半の比よりも、吹はじめさせ給ひつ、其としの暮には、百廿でうのがくをば吹こそ覺え給ひけれ。有時牛若殿、此笛の出所を尋ばやとおぼしめし、みだ次郎をぞ召れける。みだ次郎めしと承、いそぎ鞍馬にあり、牛若殿の御房に参り、庭上にかしこまる。牛若殿は御らんじて、汝か淀の津のみだ次郎とは。さん候と申けれど、此笛は漢竹か梵竹か、きかまほしやと仰ければ、みだ次郎承、さん候此笛と申は、一とせ讚岐の國屏風の浦にて、寶龜五年に生れ給ふ弘法大師入唐有り、しやうりや

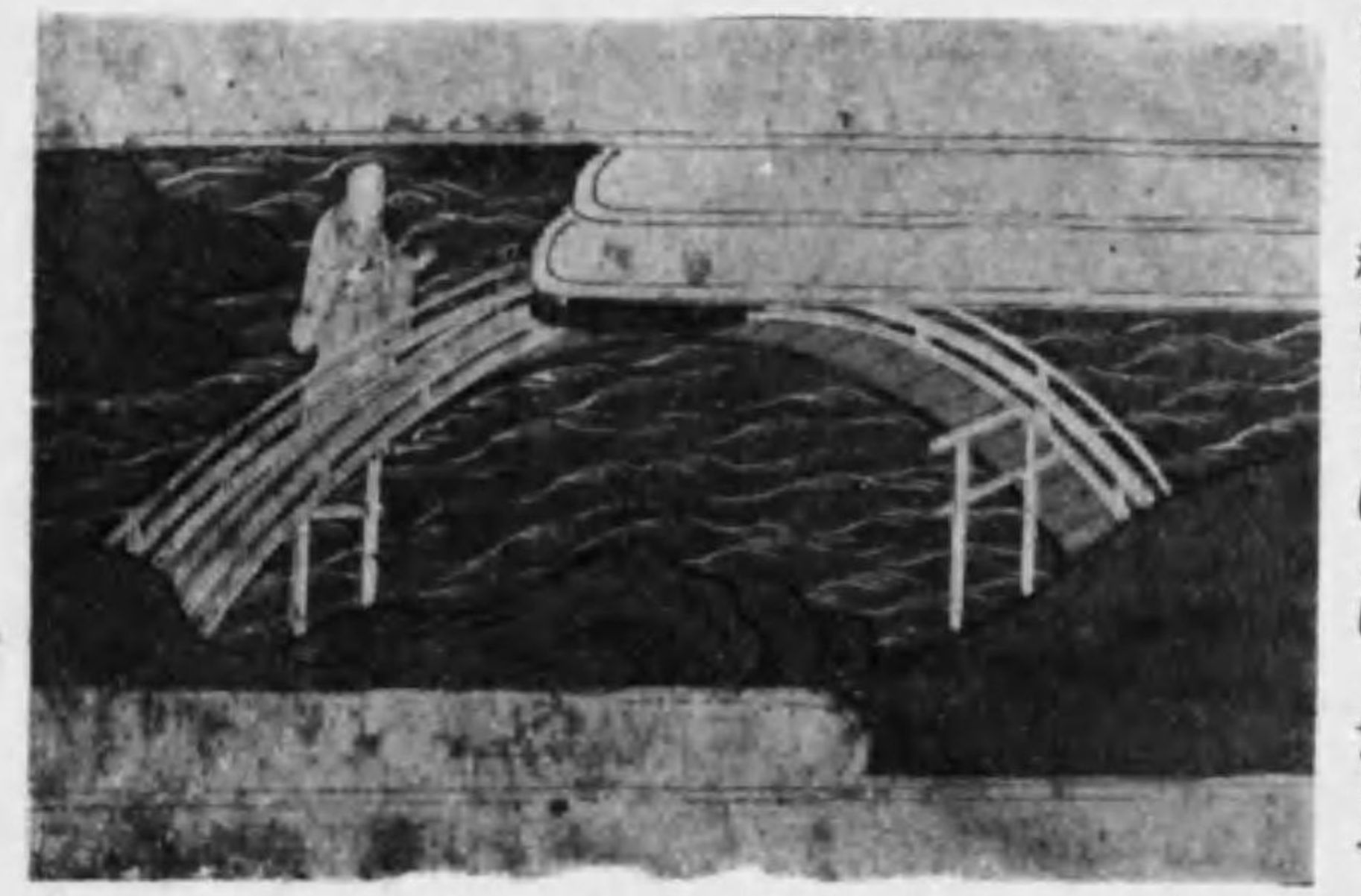
(一)新[高] 千の誤植なるへ
 (二)新[高] 千の誤植なるへ
 (三)新[高] 千の誤植なるへ
 (四)新[高] 千の誤植なるへ
 (五)新[高] 千の誤植なるへ
 (六)新[高] 千の誤植なるへ
 (七)新[高] 千の誤植なるへ
 (八)新[高] 千の誤植なるへ
 (九)新[高] 千の誤植なるへ
 (十)新[高] 千の誤植なるへ

ゆを、おがみたてまつらばやとおぼしめし、しんく
 とある遠島をわけてこえ給ひけるほどに、かうしうと
 いふ國に十のみちわかてり。その中にとつても、かう
 なんとといへるみちこそ、せきげんのみなみななれ。この
 道にさしかかり、たいたくの野邊を行き過ぎて、は
 んにやたいをぞおがまれける。かのはんにやたいと申
 は、なんがく大しひさしくをこなひ給ふ御てらなり。
 いまは日本にむまれては、まやどのわうじしやうとく
 たいしとも申なり。しゆじやうさいどのじひふかし。
 南岳大師とふしおがみ、又五千里を行き過ぎて、
 ぎよくせんじとて御てらあり。かのてらと申は、なん
 がく一のでし、ちき上人の御てらなり。かの天だいに
 かよひ、みのりをとかせたまふなり。あなたへも五せ
 んり、こなたへも五せんり、一まんりのみちなるを、
 夜よるひる七日にゆきかよひ、みのりをとせ給ふなり。

うじにおはしますけいくわ和尚を師
 と頼み、眞言の秘法を究めさせ給ひ、
 我入唐の次に、天竺靈鷲山におはし
 ます大聖文珠をおがまんため、しん
 くとある遠島を、わけこえ給ひけ
 る程に、たいしうのおきを通り、か
 うしうといへる國に、八十の道わか
 てり。その中にとつても、かうなん
 といへるはせきげんの南なり。彼國
 にさしかかり、大たくの野邊を行過、
 かうたくの堤を傳ひつゝ、般若臺を
 ぞおがまれける。彼般若臺と申は、
 南岳大師久しくもおこなひ給ふ御寺
 なり。今日日本に生れては、まやどの
 わうじ聖徳太子とも申なり。衆生濟
 度の慈悲深き、南岳大師とふしおが
 み、又五千里を行過て、玉泉寺とて
 御寺あり。彼寺と申は、南岳一の弟
 子智顛上人の御寺なり。彼天台に通

(一)新[高] 千の誤植なるへ
 (二)新[高] 千の誤植なるへ
 (三)新[高] 千の誤植なるへ
 (四)新[高] 千の誤植なるへ
 (五)新[高] 千の誤植なるへ
 (六)新[高] 千の誤植なるへ
 (七)新[高] 千の誤植なるへ
 (八)新[高] 千の誤植なるへ
 (九)新[高] 千の誤植なるへ
 (十)新[高] 千の誤植なるへ

故 かるがゆへに御しやくにも けいやうわうふくとしや
 うばんりとときたまふ。
 加ふるえんたうをわけこし給ひけるほどに、たうてん
 ちくのさかひなる
 流沙の著給
 りうさ川につきた
 まふ。かの河のひ
 ろき事は、三百二
 十餘町なり。波
 はんでんにさかの
 ぼり、いさをあ
 らひながせり。
 うさ川とかきて
 は、いさごながる
 川かはとよむ。さ
 うれい山のふもと



本 圖 著 編

ひ、御法を説せ給ひけり。あなたへ
 も五千里、こなたへも五千里、一萬
 里の道なりを、夜日七日に行歸り、
 御法を説給ひけり。故に釋文にも、
 けいやうわうふくとしやうはんりと
 とき給ふ。コトかゝるれいほうをわ
 けこえ給ひける程に、唐天竺の界な
 る、りうさの川に著せ給ふ。彼川の
 廣き事、さんばく廿余丈也。水碧天
 にひたし、波萬天にさかのぼり、は
 やくしてみなざれば、砂をあらひな
 がせり。流沙の川とかひては、砂な
 がる、川とよむ。そうれい山の麓
 に、一のはし渡る。しやつけうと是
 をいふ。石橋とかひては、石のはし
 とよむ。故にはりをならべてすのこ
 とし、るりをつらねてかうろとす。

あり高
神曲石橋参照
ナシ高
もつて高
には新高
な新高

に、一のはしわたる。石橋とこれをいふ。しやつけう
とかきては、いしのはしとよむいはれに、はりをつら
ねてはしらし、るりをならべてかうらんとす。はし
げたはしらはめめうをつくりつけ、はしのうへせばく
して尺にもたらず、とをくしてそれる事は、にじをな
せるがごとくなり。みるにきもきへひざふるひ、あし
すさまじく身のけだち、わたるべきやうさらになし。
さりともこれをわたらずば、はくうんばんりをへだた
りて、何としてかは参るべき。わたるにこそとおぼし
めし、いのちをすて、わたらるゝ。ほうりきなればさ
ういなく、はやむかひにぞつき給ふ。
みなかみさしてよちのぼり、さうれいのみねにあがり
つゝ、はるかのそらを見給へば、夕日ほどもなかりけ
り。てにとるばかりちかくして、かすみはたにのそこ
にあり。らいでんくもをひびかし、風せううんをはら

はしげたはしらは、めなうを造り
のべてあり。遠く渡りてそれる事、
にじをなせるが如くなり。見るにき
もきえひざふるひ、あしすさまじく
フ身のけたち、渡るべきやう更にな
し。弘法此由御らんじて、さりとも
是を渡らずば、白雲萬里を隔りて、
何としてかは参るべき。渡るにこそ
とおぼしめし、命をすて、渡らるゝ。
法力なれば相違なく、むかひにつか
せ給ひけり。川上さしてよちのぼり、
そうれいのみねにあがりつゝ、はるか
の空を見あぐれば、夕日ほどもな
かりけり。手にとるばかりちかくして、
霞は谷の底にあり。雷電雲を響し、
風に雲をはらつて、きんばくはこと

つ高
ちん新高
とうし一人高
ひて高
聞召高
ま高
されて高
へきそ高
し高
千里之行、始ニ於
足下
(老子第六四章)
し高
天ちくを高
さむ新
な新
よらすた、高

ひて、きんばくはことにちんくたり。こゝにはつせ
んどうじゆきあひ給ひ、いづくより何かたへとをるも
のぞととひ給ふ。こうぼうきこしめされて、これはじ
ちいきのこうぼうなるが、てんちくりやうじゆせんに
おはします大しやうもんじゆをおがまんため、これま
でまいりて候。どうじきこしめし、これよりやうせ
んじやうどへは、はくうんばんりをへだりて、何と
してかはまいるべき。もどれとの御ちやうなり。こう
ぼうきこしめされて、ばんりのみちも一あしの下より
つゞく事なれば、こゝろながくあゆまば、などかまい
らで候べき。どうじきこしめされて、をろかなり。な
んちはけしにたとへたるぞくさんくの小僧が、唐土
をこゆるだにもありがたき事なるに、ましててんちく
あゆみすぎ、りやうせんじやうどへまいらん事、なか
くおもひもよらぬ事也。たゞもどれとの御ちやうな

にちらんたり。コトハかゝりける處に
はつせんどうじ行逢て、いづくより
いづかたへ通る者ぞと有しかば、是
は日城の弘法と申なるが、天竺靈鷲
山におはします大聖文珠を拜まんだ
め、是まで参て候ぞ。りやうせんへ
の道傳へを、をしへてたべとぞ仰け
る。どうじ聞しめされて、是より靈
山淨土へは、白雲ばんりをへだり
ぬ。年をかかねてあよむとも、いか
でたやすく参るべき。はやかへれと
ぞ仰せける。弘法聞し召れて、萬里
の道も一足の下よりつゞく事なれ
ば、心長くあゆまば、などか参らで
候べき。おしへてたべとぞ仰ける。
どうじ聞し召れて、汝はけしにたと
へたるぞくさん國の小僧が、唐土を
こゆるだにも尊き事なるに、まして

開召〔高〕
ナシ〔新〕高
共〔高〕

別脱
と新〔高〕

り 弘法 ころばうきこしめされて、國は小國なれども、じ
ちいきとなづけて日をかたどれる國なり。てんちくは
そのなたかけれど、月氏國となづけて月をかたどる國
なり。たうどひろしと申せども、しんたん國となづけ
てほしをかたどるくになり。國は大小にはよるべから
ず。たゞちろそほんにてあるべけれ。どうじきこし
めし、おもしろし、こうぼう、ちろくらべにはまいら
ん。さてこうぼうは日本より、これまでたづね來れる
は、愚癡の僧にあらすや。もんじゆもころのうち
にあり。りやうじゆせんもころにあり。むねのほと
りにもちながら、えんたうをたづぬるは、ぐちのそ
にあらすや。弘法 ころばうきこしめし、おもしろし、あ
どうじ、法にはじりのふたつあり。ころのうちのも
んじゆは、そのもんじゆこれなり。りやうじゆせん
のもんじゆは、べちのもんじゆこれなり。ときらへば

や申さん天竺を、歩み盡して參らん
事、おもひもよらぬ事なるべし。唯
歸れとぞ仰ける。弘法開し召れて、
國は小國なれ共、名を日城と名付て、
日をかたどれる國なり。唐土ひろし
と申せども、震旦國と名付て、星を
かたどる國なり。天竺其名高けれど、
月氏國と名付て、月をかたどる國な
り。ツ國は大小にはよるべからず。
唯智恵こそ本にてあるべけれ。どう
じ開しめし、面白し弘法。智恵くら
べ成ならば、いでく更ば參らん。
扱弘法は日本より、是迄尋ね來れる
は、愚癡の僧にあらすや。心の内を
たづねば、靈鷲山も心にあり。文珠
も心の中にあり。むねの邊りに持な
がら、遠島を尋るは、愚癡の僧にあ
らすや。弘法開しめし、疎かなりあ
の童子。法にはじりのふたつあり。

つ〔新〕

請見か、所願か
ま〔新〕誤植か
ナシ〔高〕
い〔高〕

阿卑囉時劍裝變阿
の略

共〔高〕
もんじ〔新〕

慧 ころばうきこしめされて、國は小國なれども、じ
ふになるを、ちしやとは申候ぞ。どうじきこしめし、
ことばのしよけんむやくなり。めいよをげんじて、き
どくをみせよ、もちろん。きどくはなにをあらはさん。
紙 かもなくふでもなくすみもなくして、只今もじをひ
とつかきてたべ。弘法 ころばうきこしめし、かゝんず事は
やすけれど、どうじのきどくをまづみせよ。いでく
さらばかゝんとて、はしる雲にむかつて、あびらうん
けんとゆびをふる。あらしに雲ははやけれども、ぼん
じはちつともみだれず、あざくところをみえにけれ。
弘法 ころばう御らんじて、しゆせうなり、あのどうじ、さ
らばかくとのたまひ、ながるゝみづのおもてに、龍と
いへるもじをかく。さしにもみづははやけれど、もじ
はちつともみだれず、おびをむすべることくに、あざ
くところを見えにけれ。どうじ御らんじて、あの字に

心の中の文珠はころの文じゆ是也。
靈鷲山の文珠はべつの文じゆ是也。
べつときらへばころもなし。ころと
きらへばべつもなし。じりころべつ
の不二成を、あふ、智者とは申候ぞ。
どうじ開しめし、こと葉のしよけん
むやくなり。名譽をげんじてきどく
を見せよ。もちろん。きどくは何を
あらはさん。紙もなく墨もなく筆も
なくして、唯今文字をひとつかいて
たべ。弘法開しめし、かゝんず事は
やすけれど、どうじのきどくを先見
せよ。どうじ開しめし、いでく更
ば書んとて、はしる雲にむかつて、
あびらうんけんと指をふる。嵐に雲
ははやけれども、文字はちつともみ
だれず、あざくところを見えにけれ。
弘法御らんじて、殊勝なりあのどう
じ。いでく更ば書んとて、流る水の

術(高) ナシ(新)(高)

點をうつつてこそ、りうとはよまれ候へ。こうぼうきこしのし、うたんとす事はやすけれども、りうとならんがいぶせさに、さてこそてんはりやくしたれ。なに程の事のあるべきぞ。たぐうち給へ、弘法。ささらばうつとのたまひて、ひとつのてんをうち給ひ、いまだその手もひかぬまに、いかづちなつてあめくだり、大水出来たり。みづばなをみた給へば、もゝいろの大龍



本 蔵 者 編

おもてに、たつといへる文字をか。さしにも水は早けれども、文字はちつともみだれず、帯をむすべる如くにて、あざく、とこそ見えにけれ。どうじ御らんじて、あの字に點を打てこそ、りうとはよまれ候へ。弘法聞しめし、うたんとす事はやすけれども、龍とならんがいぶせさに、扱こそ點はりやくしたれ。何程の事のあるべきぞ。唯打給へ弘法。いでく更ばうたんとて、ひとつの點を打給ふ。いまだその手も引ぬ間に、いかにうちなつて雨くだり、大水出きたつたり。水ばなを見給へば、百尋の大龍が、かしら高くさし上、水に尾をたへて、大木古木の枝くだけ、岩尾ながれて下る音、地震のゆるが如くなり。弘法御覽じて、すはや水

術(高) みたまへば(新)(高) ひ(高)

が、かしらをか高くさしあげ、みづにをいたひて、大木枯木のえだくだき、いはをながしてくだすを、地震のゆるがごとし。すはや見よ、どうじにげたまへとありしかば、どうじちつともさはがす、こくうに

古(高) 水(高)

御たちある(新)(高)

に(新)(高) にそびへたる(新)(高) ナシ(高) なは(高) 拘(高) 頭(高) 傳(高) 率(高)

あがり雲をふんで、さらぬていにてたち給ひける。いたはしや、こうぼう、にげ給へとありしかば、こうぼうちつともさはがす、ばんじやくのゐんをむすんで、河のおもてへなげ給ふ。二十余ちやうの大ばんじやくとなりしかば、そのうへにとびあがり、とつこをにぎり、こうぼう、しばらくねんじゆしたまへり。どうじ御らんじて、しゆせうなりとよ、こうぼう、われをたれとかおもふらん。りやうじゆせんのもんじゆなり。いでほんたいをあらはさん。うでんわうはなきか。しとてこよとありしかば、をつとこたへてほどもなく、金のほうくわんをいたゞき、せきいにけんをはき、し

よ。どうじにげ給へと有しかば、どうじちつともさはがす、こくうにあら雲をふんで、更ぬていに立給ひ、いたはし、弘法。にげ給へと有しかば、弘法ちつともさはがす、ばんじやくのゐんをむすんで、川のおもてへなげ給ふ。廿余丈にそびへたる大ばんじやくと成ければ、その上にとびあがり、とつこをにぎり弘法、しばらくねんじゆし給へり。どうじ御覽あつて、あらたつとしや弘法。我こそ天竺りやうじゆせん文珠なれ。あれまらんず久しさに、是迄迎にきたりたり。いで本體をあらはさん。うでんわうはなきか。獅子いてこよと有しかば、雲の中に聲

螺鈿(二)か
ナニ(三)新(高)

ざ(新)

藥師瑠璃光如來の
所居の東方の世界
所謂文殊師利菩薩
摩訶薩

右の脇士は普賢菩薩

ナニ(高)
ナニ(高)
やう(新)
のとか(普)高

子には、らつてんのくらを置き、御まへにひつたつる。
童(三)子(三)すなはちもんじゆとなり、五(色)し(光)きのひかりをば
なちつ、しにめされたりければ、ところはやがて
浄(三)土(三)なり、りやうせんじやうどこれなり。そも
くもんじゆと申は、じやうるりじやうどのそのなか
に、八(大)ばさつの惣一なり。行者をむかへとりては、
極(六)楽(六)送(六)をくらる。あるときは、りやうせんじや
うどにて、ほつけのすいさうをとき、またあるときは、
寂(滅)道(場)だうちやうにして、三世諸法のしつきをた
て、しの上にしては、またしやくそんのひだりのわ
きにたち給ふ。かゝるありがたき大しやうもんじゆを、
目のあたりにおがみ給ふこぼう大しの御ころ、さ
こそうれしくおぼすらん。もんじゆかかねておほせけ
るは、まつせの衆生のまよひには、うざうむざうこれ
おほし。うざうといへるころは、よろづのものをあ

あつて、おつとこたへて程もなく、
金のほうくわんをいたゞき、せきゐ
に劍をぞはひたりける。しにはら
つてんのくらを置き、御前にひつた
つる。どうじ則文珠となり、五色の
光りをはなしつ、獅子に召れたり
ければ、所は頓て浄土となる。靈山
浄土是なり。抑文珠と申は、じや
うるり浄土のその中に、はつだい菩
薩のそ一也。
行者を迎へとつては、極樂浄土へ送
らる。有時は靈山浄土にて法花の
瑞相をとき、又有時は則寂滅道場に
して、三世諸法の實地をたて、一念
しやうしゆを一音にし、無相無實の
相(著)をちやくし、じし(う)へにして、
又釋尊の右の腋に坐し給ひ、一乘(三)
んまいほつきして、みだの願をたて

も(高)
ナニ(高)
一念不生、即名爲
佛(華嚴經要略)
もんじゆの……を
まじりしんし
つ(眞實)のほとけ
なれ。今此みちを
まほつて(高)
心からの眞の
ぼ(新)

り(観)とみる。これはうざうのまよひにて、ちごくへおつ
るはじめなり。またむざうといへるころは、よろづ
のものをなしとみる。これはむざうのまよひにて、ち
ごくへおつるはじめなり。ねんふしやうなるをこそ、
もんじゆのちると申て、ぞつこんの佛になるものぞ。
道(弘)法(珠)をまもり、はや下向せよとの御ちやうなり。こ
うばうよくちやうもんありて、あらしゆせうや候。
さらば
御いと
ま申と
て、そ
れより
もどり
給ふ。
さうれ

給ふ。かゝる有がたき文じゆを、ま
のあたりにおがみ給ふ、弘法大師の
御心、左こそ嬉敷おぼすらん。文珠
重てのたまはく、末世の衆生の迷ひ
には、うざうしうちやく是おほし。
うざうといへる心は、萬の物をあり
と見る。是有相の迷ひとて、地獄
へ落るはじめ也。又萬づの物をなし
と見る。是もたんくうの迷ひとて、
地獄へ落るころ也。唯一念不生成
をこそ、文珠の智恵と申て、即根佛
に成物なれ。此旨をまほつて下向せ
よとぞ仰ける。弘法聞しめされて、
御名殘惜ふは候へども、更ば御暇申
とて、それよりも下向し給へり。そ
うれいの山の麓に、ひとつの瀧落に

ナシ(高)
あり(高)
のありけるを(高)
ひ(新)(高)

いて(高)

豫州を誤れるか
支那寺院の始、漢
の明帝創建、白馬
經を載して天竺よ
り來れるに因り
今の河南省洛陽城
外に在り

佛法(高)護持の
れい(靈地)に
ひて(く)う(高)

紀伊國の(高)

く(高)

かの誤、國上寺
り(高)

い(山)のやまのふもとに、ひとつのたきおつる。かのたき
のさうがんに、三ぼんのたけあり。弘法劍をぬ
きもつて、すゑのよを三ふしこめてきりたまふ。ちぎ
りのあらば日本にて、めぐりあへやとのたまひて、川
にぞながし給ひける。

それよりもとはし渡り、はや大たうにつぎ給ふ。た
うどのてらのはじめは、やうしうのはくばじ、ことさ
らたつとかりけり。歸朝のこちがふきければ、みや
うしうに出給ふ。御ふねにめすときに、もつところの
佛具、五(五)とつこ(三)さん(三)をこく(三)う(三)へなげ(三)させ(三)たま(三)
ひけり。しうんく(下)だつてこれをまき、はるか(海)のう(三)み(三)を
わけ(三)こ(三)して、きの國(高)野(高)のみ(高)ね(高)にと(三)ま(三)れ(三)り。三(三)さん(三)こ(三)
のまつと申事、このときよりのいはれなり。とつこは
は(高)の(高)み(高)や(高)こ(高)なる、とうじのたうにと(三)ま(三)れ(三)り。五(三)こ
は(高)る(高)ち(高)この(高)國(高)が(高)み(高)の(高)寺(高)にと(三)ま(三)れ(三)り。

しま(高)

堀(新)

な(高)
な(新)(高)
未詳
未詳
壹岐のかざもと
(風本)の誤か

秘法か
いは(異法)(高)
は(高)

それよりもだいしは、のろしまときさみのしま、はる
かのにしに御らんじて、ほり川といへるみ(水門)なとこそ、
たうどのわうのみやこより、ながれ出たる大河なれ。
それより三日はしりすぎ、かしらなしと云津こそ、も
ろこしぶねのとまりなれ。きみしうといへるおきすを
すぎ、かうらい(唐)のさかひなる、もめい(島)しまを
しりすぎ、きやうのみさきはくたいしゆもころいのみ
せんも(島)しまきとのしまもろみのしま、ふね(船)こし
ぎてつちよりも、あくればつしまのうちにつく。いきの
もとおりはしりすぎ、いきのさかもと目にかけて、あ
はやくせんのはこざきよ。はかたの津こそみゆれと
て、各(勇)い(折)さむ(沖)ふしに、あく(風)ふう(俄)にはかにふ
きおちて、かうらいのおきすなる、きとのしま(島)でふ
きもどす。大しひるんをむすび、われまたきてうする
事、ひほうのためにあらず。しゆじやうさいどのため

ごくは越後の國がみの寺にとま
れり。それよりも大師は、御舟にめ
され、のろ島ときさみの島をはるか
の西に御覽じつ、フ堀川といへる
みなとこそ、唐土の王の都より、な
がれ出たる大河なれ。それより三日
はしりすぎ、かしらなしといふ津こ
そ、もろこしぶねのとまりなれ。き
みしうといへるおきすをすぎ、高麗
唐土の堺なる、もめい(島)しまを(島)しり
過、きやうのみさきはくたんじゆも
ころいのみせんも、島きとの島も
ろみの島、ふなこし(過)つちよりも、
明れば對馬の(内)ないにつく。壹岐のさ
かもとはしり過、いきのもとおり目
にかけて、あは筑前の箱崎や、はか

れは〔高〕

〔高〕

龍女〔高〕
あらはれて〔高〕



ませ給ひ〔高〕
ための風〔新〕〔高〕
王〔高〕
しよ〔新〕〔高〕
ナシ〔高〕
御座あら〔新〕
あるなら〔高〕
先我を〔高〕

ま一度唐土へむかへんためなれば、龍神のしわざならすとて、かきけすやうにうせにけり。こうぼうきこしめされて、そのぎにてましまさば、まづ日本へつけ

なり。じゆんぶ
うたべや龍王
と、きせいを申
させ給ひけれ
ば、なみのうへ
にどうじ一人た
ゝすみ、このな
みかせと申は、
かうらい・たう
どのかみほと
け、大しになこ
りをおしみ、い

たの津こそ見ゆれとて、各いさむ折
からに、悪風俄にふいて来て、高麗
の沖洲なるきとの島まで吹もどす。
コトハ大師ひるんをむすび、我又歸朝
する事、いほうのためにあらず。衆
生済度の爲なり。順風たべや龍王と、
きせひを深申さるゝ。かかりける處
にびんづらさうにゆうたるどうじ、
浪の上になすみ、此風と申は、大
唐の佛達大師に名残をおしみ、今一
度大唐へむかへんための風なれば、
まつたく龍王のしよいならずと申
て、かきけすやうに失にけり。弘法
開しめし、其儀にてあるならば、ま
づ日本に付てたべ。日本に著物なら

紀伊國伊都郡高野
山、嵯峨天皇弘仁
七年創建、空海年
四十三歳
かんとり〔高〕
ふす〔新〕〔高〕
ありにけり〔新〕
有けり〔高〕
おしい〔新〕
おしいそ〔高〕
有に〔新〕〔高〕
けるとかや
〔新〕〔高〕
三八五頁頭註(六)
参照
正しくは三十一
歳
ナシ〔高〕
正しくは平城天
皇大同元年八月歸
朝、三十三歳
ナシ〔高〕
ふせやの物語にも
見ゆ
(五五頁参照)
しのび 徳〔高〕

給てたべ。われ日のもとにつくならば、たうどのてらを
學まなび、こんがうぶじとがくをうつて、かうらいたう
どのかみほとけをくわんじやう申、あれにて御めにか
いらんと、きせいを申させ給ひければ、かちとりども
がこれを見て、あそこなるほうしは、何をいふてさ
やくぞ。しなんことがめに見えて、ひとり事をするや
とて、わらふものもあり。たれもいのちはをしきとて、
なげくものもおほかりけり。
大師のきせいまことにて、をひてぞふきにける。すぎ
にしくわんむてんわうの御とき、三十七にて入唐まし
て、さてまた四十七にて、さかのていの御ときに、
歸朝
御きてうとこそきこえけれ。されども人はなどやらん、
知らざりけるぞふしぎなる。つくしのはかたにあがり、
ふちおひとつてかたにかけ、みやこへのぼり給ひしが、
きさうりをしのきあるにより、さぬきの國びやうぶのう

ば、唐土の寺をまなぶべし。金剛峯
寺とがくをうつて、大唐の佛達をく
わんじやう申、あれにて御目に懸ん
と、祈誓を深く申さるゝ。梶取ども
が是を聞、あそこなる法師は、何を
いふてさやくぞ。しなふす事が目
に見えて、ひとりごとをするやと、
笑ふものもありにけり。誰も命はお
しひとて、なげくものもありにけり。
大師のきせい誠にて、おいてぞ吹に
けるとかや。過にしくわんむ天皇の
御時、三十七にて入唐まし、梶
又四十三のとし、嵯峨の帝の御時、
御歸朝とこそ聞えけれ。されども人
はなどやらんしらすりけるぞふしぎ
なる。筑紫の博多にあがり、ふちお
わとつてかたにかけ、都へのぼり給
ひしが、舊里はしのびあるにより、

父は佐伯直山公
母は阿刀山
より(新)
寄竹か
なかくる(流來)
ナシ(高)
で(新)(高)
横笛者、大水龍、小
水龍、天曆御時寶
物也
(江談抄第三、雜
事)
平等院寶藏に水龍
といふ笛は唐土笛
也(古事談第六、亭
宅語道)
と申す(新)(高)
ありて(高)
を(高)
鬼笛と博雅三位の
傳説は十訓抄下第
十に見ゆるも此の
記述とは異傳なり
葉二者高名笛也
笛一是也
(江談抄第三、雜
事)
二(こ)もん(高)

立寄(二)父(母)御墓(代)拜(或)
らにたちより、ち(は)のみはかをふしおがみ、ある
磯(邊)通(を)をらるゝに、たけひとつあり。あやしくお
いそべをとをらるゝに、たけひとつあり。あやしくお
ぼしめされて、とりあげ御らんありければ、天竺流
うさがはにてきりながしたるたけにて有。きたいふし
きにおぼしめし、三ふしの竹をみつにきざみ給ひて、
笈(即)のあしにゆひつけ、みやこへのぼり給ひしが、三
ふしの竹がよに入ば、五音の聲を出す。五音のこゑと
申は、きうしやうかくちうこれなり。三くわんのふ
えにえり給ふおほすいれうこすいれうあをばのふえ
これなり。あをばのふえと申は、たけはしほに枯
れど、あをばはふしにひとつあり、かれざるとくに
づけたり。こすいれうと申は、しゆじやくゐんのをに
がとり、よなくこれをふきしかば、天人これをとら
んとて、はごろもをもつてなで、はてんにあがり、な
で、はてんにあがる。かるがゆへになづけて、ひとえ

讃岐國に渡り、屏風の浦に立寄、父
母の御墓をふしおがみ、ある磯邊を
通らるゝ。より竹ひとつあり。とり
上御覽じありければ、天竺流沙川に
てきりながしたる竹であり。きたひ
ふしぎにおぼしめし、三のよのあり
けるを、三ふしにきざみ、笈の足に
ゆひつけ、都へのぼり給ひしに、三
ふしの竹のよに入ば、こいんの聲を
いだす。五音のこゑと申は、きうし
やうかくちう是也。三卷の笛に
り給ふ。大すいれうこすいれう。青
葉の笛是なり。青葉の笛と申は、竹
はしほに枯れたれど、青葉はひとつ
ふしにあり、かれざるとくに名付た
り。こすいれうと申を、朱赤院の鬼が
とり、よなく是を吹しを、天人是
をとらんとて、羽衣をもつてなで、

か(こ)ら(高)
狭衣物語の主人公
内裏にて笛を吹き
しに天童感動して
天降ること巻第一
之上に見ゆ。吉野
皇の時に天人降野
せしより始まる。起
源は五節の舞の起
なり
(江談抄第一、公
事十訓抄下、第
十等参照)
うけて(新)
(高)
盤漣調の曲、婆羅
門僧正百濟國より
傳ふといふ
(高)
院(新)
淀の誤なるべし
すみ給ふ(高)
年を老て(新)
ん(新)誤植か
とる(高)
に(高)
めしなかせ
〔新〕(高)

かくしとこれをいふ。この三くわんのふえをば、てん
かのてうほうなりとて、だいにこめ給ひしを、さこ
ろもの中將よしの山にて花見のけうのありしとき、こ
のふえを申うけ、ふきてあそばせ給ひしに、まんじゆ
らくをふきしかば、天人これをちやうもんし、五すい
のくをのがれて、ぼさつとなりてまひあそぶ。そのの
ちに中じやうよどの津にすまゐする。中じやうとしお
ひてのち、みだ次郎がおほちのみだ太郎がこれをもつ。
われくまでは三代なり。ふく事はなけれど、こ
のふえをもちぬれば、さいなんさらきたらす、ぶつ
しんのかごにあづかるてうほうして候を、いかなる人
か申けん、かみさままでもきこしめしをかせたまへば、
ちからにをよびはんべらす、わかきみ、とこそ申けれ。
牛若きみきこしめし、おもしろし、みだ次郎、いはひ
に三どかたれとて、をし返しかたらせ、なをもあかず

は天にあがり、なでては天にあがる。
故に名づけつゝ、ひとへかくしと是
を云。此三くわんの笛をば、天下の
重寶成とて、内裏に籠をかれしを、
さごろもの中將の、吉野山にて花見
の興のありし時、此笛を申うけ、吹
てあそばれたりけるに、まんじゆら
くをふきしかば、天人是を聴聞し、
五衰の苦をのがれて、菩薩となつて
舞あそぶ。その後、中將、淀の津に
栖居せし小式部にたび給ふ。小式部
年老て後、みだ次郎が祖父のみだ太
郎が是を取。我くまで三代也。ふ
く事はなけれ共、此笛を持ぬれば、
災難更に来ず。佛神の加護にあづか
る重寶にて候を、いかなる人の申け
ん、かみ様に聞しめし、めしおかれ
候へば、ちからにおよび候はず、若
君とこそ申けれ。牛若聞しめし、面

候は〔新〕高〔
 ナシ〔新〕高〔
 ……次郎といさい
 に三度かたらせな
 をも〔高〕
 ナシ〔高〕
 ナシ〔新〕高〔

やおぼしけん、さうしにとゞめたまひて、草子 笛のまきと
 申て、くらまのてら〔三〕にありとかや。
 其後、そのうちにみだ次郎、南條なんれう五つたまはり、家路いるち
 へとてぞかへりける。

白しみだ次郎。いわるに三度かたれ
 とて、をし返しきたらせ、猶もあか
 すやおぼしけん、双紙にとゞめ給ひ
 て、笛の巻と申て鞍馬寺〔南條〕にありとか
 や。その後、みだ次郎はよろこび家
 路へとてぞ歸りける。をはり。

近古小説新纂 終

考 説

朝顔の露の宮

刊上下二卷一本

昔、櫻木の大王と申上げる帝があつた。御妃は萩の大臣の息女菊の御前とて、此の御腹に皇子三人まします。第一は絲櫻の親王、第二は紅葉の宮と申したが、とりわけて色深きは第三の宮で、一目此の君の御姿を拜んだほどの少女達は、上下となく、一生の思出、露の御情にもあづかれぬものかと心をときめかせぬはなかつた。露の宮といふ御名がいつしか皇子に捧げられやうになつたのはかうした理由からである。

父帝の御寵愛も格別で、宮十六の御年、萩の左大臣の女菊の御前を妃と定められたが、才貌花の都に雙び無い青春の風流皇子の配偶者ではなかつた。梅が枝の中納言の先妻(夕顔の上)腹に朝顔の上とて、衣通・染殿を凌ぐほどの容色勝れた姫があるとの噂が耳をすめた日から、宮のあくがれ心は早くも見ぬ戀人の上へと飛んだ。内裏を忍び出では明暮姫が館の邊を徘徊した甲斐があつて、或時花園に遊んでゐる姫を垣間見ることが出来た宮は、愈々増る思に堪へられ遂に其の夜姫の乳母青柳の前の情ある計らひにたよつて戀人に近づき、切なる胸の中を訴へられた。七歳の年母に別れ、繼母の手に憂き日を成長して来た姫は、母の遺言を守つて後生を願ふ他に心はなかつたが、すげなくもしかれて一時運れの歌を詠んで宮を許り還した後、夢枕に立つた亡き母の告によつて、次の夜終に心から宮に許すことになつた。後朝に姫、宮の御袖を控へて、

朝顔のあすを頼まぬ玉の緒の絶えぬさきにもとはばとへ君

今宵も早うといふのであらう。ふと氣がついた宮は、縁起でもないと思ひ直して出られたが、思へばこれが此の世の別れてあつたのである。

中納言の後妻浮草の前(たち花の女)は自分の腹の姫が生れてから愈々朝顔をいぶせきものに思ふ折柄、此の事を聞き出して妬ましさの餘り、朝顔こそ親の目を掠めて素性も知れぬあやしの男を引入れた不埒な女と夫に讒言した上、荒

概

櫻

くれた武士共に姫を捕へさせて、吉野山の奥深く捨ててしまった。

やう／＼に獲た戀の歡喜を胸に抱いて、暮るゝを遇しと訪ひ來ました宮を、今朝の歌が不幸にも讒をなして悲しい事實が迎へた。餘りの事に目もくれ心も消え、姫が形見の袖に書残した三首の歌に我を忘れて自害しようとしてきたのを、青柳の前に諫め勸まされ、心をと直して姫の居間で髪を下し墨染に衣を改め、形見の袖を身に附けつゝ、先づ清水に詣でて、別れた妻に邂逅はさせ給へと祈念し、それから都を後に逢坂・關寺・石山と昔の跡を偲びながら、朝顔の行方を尋ね巡られた。(上巻)

あてもない旅がいつまでも續けられた。漂浪二年餘、北は奥州・北越から南は筑紫の端まで、足跡は殆ど日本全土に亘つたが、尋ねる人の消息は杳として知られぬ。回國の最終に、紀州熊野の権現に參籠して、一七日の祈誓を捧げられるのであつた。

吉野に捨てられた姫は、幸に六十餘りの親切さうな老女に救はれてゐた。奇しき縁は、これも若い時繼母に憎まれて此の地に捨てられた人とのこと、同じ身の上を憐んで、山奥の己が伏屋に伴ひ歸つてからもう三年になる。年月の物思ひが身に積つてか、姫は俄に枕も上らぬ重病に臥して、十八歳の短い不幸な生涯は、もう一度春に逢ふことなしに儚なく凋んでいつてしまった。老女は泣く／＼亡骸を道のほとりに埋めて、標の塚を立てた。もしやいつか戀しい君が尋ねて來られた時、せめて草葉の陰からなりと御姿を見たいからとの臨終の一言に違へまいとてである。その後老女は何處ともなく影を隠してしまつた。

宮は満願の暁、靈夢の告に驚き覺め、戀人が中將姫に養はれてゐたことまで委にし得ても、今は涙に力も失せ、漸う悲しい夢想のまゝに、吉野の奥に分け入られると、果して道の邊りに築きこめた新塚の姿淋しく、そしてその傍から見馴れぬ草花の墓が一本、懐かしげに宮の御衣の裾に這ひかゝるのであつた。

俗名を刈萱の大夫と呼び、最愛の妻に先立たれて無常を觀じ、高野に登つて剃髪した刈萱の道心坊といふ沙門が、み吉野を拜まうと折から此の路に來かゝつたが、塚の前に來に染んで臥してをられる宮を驚きいたわりつゝ、仔細を聞いて、同じ塚に埋め參らせた後、預けられた宮の守り刀を携へて都へ急いだ。宮の御歳二十一。

梗

概

梗

概

刈萱の奏聞に、帝を始め人々は今更のやうに驚き歎かれた。帝はこれも偏に浮草(萍)の前故と、うつ／＼船に遣りこめて萬里の沖へ流罪を命ぜられた。今に至るまで此の草が地上にも生えず、水面に浮き沈みの苦を受けるのは、かうした因縁で、人間の妬の強い者への見せしめであるといふ。浮草の實子葵の君も未枯れとなり、朝顔の上と同じ日に死に亡せた。繼母の偏愛の報である。梅が枝の中納言も津の國に配流の身となつた。今の難波の梅がそれであるといふ。帝は絲樓の親王に位を譲り、御落飾あつて吉野に庵室を結び、怨に宮の後生を弔はれた。今の吉野の櫻の前身は此の帝で、親王は今の近衛櫻であるとのことである。其の他二の宮(今の小倉の紅葉)も、母后(野菊)も乳母小車(旋覆花)も、露の宮に棄てられた妃(薄)も、朝顔の乳母青柳(楊柳)も皆死後それ／＼の草花と變つた。

姫と宮とは冥途の御契淺からず、姫の亡き靈が朝顔の花と咲き出でた彼の塚の中から、不思議にも男子一人出生あつたが、父母の無い爲に、やがて露と消え失せられた。そしてその魂は胡蝶となつて、萬の花に戯れながら、これが父君かあれが母上かと明暮歎かれるのである。又、宮の思ひは火燭となつて天に昇り、電光となつた。だから人間社會に、はかないこと、あだなことをば、朝顔の露、いなづまの影、胡蝶のあそびと譬へるのである。(下巻)

墨染櫻と本書

【性質及び素材】 草・花の擬人戀物語(寓話的植物童話)。即ち一種の異類物であるが、同種のそして恐らく本書と交渉ありと推し得られる『墨染櫻』(一名『草木太平記』)〔有田文庫、御加草紙、所收〕が『魚鳥平家』『鴉鷲合戦物語』の流れを受けた擬軍記物であるのに對して、これは平安朝物語以來近古小説の一種型を形成してゐる繼子物型戀愛譚である。たゞ、草・花の前生を人間にして説くのは本地物を逆に行つた形で、化生譚式の、又本生譚式の、一種の起原傳説的な説明を含む製作童話と看することが出来、始めから動植物をそのまゝ、人格化して取扱つてある一般の異類物と——随つて『墨染櫻』とも——稍趣を異にしてゐる點が注意される。

草木の擬人乃至植物の精靈説話は、詠曲の類型的な素材として珍しくないが(例へば『芭蕉』『藤』『杜若』『薄』『朝顔』『柳』或は『遊行柳』『西行櫻』『嵯峨女郎花』『春日野の露』の類)、『六浦』の『半部』(の類)等。序に、武藏野の露の精

詠曲の植物精靈説話

の現れる「露」といふ曲すらある。それらとは少し異なつた植物説話に属する彼の、契りをこめた女の亡骸を埋めた塚から女郎花一本生ひ出でて、懐かしみ寄る夫を恨み靡き退く哀れさに、男も同じ道に後を追うて、同じ塚の土となつたといふ小野頼風の昔語りを題材とした謡曲「女郎花」は、惟ふに本書の直接粉本の一であらう。(なほ右の化生傳説は、月村齋宗碩の「和歌藻鹽草」(卷八、草部、二三、女郎花の條)にも見えてゐる。恐らく有名な虞美人草の傳説(曾子固作「虞美人草」古文前集・謡曲「項羽」)と同種の支那の化生説話である菊花亦女郎花傳説(「靈鬼志」所載・謡曲「三所引」)の轉化と思はれるが、本土發生のものとしても不自然ではない。後の「狗張子」(卷五の三、「男郎花の事」)の男色物語は、これの更に轉化したものと看られ得る。)

「よしなかりける花の一時を、くれるも夢ぞ女郎花、露の臺や花の縁に、浮めてたび給へ。罪を浮めてたび給へ」

といふ「女郎花」の結文が、同時に本書の創作の目的の一面乃至作者の思想を代辯してくれてもゐる。即ち本書は、作者自らの言葉にも知られるやうに、草・花の戀物語に托した佛教的的人生觀、所謂「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」の金剛經の名文の訓を説き和らけたものでもあるが、そして結局が草木國土悉皆成佛、善巧方便の佛の誓といふ近古文學通有——特に謡曲によつて殆ど常套的に示されてゐる——の定型に落ちついて來てゐるといふわけであるが、然しそれは、漠然時代思潮としての佛者思想と訓蒙意識が可なり色濃く出でゐるといふ方が寧ろ當つてゐるよう。作者の興味はやはり異類物の悲戀小説といふ點にか、つてゐると思はれる。だから此の草子を讀まん人「後生菩提の事肝要」であると共に、それと並んで「情の道を本」とする事が大切なことを作者は忘れずに言ひ足しておいた。

【構想・表現】 全説話の趣向が擬人的で化生式である他に、戀愛小説としての構想はといふと、これ亦近古

物語常套の型式を十分に具備してゐる。(四三一頁「ふせやの物語」考説参照) 當代の理想人たる貴公子型の男性、母に早く死別した薄運の美少女、二人の戀愛の成立、(その經過には「淨瑠璃十二段草子」七、しのびのたんだん八、たもに代表せられるやうな和歌問答・戀問答・佛法問答式應酬までである。) 繼母の妬怒、惡計讒訴、武士に命じての掠奪、山中への遺棄、男の驚愕悲歎、妻を尋ねての遍歴(道行文式の詞章を含む)、神佛への祈誓、靈夢託宣、巡り會ひ、萬事讒への筋立であるが、唯、いつも二人の歡會、立身、一門の繁榮の大團圓に終局するのが定式であるのに、これは結末が悲劇であるのが變つてゐる。勿論これとても甚だ珍しいといふのではなく、「さくらの中將」「若草物語」等と共に、他の類型様式として此の種の小説に往々見出し得るところ、しかもそれは近古思潮必然の歸趨で、即ち前にも述べたやうに、それによつて儘ならぬ世と泡沫の生とが説き示されようとするのである。説話中の人物の殆ど悉くが悲歎の中に遁世往生するのも、化生に都合よい結末として利用せられたのもあらうが、時代人の生活態度の一面の反映であることも言ふまでもない。すべて草木の前身である中で、男主人公があだに儂ない露を名とし(露草の聯想はあるかもしれないが)、其の思ひ電光となり、忘れ形見の孤兒が亦露と消えて魂胡蝶になるのだけが異色であるのも、右の想圖に基づくが故である。前に言及した謡曲「露」(巻一「露」)も

「然るに雨露霜雪の様々の、四の時にはかはれ共、森羅まんざら終には皆、春の光に消ゆる雪の、朝夕露と成りたるなり」
「露の命のはかなくも、消えをあらそふ世の中の、見はてぬ夢よりも、うつゝの露ぞはかなき」

のやうに全然同想の上に立つてをり、又胡蝶は莊周の夢化の寓話(「莊子」齊物論)の示唆があること勿論であらうが、後水尾天皇の御作と傳へられる「胡蝶物語」(有朋堂文庫「御加草紙」巻一「所收」)にも、數々の花の精が隱者胡蝶を訪れることが作られてゐて、間接には本書との間に關係なきを保し難いけれども、いづれも強ひて憶測するにも及ぶまい。

(胡蝶の精魂をシテにした謠曲に「胡蝶」があるが、これも直接関係ある作といふ程ではない。)

それよりも一層簡明に、
「あはれ胡蝶の一遊び、夢の内なる舞の袖」

又

「朝顔の露、稲妻の影、何れかあだならぬ。定めなの浮世や」

謠曲源氏供養

といふ謠曲「源氏供養」の文句が、そのまゝ、本書の構想の種明かしをしてゐるとも言へる。

露の宮と光君

そして主人公の露の宮には、その「源氏物語」の光君に比した作者の意圖が看取せられ得るが、朝顔の姫君は、氣の毒な身の上と初の程の心強い應待とが僅に前齋院を聯想させるといへば言へるだけで、寧ろ偶然に都合よく「源語」中の其の人——に關聯した花——が配せられたと言ふに過ぎないであらう。其の朝顔の化生哀話の構想は謠曲「女郎花」に學んだらうことは既に指摘した。塚の中から嬰兒の出生するのは、若しかしたら、作中に引いてゐる熊野權現の本地譚中の、山に棄てられ殺された王妃五翠殿の屍が王子を生んだ事などから思ひついたかもしれない。いづれにせよ、胡蝶を父母無くて土から生じ、「父にてやまします、母にてや侍る」と戀ひ歎きつゝ、明暮花から花と尋ね飛ぶ薄命の可憐兒と空想してゐるのは、いかにも童話らしい優しさがある。五翠殿の影響なくとも、却つて自然でいゝ。

中將姫傳説
謠曲當麻

繼母親子の報罰は、いつもの繼子物型を脱しないが、うづほ船に載せての「平家」(卷四)の鶴抜ひ(謠曲「鶴」参照)は奇抜である。朝顔を深山に救ふ老女は、同じ繼子物語の中將姫傳説——特に謠曲「當麻」の前シテの老尼に直接の暗示を得たのであらうが、他の繼子物でも此の役は老女の場合が多いのにも共通した意識もあつたのであらう。(四三〇頁「ふせやの物語」考説参照)

とにかく全體として比較的よくまとまつてをり、露の情の少女哀話として面白く讀まれたものであらうと思ふ。平安朝趣味から徳川氣分へ推移しつゝ、ある時代の姿も作の色も調子も略々典型的に浮出てる。無意識に傳統の形骸を保持し、古雅の幻境に遊神し感傷しようとなつた一方ではそれに嫌らずに却つてそれを否定し破滅しようとする疑惑や不安や焦燥や諦めや希望や、さういつたものが混濁して渦巻いたまゝで、蔽ひきれず露出して來ようとしてゐる。大まかな雅趣の中にも何處となく卑俗な味がまじつて、或一種の新しさを帯びた現實味が漠然と全作に瀰漫してゐるのが感ぜられる。古い方の純御伽草紙よりは、どちらかといへば、假名草紙の色調に融け入らうとしてゐる作であると思ふ。

【題 號】 主人公の露の宮と朝顔の上との名に據り、且朝顔の露と掛けた(そしてそれが又此の物語の構想の基つところであるが)のであること勿論であるが、原名は其の「朝顔の露」だけであつたのを、再版の時改題したのであると、朝倉無聲氏の「新日本小説年表」には記されてある。(「原本並所在」の項参照)

西村市良右衛門刊の寛文版「増補書籍目録」(「舞草紙」部、一五七丁ウ)・元祿五年刊の「書籍目録」(五之卷「舞草紙」部、二七丁オ)等に「二 朝がほの露」として出てるし、缺本ではあるが帝國圖書館本の内題、及び最近に覽た延寶八年版の刊本の内題(これによつて、再版後も、改題本でないのも重版せられたことがわかる)等によつてもそれが知り得られる。なほ「朝顔」露の宮朝顔物語「朝顔姫物語」などいふのは、後人によつて便宜附せられた名であらう。(「原本並所在」の項参照)

【年 代】 「國書解題」には

「朝顔の上といふ女性を主として作りたる和文體の物語なり(中略)惜むらくは年代及び著者を知らざるを」

〔訂正書解題〕110—111頁

とある。

墨染櫻との先
後

寛永の整版本がある以上、それ以前のものであることは明らかである。承應二年刊の『墨染櫻』(一名『草木太平記』)に「吉野の八重櫻・難波の梅・小倉の紅葉・菫の道心坊」などの名が見え、同じ草木の擬人小説である點でも兩書の關涉を想測し得るが、創作の先後は俄に斷じ難い。刊行の順序からは本書が早く、又内容詞章から推して猶本書の方が古いのであらうかと思はれる。『胡蝶物語』との關係も想像に止まる程度に過ぎない。

露の宮

露の宮佐々木信綱博士校があるが、露の宮が自及するのではなくて、吉野河に投身すること(放生川に投身する『女郎花』の頼風と同巧である)と、其の塚を回向するワキ僧に菫が利用せられてある(能としての約束の上からの寧ろ當然の改變で、随つて、露の宮の自殺の手段も原説話に依據する要がないので、わざと避けて、類曲の示してゐる粉本に倣つたまでであらう)他、すべて本小説の内容の通りで、明らかにこれから取材して露曲化されたものと言ひ得られる。露曲としても新しい作ではあり、假に刊本から直接採つたのではないとしても口碑等を素材とする場合は、性質を異にしてゐる原説話であるから、此の露曲の方が早いと看することは許されまい。

菫道心傳説

本書中の故事引歌等から明らかに年代を測定し得るやうな適切な資料は見出されない(比較的古い方のはばかりであるから)が、菫道心傳説より後のものであること——これとても其の發生の時代は不明であるが——

は明らかで、それも「俗名菫、大ふ」といふのを見て、所謂重氏(加藤左衛門)乃至石童丸傳説として完成する以前のもの、先づ露曲の「菫」番外前百番前後のものと言へはすまいか。

附記 右の露曲には「筑紫ちくぜんの國、ひるがや殿」とのみ見え、石童丸の代りに「松若」とある。

前掲の『露の宮』では

「新様候者は、筑前の守護菫道人重氏にて候」

となつてゐるところに、同傳説進展の過程は窺はれるが、それだけ又後のものといふ感じがする。

但し、既に重氏乃至石童丸傳説が成長しつゝ、あつたのを、擬人の草木である爲に故意に避けたのであつたかもしれない。

附記 柳亭種彦の『用捨箱』(下之卷)「二、淨瑠璃本刊行の初」の條に載せてある寛永八年刊の説經節「ひるがや」の卷末文中に「御なをばいしどうまるとなづけある」と見えてゐるのによつて、室町末、少くとも徳川初世には、既に石童丸は菫道心傳説中の人名となつてゐたと推知し得る以上、(菫の俗名加藤左衛門重氏といふのはいつから不明であるが)それと露曲「菫」及び本書との素材上の關係は、蓋に斷じ難いものがある。たゞ共に同傳説の固定してからの作でないと思へる方が自然のやうな気がする。

構想の上から露曲「當麻」女郎花、詞章の上から「關寺小町」等より後の作であることだけは推定し得る。

附記 「覺奥屬車云々」は正徳版には見えないが、それより古い寛文版の文句である以上、そして殆どそのままと想定し得られる寛永版乃至原本を假想してのことである。(本輯二八頁参照)

又「十二段草子」よりも早くはなからうし、全文の調子・用語からいつても、先づ室町末・徳川初期の作とみて大體に於て誤なからう。

【文體・用語】

所謂御伽草紙流の稚俗な文章であるが、處々、語り物にされた形跡を思はせる箇處がある。六段本もある位であるから不思議はないが。(「系統・影響」の項参照)

「學の前に書來る」(本輯一六頁)といふ諺が一寸珍しく、又用語として、「變化給ひ」(一〇頁、三七頁)と「變化」の名詞をそのまま、活用させてゐるのが、「問答」を「問答はずして」(讀曲安宅)とはたらかせてゐると相似て、注目される。「はもち中將」にも「又は龍宮城の乙姫の變化給ひて」(本輯一八四頁)と同じ用法がある。「給ふ」と連語になる時の特殊の形のやうに見える。下一段活の語幹と觀るべきであらう。

【原本並所在】 『新日本小説年表』に

- 朝顔の露 二 寛永整版本
- 寛文年代に至り『朝顔露の宮』と改題再版(中略)丹緑本なり (三三頁、近代篇、假名草紙)
- 朝顔露の宮 二 寛文年間版
- 寛永丹緑本『朝顔の露』の改題再版、正徳五年に三版を出せり(四七頁、同、同)
- 朝顔露の宮 二 正徳五年
- 寛永版『朝顔の露』の改題三版(五一頁、同、同)

と出てる。

帝國圖書館本

帝國圖書館藏本は、阿波國文庫・不忍文庫の印がある繪入(丹緑)十一行豎本(縦八寸一分)で、内題「あさかほのつゆ」(題簽にも「朝顔の露 上巻」とあるが極めて新しい)柱「あさかほ上」とある寛永整版本であるが、下巻を缺いてゐる。

岩崎文庫本

岩崎文庫藏本は上下二巻一本、「朝顔の露の宮」とある題簽は新しいが、内題は「あさかほのつゆのみや上」あ

さかほの露の宮」下」柱には「つゆのみや」とし、巻末に

「正徳五_末年正月吉日 近江屋 九兵衛板」

とある小形豎(縦四寸五分)の繪入十五行本である。

京大久原本

京都帝國大學寄託の久原文庫本は上下二巻一本、題簽は剥脱して辛うじて「の宮」さかほ」と読み得られるのみ、内題は「あさかほのつゆのみや上」あさかほの露の宮」下」柱には「つゆのみや」巻末には

「正徳五_末年正月吉日 大傳馬三丁目 鶴屋喜右衛門板」

とあるやはり小形繪入十五行本で、未だ詳細に照合する機会を得ないが、文詞・挿繪共殆ど全く岩崎本と同じらしく、刊行の年月まで同じく、版元を異にするだけであるから、何れかが他の出版者名を削つて重版したのであらしくも思はれる。

東北帝大本
(本輯底本)

本輯所收のものは、東北帝國大學附屬圖書館藏(舊狩野文庫本)上下二巻一本、繪入(無彩)十四行の大形豎本(縦八寸六分)で、題簽には「朝かほ 完」とあるが新しく、内題は上巻の方は「あさかほのつゆのみや上」であるが下巻は「あさがほ下」となつてをり、柱には上下巻とも「あさかほ」とあり、巻末には本文の終に示したやうに

「寛文四_甲年三月吉日 山本九左衛門板」

とあるものである。

即ち完本として管見に入つたものの中で最も古い刊本で、文辭も岩崎文庫本の正徳版よりも整ひ且詳しく、又上巻だけについて照合すると、帝國圖書館本と本書とは文詞稀に少異ある他殆ど全く同一の物である。岩崎文庫本は總體にやさしくやはらけた敘述で且ずつと簡略になつてをり、随つて詞章も異同が餘程あるので、底本を補

舊東大本

正し、又は異本として注意すべき文と考へられる場合のみ参考として掲げることにした。頭註に「イ」としたのがすべてそれである。

なほ東京帝國大學附屬圖書館舊藏の別貴本「一枝堂抄録」の中、六十八「朝顔姫物語」(寫、上下)は、寛文四甲辰三月印本より抄録」としてあつて、朝顔の母が夢にあらはれることや、乳母青柳の前のことなどが見えてゐて、本輯底本の抄録たること疑なきものであつたが、大震災で焼失した。

舊市島本

又、市島春城氏舊藏書中の一本は、近頃一瞥しただけであるが、上下二巻一本。「あさがほのつゆ 上下」とある題簽は新しいが(表紙は古い)、内題「あさがほのつゆ 上」「あさがほのつゆ 下」柱文字無く、巻末に

「延寶八年庚申三月吉日 萬屋庄兵衛」

とある大形(横五寸二分)繪入(無彩)刊本である。文詞は本輯底本に殆ど同じく、下巻は

「あをやきなみだのひまより、これこそあさがほの御がたみとて、御きぬのそてを參らせける」

といふところから始まつてゐる。(挿繪は異なるやうに思はれるが確な記憶が無い)

唯、末文が「世の中はゆめかうつ、か」の歌(本輯底本と同じもの)までで、「じやうこも今も云々の一文が添うてゐないことは注意を要する。(帝國圖書館本の缺けてゐる下巻もこれと同じではなかつたかと考へられる)。即ち、それが無いのが原形で、語り物化された際にその常套句が添著して來たものであらう。

謡曲露の宮

【系統・影響】 謡曲「露の宮」のことは前に述べた。黄表紙に「朝顔姫」(上中下三冊、安永八年刊、鳥居清經畫)

黄表紙露宮朝
顔姫

がある。大略本書の通りで、文章も其のまゝのところさへある。東京帝國大學圖書館藏本(舊霞亭文庫本)の中にある。久原文庫にも藏し、帝國圖書館(但し冒頭落丁)にもある。

『新日本小説年表』(近代篇)に「○朝顔姫 一」と見えてゐる行成表紙本は未見の書であるから其の内容を推し難

いが、東北帝大の舊狩野文庫本の黒本「朝顔姫物語」は本書とは全然關係のないものである。又、久原文庫の藏書目録中に「あさがほのつゆのみや」(正徳五刊、一、六段本)といふのが見えるのは、語り物の形式になつてゐるのであらう。同目録中「あさがほ物語」(寛延三刊、二、黒本)とあるのは、どんな内容のものか、狩野本との關係は如何か、いずれも未だ披閱の機を得ない。

ふせやの物語

寫一本

梗

今は昔、播磨の少將源のたゞのぶと聞ゆる人があつた。十八歳の時、一條中納言の愛姫を北方に迎へて、美しい姫(にほひの君)を一人設けた。容貌心さまの勝れてゐるはもとより、音楽の技は殊にいみじき上達で、生先待たれる樂しみの中に、ふとした病から母君は長月の秋風に誘はれて昔語りの人の數に入つた。重い枕にそれ、くれぐれも頼まれた忘れ形見の姫を、父と乳母の木たかきとは大切にがしづくうち早三年にもなつた或日、母戀しの姫はどんな方でもよい、わたしに御母様と呼ばせて下さい。わたしは唯御母様といふ人が見たいと言ひ出してからは、父にせがんでやまぬいぢらしさに、父君も後妻を娶る氣になつた。亡せた五條宰相の北方であつた人が迎へられた。姫の類なき美しさに視いつた新しい北方は、よき母となることを約した。少將の心づけて、後妻の連子の姫(あひしの君)も喚び取られ、二人の姫達は仲よく睦れ遊ぶこととなつた。(関文)

にほひの君に思ひを寄せてゐた按察中納言の子の少將(藤原ともより)が、乳母の手引で漸う姫に近づく機會を得初めたが、姫はなほ心から打解ける氣色はなかつた。此の事を耳にした北方は、一歳も上の己が姫が先を越されたのがさすがに嫉ましく、繼母の本性を顯して悪事を企んだ。女房のゆげぬを語らひ、其の獻策で、五條邊の武士三人をゆげぬが局に召し、酒と引出物を與へて、北方自ら酌取りつゝ、恐ろしい密計を含め、慾に眼昏んだ者共を竟に承伏させた。

父少將が晝寢の夢に、俄に黒雲が蔽ひ閉ざして來た中を辻風が、にほひを捲上げて行つたとまざりと見て、凶事を豫感して心痛するのを、繼母は所願の叶ふかと心中に喜びつゝ、表には一笑に附し去つてしまひ、序に、にほひに男の文の通ふ由惡しざまに言ひ告げた。父は聞棄てにして參内するとして、心がかりのにほひの方へ二度までも立寄り、夢見の不祥を返す／＼警めた。

其の夜北方は二人の姫を呼び、月前に、にほひに琴を所望などして興醒な頃、腰し合せてあつた武士共俄に亂入して、

梗

にほひを奪ひ去つた。後を追はうとした木たかきは武士共に散々に打伏せられ、あひしを初め女房達は戦き悲しむばかり、其の中で、縁から下へ轉び落ちて殊勝げに虚泣したのは、かの繼母御前であつた。

近江の湖の汀におろされた夢見心地の姫に、武士は繼母御前の命令の由を告げて、いたはしくも衣を剥ぎ取り太刀を抜けば、親念した姫は、其の太刀を乞ひ受けて、髪を五つに結び分け、住吉を初め神々や少將にまで手向け、最期の念佛を唱へた尋常さ、流石の武士共も涙ながらに振上げた太刀は、不思議や三段に折れた。奇特に驚きつゝ、武士共は姫を水底深く沈めて歸つて行つた。

免れんやうなき大湖の中、あはれや美しい人の命は消えたかと見えた刹那、湖の主の大龜の甲は、姫の體を滑ぎ上げてゐた。勢多の橋の上に姫を置いて、さめ／＼と涙を流した龜は、亡き母の魂の宿つて我が子を救うた旨を述べ、薄運を慰めながら無謀の死を止めて又水に影を没した。

懐かししの母の靈に助けられた姫は、やがて復、情ある救ひ主に出逢つた。それは翌朝熊野參詣の下向道に其處を通りかゝつた六十許の老尼であつた。権現の授け給ふ子と覺えるといははつて、己が庵の在る信濃國伏屋へと伴つた。

都では父君・夫少將とり／＼の驚き歎き、父は昨日の姫の美しき常に勝れて光つてゐたことが今更悲しく想出され、狂せんばかり悲しんで、方々の神佛に祈りを籠められる。男君は木たかきの御言もことわりと哀れに、主なき室の手馴れの琴を撫鳴せば、おぞや涙が止まらぬ。此の悲しみの中に、少將をあひしに婚はせようと、北方に語らはれた主殿といふ古い色好みが、まぢきといふ牛物を使に仕立てて少將に送つた傍ら痛い似非歌に、満足な返しなどあらう筈がない。

今は三位中將から中納言になつてゐたにほひの父君は、出家して高野に籠つた。帝も哀れに思召し、御訪らひの勅使を立てられた。

ともよりの少將は引籠つてゐたが思ひに堪へられ、九月十日餘り住吉に百日籠らうと決意して參り、一日一夜に三千三百三十度の拜みを上げて祈誓した虚空から、七日といふ暁の夢想に白髪のお翁の告げあり、勇んで下向し、清水に住む知己の山伏に其の裝束を借りて、慣らはぬ旅に戀人を搜めてお翁の教への東へと志した。

梗

梗

伏屋には姫君、都の御父・少将・乳母戀しくて、涙の乾く隙もなく、書きすぎに列れた長歌を尼君の見て、いかさま戀する君ぞと愈、深く同情して、様を變へようといふのを止め、慰めつゞけてゐた。

突然都から姿の失せた騒ぎ歎きを後に、漸う少将は大井の渡まで辿り来た時、渡船の乗合の中にゐた六十許の老翁と道連れになり、其の知己の家へ泊つたりした。途すがら打沈んだ山伏の少将を、戀する人と言ひ當てた翁は、己が昔にも似た頼もしの若人と感動して、愈々慰め勵ますのであつた。かゝうの宿の夢に、尋ねる人が口ずさんだ歌を、覺めての後に聞いた翁は解いて、信濃の伏屋へ急がせた。伏屋では又姫が同じく夢に戀しの君に會つたのも一奇である。

一度甲斐へと踏み違へた道を改めて、終に伏屋に近づいた時であつた。たゞならぬ翁の素振りは思はず少将を訝らせた。其の答である。かの夢現に現じて東の旅を勧めた上に、自ら此處まで導いて来てくれた此の翁こそは、少将が一心の祈を捧げた日本第一の明神、住吉の大神であつたのである。昔凡夫であつた頃の戀を機縁に、神と現じて人の願を満てようとの誓を果す爲、殊更戀する人の中にも汝を憐む心深くして、淨衣の袖を絞ひ、かの伏屋の庵室の傍まで具して掻き消すやうに失せられた。

明神の御導き空しからず、爪音しるき琴の音を傾りに、戀人同士は絶えて久しい再會の歡に浸つた。尼御前も奇しき縁を感じ泣いた。

三日許あつて、遣はされた御文に驚き長み馳せ参つた信濃守は、急ぎ國人を催して御供揃ひし、京からの御迎も數知らず、めでたい都歸り、すべては喜に満ちて、少将は三位中将に昇り、中納言入道も高野から下つて姫を見るのも現の心地せず、木たがきはじめ皆々嬉しさは限りも無い。名残盡きすと御供に参つた伏屋の尼には信濃の國を賜はつて國司尼御前と呼ばれたが、繼母親子は禁獄の憂目にあひ、あひしだけは、はひの懇願から漸く宥された。にはひは繼母にも報復の意志は少しもなく、却つて憐れみを垂れようとしたのであつたが、罪ある者に罪を與へれば神佛の御心も恐ろしいとして終に入牢と決したのであつた。

かくて中将は大納言から左大臣になり、北政所と住吉に願果たしに参つて後、程なく一男一女を設け、若君は後に三位中将から右大将、姫君は春宮の中宮と呼ばれ、春宮御即位の後は十七て后の宮に立たれた。左大臣は關白の宣旨を蒙

り天下に尊敬せられ、北政所との仲愈、睦ましく平和幸福の世を終り、後生は觀音に、又、北方は地藏菩薩と現せられたといふ。昔も今も住吉の尊い御誓は有難い極である。罪なき人に腹黒の事せん者の報の恐ろしさも思ひ知らればならぬ。

譯 繼子物型戀愛

【性質】『落窪』『住吉』系統の繼子物型戀愛小説である。『朝顔の露の宮』も説話の型態乃至構想の上からいへば、全く此と同種同系のものである。唯かれはそれが擬人の草花であるだけのことである。そしてこれは悲戀小説ではなくて、善人榮え悪人亡ぶ式の平和幸福の終局をみる定型を成してゐる。即ち『落窪』などと同じく所謂

譯 住吉明神靈驗

“Holle type”の家庭童話であるといふことが出来る。一面に於て住吉明神の利益を宣べてゐる物語でもあると共に、結末に附加せられてゐる主人公夫妻の本地の説述は、これ亦近古文學及び近古思想の著しい特色である。更に此の物語は、遊離的な繼子童話が、地方的口碑に知られた信州の一古跡に結びついてゐるといふ點でも注意せらるべきものであり、挿話的に挿入してゐる寓話的要素即ち動物報恩説話の片鱗に、浦島傳説と連絡する如無

譯 如無僧都型傳説

僧都型傳説の影響が認められる點に於ても究明を要する價值があり、又全作品としては、他の類型同系の前後諸物語との比較考察に特に意義を有するものであることを言ひ添へねばならない。就中、『美人くらべ』(上下二巻。萬治二年、石津八良右衛門開板。有朋堂文庫、御伽草紙、日本文學大系第一九卷所收)は本書の改作と推定し得べき小説であることは後に説く通りである。

譯 本書と美人くらべ

【素材】此の物語を構成してゐる素材の中で、特に注意すべき二三について考究することにする。

譯 航海神と和歌

一 住吉明神 先づ住吉明神の靈驗利益であるが、其の奉祀の起原傳説として有名な息長足姫尊(神功皇后)歸神託宣(『古事記』中卷『書紀』卷九)以來、歴代皇室の御尊崇厚く、航海神の故を以てしては遣外使臣の一路平安の幣

が捧けられ、又中古以後は所謂和歌三神の一として特に敷島の道に志す者の信仰の對象となり、随つて種々の驗徳説話も傳説に文學に數々傳へられる。「土佐日記」の海神は「櫛取の心」に通ふ餘程繪點で勘定づくの「例の神」であるが、將門征討に際しては新羅征伐の昔とは正副の位置を替へて日吉權現と共に自ら將軍となり（『古事談』第五、神社佛寺・續古事談』第四、神社佛事）、源平の決戦には鎧矢西に飛び（『盛衰記』卷四三）、『伊勢物語』（一一七段）・『拾遺集』（卷一〇、神樂歌）・『新古今集』（卷一九、神祇）等には有難い神詠を留めてある。又「一寸法師」では申子の奇特と其の立身とが語られてある。

老翁姿の現形

特に老翁と現形しての奇特は、謠曲「高砂」の尉が即ちさうであり、樂天を追ひ返した漁翁（謠曲「白樂天」）、西行に宿を貸した賤の叟（謠曲「雨月」）、頼光の酒吞童子退治に神變奇特——神使鬼毒——酒を與へて助力した三老人の一人（御伽草紙「酒吞童子」）、慈覺大師が如法經を書いた時に託宣した白髮の翁（『古今著聞集』卷一、神祇第一）「ふりにける松ものいはば」の後徳大寺左大臣の詠歌にめでて、難破の船を救うた怪しの老翁（同卷五、和歌第六）、片岡八郎の間に答へて義經主従の危急を訓へた「齡八旬にたけたる老人」（『義經記』卷四、「義經都落の事」）、いづれも皆さうである。

神詠と明神の戀

本小説にあつては、此の「日本第一の明神」が、凡夫であつた昔の自らに思ひ比べて尊い誓願を立て、中にも戀する人を憐む志深く、本朝守護の神威を耀かし給ふ傍ら、出雲の神の代役を勤められることが異色として目につくのである。しかも「拾遺集」の住吉の神詠と傳へられるといふ

「住吉の岸もせざらむもの故にれたくや人にまつといはれむ」（卷一〇、神樂歌）
の一首の由縁を、

「是を三輪の明神の住吉の明神のおほんもとへつひ給ふ時の事といへり」

と説明してゐる『歌林良材集』（卷下、有由緒歌、三輪のしるしの杉の事）に看るも、明神の戀物語も全く根も葉もない事でもないらしい。

伏屋と帯木傳説

二 伏屋と帯木 題名の由つて來る所であり、そして少將に於ける住吉の老翁と對をなして、女主人公に、ほひの君の保護者たる役割を引受けてゐる老尼の庵室の所在地である信濃國伏屋は、『源氏物語』（帯木卷）にも採り入れられて一層有名となつた所謂蘭原の帯木傳説に知られた名所である。『大日本地名辭書』（信濃、伊那郡）には

「蘭原 今小野川の谷にて、古驛路にあたり、布施屋を置きて行人を留宿休止せしめたる所とす。布施屋とは蓋量置法師

傳の置ける廣孫院の類ならん。往昔水陸の難路に於て、慈悲の旨を體して旅人を救濟する伏舎をすべて布施屋といへり。

（四）地名考云、蘭原の伏屋の里は昔旅人のいこひしと見ゆれど、今は廢れて久しければ、民家所々にあるのみ。（下略）（二三五七頁）

と出てゐる。「袖中抄」（第一九）にも、帯木の論の條下に附して

「今案に、信濃國その原と云所に、ふせやと云所の別にあるかとおもふに、布施屋とて所々につくれるにこそ。されば信濃國そのはらにも、この布施屋をたてたりけるにや云々」

と記し、又信州では冬籠の爲に穴を掘つて營む住居をもふせやと呼ぶ由をも言ひ添へてあるが、南谿の『東遊記』（後編卷之三、帯木）には

「又帯木の有る山の後に、伏屋といふ小村もありとなり。古歌の詞を今は里の名とせりとぞおもはる」と見えてゐる。

帯木の傳説が特に坂上是則の詠（『新古今集』卷一一、戀一、「是則集」）但し、同じ歌の下句が「ありとて行けど」とな

つて「古今六帖」第五には出てゐる]で名高いことは改めて説くまでもなく、又本小説とは直接の関係はないのであるが、作者に此の地を擇ばしめたについては、繼子物ではあり、又かの本歌の聯想もあり、やはり淺少ならざる緣由があると思はれる。それと共に此の珍木の奇聞と名稱とから更に種々の地方的口碑が發生したり結びついて來たりしてゐることは見道されないのである。例へば、信州の或無筆の夫が、後妻の許に京から數々來た男の手紙を疑ひ、戸隠の山寺に居た子息を喚び下して讀ませたのを、伶俐なその稚兒が腹こそ變れ、なほ「は、きぎと思ふ」繼母を庇つた機轉が『沙石集』(卷三の六「小兒の忠言の事」)に載せてあり、「ありとは見えて逢はぬ」恨みを父子再會の喜に變へたのは謡曲「木賊」の作意である。殊に「木賊」の末文は

「あとに伏屋の物語、浮世語になりけり。浮世語になりけり。」

とあるのも、伏屋の物語といふ稱呼に依る同口碑の存在を示さうとした筆致である。尤も物語名としてのふせや(必ずしも本輯所收のを意味しない)は、勿論此の曲とは直接關係はなく、既にもつと古くから存したのであらうが、その原稱の由來するところは、なほ同地方の口碑として然かく呼ばれてゐた何等かの傳説が存したに借り又は據らなかつたかを保し難いであらう。

三 龜の報恩説話 動物報恩の一つの説話型として、特に龜が放生の恩に報いた傳説は東洋には珍しくなく、各種の説話が残されてゐる。同一本源からの轉化・派生もあらうし、又別箇の發生に係るものもあらう。その報恩の様式が

- (一) 助命者に福寶を齎すもの
- (二) 助命者を龍宮に伴ふもの

- (三) 助命者の危難を救ふもの
- (四) 助命者の家族特に其の子の危難を救ふもの

等いろ／＼ある。(一)と(二)、(三)と(四)を各、同じ範疇の下に置くことも或場合可能であらうが)

印度の放龜説話

孔倫(字敬康)の白龜

浦島傳説

(一)の例は、印度説話として『今昔物語』(卷九)に傳へる、〔法苑珠林等では支那に轉化してゐる〕「宇治拾遺物語」には、卷一三「龜を買ひてはなす事」として出てゐる。倍加の財寶を報返するのではないが、此の部類の説話と看ねばならぬ。(芳賀博士纂訂『今昔物語集』天然震旦部参照)
又、支那説話の、所謂會稽三康の一人、孔倫の龜鈕の奇話『晉書』七八、列傳第四八「蒙求」卷下「孔倫放龜」『十訓抄』卷上第一「可定心操振舞事」の(四)参照)も立身の慶福を招くのであるから、やはり此の部類のものである。
(二)の例は所謂浦島傳説である。但し『書紀』丹後風土記『釋日本紀』卷一二「述義八、第一四、雄略天皇所引」を始め、諸書に記されてゐるところに就いて觀れば、原形に於ては放生の機因を含んでゐないやうである。寧ろ他の機因と形態とに其の發生の原據を置くものと解せられる。又其の主題もおのづから別箇の點に存する。御伽草紙の「浦島太郎」に於て、彼の説話が童話の世界に住せしめられるに至つて、「太郎」の名と共に此の倫理的機因をも賦與せしめられて來たものらしく考へられる。且此の改變が、御伽草紙作者の意圖に出たと局限せしめねばならぬ必要も毫もないこと勿論である。少くとも御伽草紙化した時代には、既に彼の古傳説が此の報恩説話の圈内に延展せられて來た事實だけは、それによつて明示されてゐる。そして此の轉化を促進せしめたものは、同一の動物の上に傳へられる各種の報恩説話の播布であつたことも直に容認せしめられねばならぬところである。御伽草紙に於ける放生の機因が、買取るのではなくて、自ら釣上げたのを報恩を訓へて宥し放つのであるところに、

舊傳をも同時に壊るまいとしてゐる過渡期的な改變の痕跡を留めてゐるといふべきである。

朝鮮説話の平壤薛岩里の傳説即ち薛某龍宮行の説話は、鯉になつて語られてゐるが、此の型の傳説である。勿論浦島傳説とは少し趣を異にしてゐる。(三輪環氏著『傳説の朝鮮』第一編山川、「清流壁」の項所載)

又、此の型で(一)を併せたのは『今昔物語』(卷一六「仕観音」人行龍宮得富語第一五)である。浦島傳説と關係があるかもしれぬが、これは地の報恩説話である。

(三)の例には支那説話に毛寶の傳説(『搜神後記』卷上「源平盛衰記」卷二六)があり、日本では百濟僧弘濟の傳説(『日本靈異記』卷上「贖龜令放生」得現報「緯第七」)、『今昔物語』卷一九「龜報」百濟僧弘濟恩「語第三〇」がある。地藏菩薩の信仰に結びついた日本説話『今昔物語』卷一七「買龜放生」地藏助「得活語第二六」、『雜談集』卷九「萬物精靈の事」(一)と(三)とを併せ、且もつと複雑して餘程童話的になつてをり、特に動物報恩の寓意を強調し、同時に人間の輕薄を諷した印度説話(『法苑珠林』卷五〇「報恩篇」引證部「今昔物語」卷五「天竺龜報」入恩「語第一九」等所載。六度集經、雜律異相、改今昔物語集、天竺震旦部參照)もある。後者は泰西にも播布した所謂「Grateful Beast type」の典型である。

(四)の適例は即ち如無僧都の傳説である。『今昔物語』卷一九「龜報」山陰中納言恩「語第二九」・『寶物集』(卷五「天竺の人龜を生け」山陰中納言の若君の事)・『沙石集』(卷八の四「畜生の靈の事」・『十訓抄』(卷上第一「可定心操振舞」事)の(五)・『盛衰記』(卷二六「如夢僧都烏帽子・同母放龜」條)等に見えてゐる。即ち中納言が筑紫に任に下る途、繼母が海中に沈めた若君を、龜が救上げて恩に答へるといふ傳説で、其の若君が後の如無僧都であるといふ。『三國傳記』(卷七「第二五」山陰中納言密持守建立事觀音利生之事)・『長谷寺靈驗記』(下、第一三「山陰中納言得聖人告遺密持寺佛」事)の所載は明らかに觀音の靈驗化してゐる。『八雲御抄』(卷一)及び『古物語目録』に見える「山陰中納言物語」は散佚

して傳はらないが、此の傳説を題材としたものではなかつたらうかとの想像は『古物語類字鈔』(卷之下、也部)の黒川春村も既に述べてゐるところである。

『宇治拾遺物語』卷一四「魚養の事」は、遣唐使某が唐土で生ませた子を、夫の消息の無いのを恨んで母が海中に投じたのを、大魚が助け載せて日本の父の許へ漂着した物語で、無きが如くして生れたれば如無僧都とぞ名づけたる(『盛衰記』)『今昔』にも見えてゐるといふに應ずる「魚に助けられたりければ、名をば魚養とぞつけたりける」といふ命名の説明まで附してある。同一傳説の轉化でないとしても、同型に屬する説話である。或は兩者の間に何かの關係があるかもしれない。

扱本小説に密接な交渉のあるのは、此の如無僧都の傳説である。其の所傳の最も詳しい形を『今昔』と『盛衰記』とに看る。『三國傳記』では、全然繼母に關係なく、『沙石集』も

「其子の海にあやまちて落ち入りてけるを」

と簡單に記してあるが、『寶物集』には

「繼母のあやまちの様に海に落入れて、虚泣しけるを」

とあり、流布本にはないが『長門本』(卷一二)他數本の『平家』も、亦『今昔』の古傳も略、同様で、『今昔』では「繼母此ノ兒ヲ抱テ尿ヲ遣ル様ニテ」取落したと語られてある。『十訓抄』に於ては

「繼母乳母に心合せて、取りはづしたるやうにて海におとし入れつ」

又『長谷寺靈驗記』では

「乳母繼母ノ語ヲ受ケテ」

といふ形に展開して來てゐる。そしてそれと合致して更に詳細なのが『盛衰記』である。其の放生の主も、原形に於ては中納言自身であるのに、『今昔』『寶物集』『沙石集』『十訓抄』

『三國傳記』『靈驗記』では龜に助けられたのが山陰中納言で、龜を放つたのはその父藤原高房になつてゐる。

『盛衰記』(『長門本』如白本)『佐野本』等も同様)に於ては、若君の實母の生前放生の功德に報いたのである。此の二點に於て、所謂如無僧都傳説の諸傳の中で、特に『盛衰記』の記述が本書に最も親近な關係を有することを推知し得る。但しそれと共に『秋月物語』と此の傳説及び本小説との相互間の關係も、即斷を下すことは避けねばならぬが、看過することは許されぬであらう。

「扱姫君は夢の心地して御覽すれば、涙うちぎわに大きな龜手をあわせてなくけしきにて歸りければ、姫君ふしぎやな、いかなる佛神の御たすけや、むかし山かげの中納言わがざかり、わやうに有とこそ聞けとて、いよく御きやうたつとくあそばしけるこそあわれなれ」

「我は、これしやわつたりうわうの第二のわうじなり。(中略)君をたすけ申つる龜は、めいどの母なりとて、さまざまになぐさめ給ひて、うせ給ひけり」(『異本秋月物語』『室町時代小説集』所收)

これは海龜であり、本小説では近江の湖の主になつてゐる。たゞ此の點だけでは、前に(三)の例に挙げた『今昔』の地藏の化身だつた大龜の棲處と一致してゐるが、湖の主の大龜といふ空想なり口碑なりも自然であらうから、強ひて結びつけて考へなくてもよからう。

かく、本小説及び『秋月物語』は動物(特に龜)報恩説話の一種としての如無僧都型傳説の變入を想像し得ることと前述の如くであるが、しかしその説話の形態としての完全を包持してはゐないこと、即ち放生の機因を缺いてゐること、そして寧ろ母の靈魂が龜の姿を借りて愛子を救ふといふ意味に轉化してゐることを注意せねばならぬ

い。動物報恩説話から出て、而も動物報恩説話ではなくなつてゐることが著しい變移である。(そして父が太宰帥に任じて下向する途に、繼母の奸計で姫が海に沈められようとする構想は、却つて兩者に見ずして『いはやのさうし』に見る如無僧都傳説の影響である)

龜に乗る人

單純に、龜が人を甲に載せて水上を遊いだといふ傳説なら、神武天皇東征の水先案内を仕う奉つた宇豆毘古(『古事記』中卷)もあり、浦島太郎もあり、上に列擧した(三)の諸説話があり、又別に支那神仙譚の黃安の傳説(『列仙全傳』卷二)などもある。そして又それら相互の關涉も考へられるのであるけれども、今は、本小説と直接關係ある如無僧都傳説の進展を考へる上に、それらの先進諸傳説の影響(特に毛寶傳説との關係など)を假想し得るものがあるといふこと、及び同傳説が他の同種の動物報恩説話と如何なる關係に位置を保つてゐるかを示す必要を感じたが故に、上述の煩勞を敢へてしたといふことを一言しておくに止める。

今一つ附して言ふべきは、繼母が繼子を憎んで深山や海中に乗せるのは、繼子物の定型であるが、これは海に沈める型の物に屬してゐるに對し、山中に遺棄する型の代表は中將姫傳説である事言ふまでもなく、そして『朝顔』や『花よの姫』などは後者の系統と見るべきであるといふ事である。

四 同系類書との交渉 なほ繼母がいづれも五條宰相の寡婦であり、連子の名がやはらあひしの君であるなどが『秋月物語』と全く同じであつたり、その連子が先妻腹の女主人公に一歳の姉であるのが『いはやのさうし』と同構であつたりするのを始め、部分的に又全説話的に素材・構想の上で、同系の類書と密接な關係交渉があるやうに觀られるが、これは總括して次項に譲る。

【構想・表現】

落窪の君のやうに奴隷視されるのでなく、又連子のあひしの君の氣質が善良である點に於

朝顔の露の宮との比較

住吉物語との関係

住吉の尼と伏屋の尼

て、所謂 "Holle type" 即ち落窪型童話の純粹な形態からは離れてゐるが、(そして『住吉物語』に近接してゐるが) それだけに一面物語としては進んだものとも言へる。しかし結局は此の系統の類型的な構想から脱出してはゐない。『朝顔の露の宮』の「構想」の項に列擧した説話の主な筋立の條件は、大體に於て殆ど其のまゝ、あてはまる。(四〇七頁参照) 勿論彼の小説の方が此等の物語を繼承したといふべきであらうが、同時にそれは此の兩小説間の關係に止まるのではないほど、決して珍しい對應ではないのである。先づ開卷直ちに『落窪』よりは『住吉』が粉本となつてゐることが氣づかれる。特に母の病死、遺言の段は文詞そのまゝの影響を發見する。繼母に似ず其の腹の姫達の同情するのも、繼母がむくつけ女と謀つて姫を下衆に盜ませようと企てるのも、姫が容易に少將に許さうとしないのも同斷である。(これらは『落窪』から想を得たところもあるが) その姫のほひの君の名も、匂宮などからの轉想もあらうが、

「姫君は、今一しほにほひ加はりて、光るなどはこれを申すにやとぞ見え給ひける」(『住吉物語』)

の文からなど思ひついたらうも測られぬ。住吉の尼は即ち伏屋の尼の前身であらうし、姫君はいづれもその隠れ處で長歌を詠み、夫の少將(住吉)では、今は中將)の一七日の參籠夢想、特に姫の在處を示す夢中吟、雙方相互の夢感、姫を尋ねての旅立、琴の音を便りにしての再會、少異はあるが大體吻合する。結文の

「昔も今も人にはらぐる人は、かゝる事なり。これを見聞む人々は、かまへて人よかりぬべきなりとぞ」(『住吉物語』)といふのも、他の類書の何れよりも最も近似してゐる。『ふせや』の少將を導き助けた住吉大明神も、或は住吉の尼から捻出されたと臆測しても不自然ではあるまい。

なほ『美人くらべ』の發端で、且『伏屋の物語』に無い構想である清水寺の美人くらべは、『住吉』の嵯峨野の松原

の子の日の遊に相當するものであることを注意したい。

前述の如く『住吉』と『ふせや』との關係は否み難いものがあるが、それよりもつと親近な關係にあるものは、『秋月物語』(及び其の原本かといはれる『異本秋月物語』京極大納言物語の名で、文庫堂藏。室町時代小説集所收)並びに『美人くらべ』である。又兩書程はないが、やはり干繋あるものに『いはやのさうし』(有朋堂文庫藏。日本文章大系第一九卷)所收。家藏本は『いは屋もの語り』と題する異本)があり、又同系の類書に前に述べた『朝顔』や、『花よの姫の草子』(これは『鉢かづき』系統のものでもある)もあり、『さくらの中將』若草物語なども縁類をなしてゐると言へる。一々詳密に筋立を比較するのは餘りに煩に過ぐる嫌があり、又それほどの必要も認めないが、前記諸書の内から特に最も關係の在る『美人くらべ』『秋月』『いはや』の三書及び同系統型の例として『朝顔』『花よの姫』の二書について、梗概との重複を厭はず、本書説話との類似の條項を對照して看ることにする。

附記 直接の關係ない部分は省略したところもある。特に『異本秋月』は、刊本『秋月』と多少の異同は在るが、挿話多く且圖文があるし、本筋は大體同じであるから唯參考に補足するに止める。人物對照表にだけは『住吉』をも加へて、共に出すことにした。

人物對照表

父		母		ふせや		美人くらべ		異本秋月		秋		月		いはやのさうし		朝顔		花よの姫		住吉	
源少將	源たゝのふ	源中納言ノ姫	(母上)	京極大納言	源中納言ノ女	源中納言ノ姫	(母上)	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女	源中納言ノ女

姫	繼母	連子	姫乳母	連子乳母	姫夫	姫ヲ棄ツル 家來ノ武士	姫ノ救ヒ主	夫ヲ守履ス ル神ノ化身	都歸ノ御供	姫ヲ養ル 母ノ靈
にほひの君	五、彦、宰相ノ孫、 (繼母御前)	あひしの君 (にほひニ、歳、 八、姉)	木たかき	あひしの君 (にほひニ、歳、 八、姉)	按察中納言ノ子 少將藤原ともより	五條邊ノ武士三人 家來ノ武士二人	信濃伏屋ノ尼 同	翁(住吉大明神) 同	信濃守等 同	龜、ニ宿レル母、ハ、 夢ノ中ノ母、ハ、 靈
野もせの姫(十六)	(繼母御前)	紫雲の姫(十四)	頼朝の局	紫竹の局	丹後の少將	同	同	同	同	同
あいきやうの君	三、彦、宰相ノ孫、 (繼母御前)	あいしの君	大貳の局	鬼がはらの局	鬼がはらの從、兄、弟、 ことうしかな 八(?)等二人	同	同	同	同	同
同	五、彦、宰相ノ孫、 (繼母御前)	同	同	(別、上召使の) 本名、局かはらの	同	同	同	同	同	同
對の屋の姫君	(繼母御前)	(對の屋ニ、歳、八、 姉)	同	右、大臣、ハ、子、許 四位、少將、 關、白、子、 二位、中將、 二、位、中將、 繼母ノめのと子 佐藤左衛門貞家	同	同	同	同	同	同
朝顔の上	うき草の前	(姿の君(後妻)) ナシ	青梅の前	同	同	同	同	同	同	同
花よの姫 (觀音ノ申子)	(繼母御前) 諸大夫ノ女	ナシ	あかし	あかし	同	同	同	同	同	同
姫君	諸大夫ノ女	中の君 三の君	(乳母子侍從)	同	同	同	同	同	同	同

筋立對照表

ふせや	美人くらべ	秋月	いはやのさうし	朝顔	花よの姫
攝摩少將(十八)一條中納言ノ姫(十三)ヲ娶リ一女王ヲ設ク(にほひの君)	五條邊、宰相ノ後妻野もせ(繼母)實ノ二女王伴ヒ物語シテ丹後少將ニ見ス(清水寺ノ美人くらべ) (參考) 住吉物語ノ嵯峨野松原ノ子日ノ姫 異本秋月ノあいきやうノ太妻語	帥大納言兼陸奥中納言ノ妹ヲ娶リ一女王ヲ設ク(あいきやうの君)	中納言有末白河ノ姫宮ヲ娶リ一女王ヲ設ク(後二對の屋)	一週忌後妻ヲ迎フ、ソノ麗ニ一女王マル(姿の君)	三年、後妻ヲ迎フ
北方病ニ似シ姫(七?)ヲ夫及ビ乳母ニ託シテ早世(廿八)	同	第七、歳ノ時北方早世	第十歳ノ時北方早世(廿八)	七歳ノ時北方早世	九年九歳ノ時北方早世(三十)
三年、後妻(五條宰相孫)ヲ迎ヘ、ヤガテソノ連子ノ姫(あひしの君)ヲモ引取ル、にほひニ一歳ノ姉	少將乳母正木ノ文使、繼母ト紫雲ノ乳母紫竹ノ好計野もせヲ誑ヒテラス(參考) 住吉ノ眞前ノ文使、 異本秋月ノ白河ノ文使	三年、後妻(五條宰相孫)ヲ迎フ、ソノ連子ノ姫(あひしの君)	三年、後妻ヲ迎フ、ソノ連子ノ姫對の屋ニ、歳、八、姉	三年、後妻ヲ迎フ、ソノ麗ニ一女王マル(姿の君)	三年、後妻ヲ迎フ
少將藤原ともより、にほひト婚ス	丹後少將(廿餘)野もせト婚ス	關白ノ子二位中將ゆきいゑ、繼母トソノ召使かはらの局ニ謀ラレテあいに、後あいに手引ニテあいきやうト婚ス(あいきやうヲ權ニ立願スルコトアリ)	◎右大臣ノ子四位少將ト婚約成ル	櫻木大王ノ第三皇子ノ宮姫ト婚ル ◎(實母ノ姫ノ夢ニ現ル)	

◎印は特殊の標

<p>①父遺體シテ凶夢ヲ見ル 極ノ室ヲ訪ヒテ夢内ス</p>	<p>遺母紫竹ト謀リ武士二人ヲ ヲ語ラフ</p>	<p>ソノ留守ニ遺母兩娘ニ勸メ テ月前ニ管轄ノ遊ヲ催サ セ、武士ヲシテ突然にほひ ヲ奪ヒ去ラシム</p>	<p>紫竹野もせヲ贈シ花園二月 ヲ眺メサセテ武士共ニ奪ヒ 去ラシム</p>	<p>父夢内ノ留守ニ遺母兩娘ニ 勸メテ月花ヲ眺メサセ、突 然あいさやうヲ武士共ニ奪 ヒ去ラシム (父あやし及ビ中將ノ悲歎)</p>	<p>遺母かはらの局ト謀リソノ 從兄弟ノ武士二人ヲ語ラフ</p>	<p>遺母乳母子ノ佐藤左衛門貞 家ヲ語ラヒ</p>	<p>遺母兩子ヲ遺シ</p>	<p>遺母ソノ乳母しかまト謀リ テしかまノ從兄弟ノ武士ヲ 語ラヒ</p>
<p>武士共近江ノ湖邊ニテ斬ラ ントセシニ、太刀三段ニ折 ル。ヨツテ水ニ沈メテ歸ル</p>	<p>武士共ハ瀨田ノ橋上ヨリ湖 水ニ姫ヲ落サントシ姫ノ言 ニ同情シテ助ケ、湖ニ沈ム シト偽リ復命ス (父ノ歎、遺母ノ悲泣)</p>	<p>武士共紀伊國小豆島(真本、 備後國ひるが小島)ニテ斬 ラントセシニ太刀三段ニ折 レ、船トシタル弓弦モ斷 ル。(真本、弓折ル)ヨツテ 水ニ沈メテ歸ル途ニ風波ニ アヒテ死ス</p>	<p>有末ノ太宰帥赴任ノ途姫ヲ 奪ヒ海ニ沈メシム。貞家漢 路ノ船島ガ洞ノ岩穴ノ上ニ 捨テ置キテ歸ル (父ノ歎、少將ノ出家)</p>	<p>武士共命ジテ擧キ去ラシ ム</p>	<p>武士共姫ヲ吉野山中ニ棄テ 置キテ歸ル</p>	<p>宮乳母ヨリ聞キテ悲歎、出 家、旅立、福懸、熊野參籠</p>	<p>武士ノ女房ハ同情セシモ武 士ハ姫ヲうばが事ノ真ニ棄 テ置キテ歸ル (父、乳母等ノ悲歎、遺 母ノ悲泣) (乳母巫女ヨリ姫ノ運命 ノ預言ヲ聽ク)</p>	<p>父ノ新願、夢現</p>
<p>實母ノ聲、龜、ニ宿リテ助ケ 死ヲ止ム</p>	<p>實母ノ聲、龜、トナリテ助ケ 入水ヲ止ム</p>	<p>實母ノ聲、龜、トナリテ助ケ</p>	<p>實母ノ聲、龜、トナリテ助ケ</p>	<p>實母ノ聲、龜、トナリテ助ケ</p>	<p>實母ノ聲、龜、トナリテ助ケ</p>	<p>實母ノ聲、龜、トナリテ助ケ</p>	<p>實母ノ聲、龜、トナリテ助ケ</p>	<p>實母ノ聲、龜、トナリテ助ケ</p>

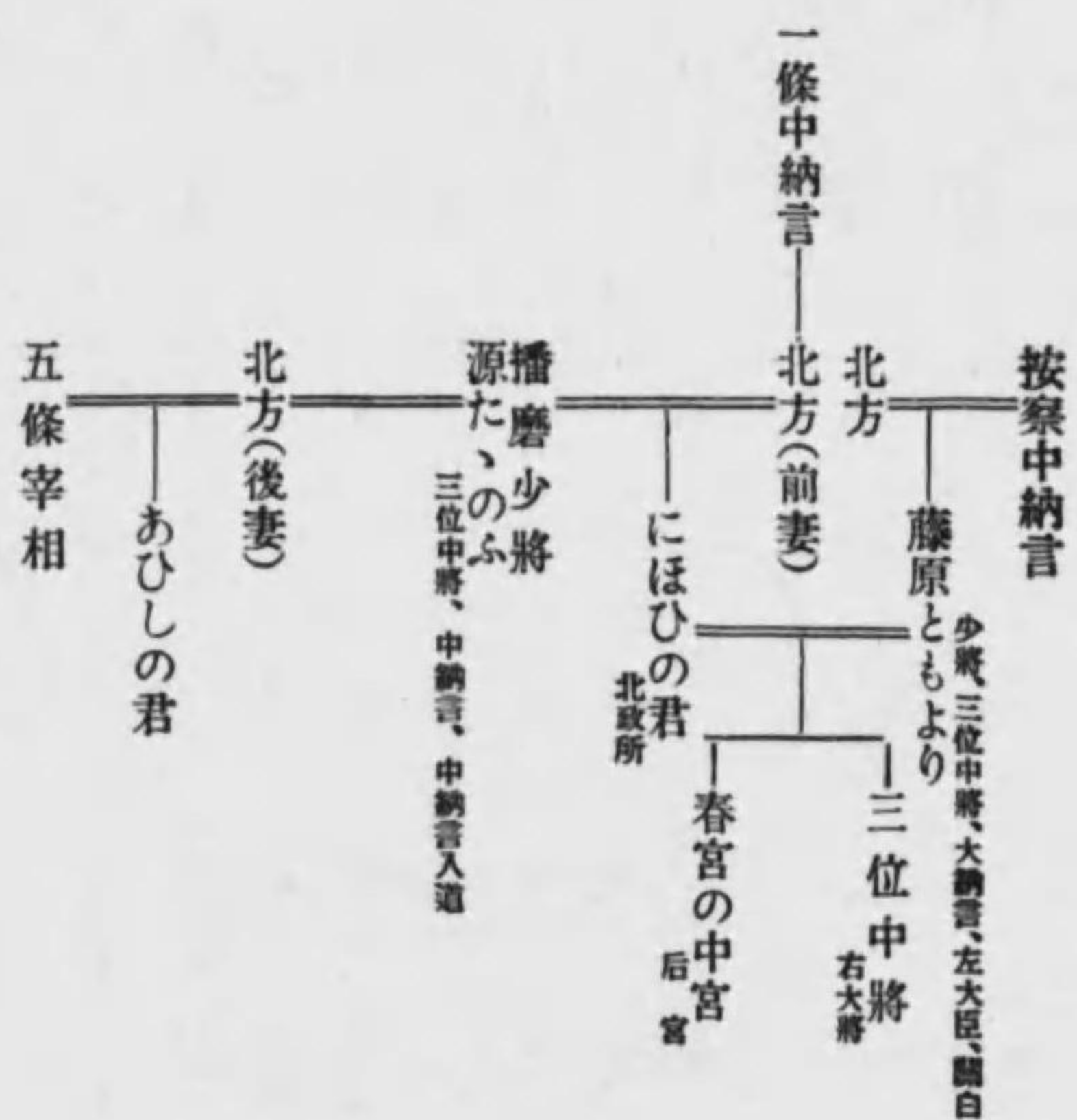
<p>熊野、高、彌、途、ナル六十許ノ 尼君(供十四五騎)ニ救ハ レ信濃國伏屋ニ伴ハル (長月十日餘り)</p>	<p>熊野、高、彌、途、ナル尼君、(同 行三十人許)ニ救ハレ信濃 國伏屋ニ伴ハル (兼月十日)</p>	<p>海士(乗船)ニ救ハレ明石ノ 岩屋ニ伴ハル</p>	<p>姫六十餘ノ老女(中將姫)ニ 救ハレソノ庵ヘ伴ハル</p>	<p>姫山姥ニ救ハレソノ窟ニ住 ム</p>	<p>伏屋ノ邸宅</p>	<p>伏屋ノ邸宅</p>	<p>秋月ノ御所</p>	<p>◎遺母ニ實母遺體 父及ビ少將ノ供養</p>	<p>◎伏屋(庵)ノ住居三年 姫ノ病死(十八)、老女委ラ カクス</p>	<p>◎山姥姫ニ、夫定マラバ開 ケヨトテ小袋ヲ與へ、人里 へ出デシム ◎中將言九々ふさノ家ノ召 使あきのノ請ニテ火焚トナ ル (參考) 鉢かづは</p>
<p>父歸宅、悲歎、寺社ノ祈 ともより乳母ヨリ聞キ悲 歎、遺愛ノ事ヲ強キテノ詠 歌</p>	<p>父ノ歎、祈、遺母ノ伴泣 帯用問ノ行室、供養</p>	<p>遺母ニ實母遺體 父及ビ少將ノ供養</p>	<p>遺母ニ實母遺體 父及ビ少將ノ供養</p>	<p>遺母ニ實母遺體 父及ビ少將ノ供養</p>	<p>父ノ歎、祈、遺母ノ伴泣 帯用問ノ行室、供養</p>	<p>父ノ歎、祈、遺母ノ伴泣 帯用問ノ行室、供養</p>	<p>父ノ歎、祈、遺母ノ伴泣 帯用問ノ行室、供養</p>	<p>父ノ歎、祈、遺母ノ伴泣 帯用問ノ行室、供養</p>	<p>父ノ歎、祈、遺母ノ伴泣 帯用問ノ行室、供養</p>	<p>父ノ歎、祈、遺母ノ伴泣 帯用問ノ行室、供養</p>
<p>遺母色好ノ主殿ヲ語ラヒあ ひしヲ少將ニ婚ハセントシ テ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>	<p>遺母人ヲ嫁トシテ某國ヲ少 將ニ婚ハセントシテ成ラズ</p>
<p>父少將三位中將ヲ經テ中納 言、出家、高野入、勸使ノ 御トブラヒ</p>	<p>少將住、吉、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>中將清、水、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>中將清、水、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>中將清、水、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>少將住、吉、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>少將住、吉、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>少將住、吉、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>少將住、吉、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>少將住、吉、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>	<p>少將住、吉、二籠ル、七日ノ曉 ニ夢想</p>
<p>清、水、二住ム山、伏、ニ衣ヲ借リ テ姿ヲヤツシ妻ヲ捜メテ東 國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊ニテ山、伏、ニヤツシ 妻ヲ捜メテ東國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊(真本)ニ住ム山、伏、ニ 衣ヲ借リテ姿ヲヤツシ、妻 ヲ捜メテ西國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊(真本)ニ住ム山、伏、ニ 衣ヲ借リテ姿ヲヤツシ、妻 ヲ捜メテ西國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊(真本)ニ住ム山、伏、ニ 衣ヲ借リテ姿ヲヤツシ、妻 ヲ捜メテ西國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊ニテ山、伏、ニ衣ヲ借リ テ姿ヲヤツシ妻ヲ捜メテ東 國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊ニテ山、伏、ニ衣ヲ借リ テ姿ヲヤツシ妻ヲ捜メテ東 國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊ニテ山、伏、ニ衣ヲ借リ テ姿ヲヤツシ妻ヲ捜メテ東 國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊ニテ山、伏、ニ衣ヲ借リ テ姿ヲヤツシ妻ヲ捜メテ東 國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊ニテ山、伏、ニ衣ヲ借リ テ姿ヲヤツシ妻ヲ捜メテ東 國ヘ旅立ツ</p>	<p>清、水、邊ニテ山、伏、ニ衣ヲ借リ テ姿ヲヤツシ妻ヲ捜メテ東 國ヘ旅立ツ</p>

伏屋ニ近ヅキテ指シ教ヘツ ツ翁住吉明神ナル由ヲ告ゲ テ浦工失セ給フ	同 上	◎秋月ノ御所ニ近ヅキテ指 シ教ヘツ、冠者清水ノ願 普ナル由ヲ仄メカシ、白鷺 ト化シテ飛ビ去リ給フ	◎宮吉野ニ姫ノ塚ヲ巾ヒテ 自刃シ、通りカ、リシカ カヤノ道心坊ニ遺言、同ジ 塚ニ埋葬
少將等ノ書ト歌聲ヲシルベ ニ寄ネ入りテ姫ニ再會ス	歌聲ヲシルベニ少將等、吹 キテ姫ニ再會ス	中將秋月ノ尼ノ部ニ宿リ、 笛ヲ吹キテ、姫ニ再會ス (太宰大貳姫ニ懸想シタ ルヲ尼許サザリシナリ)	
尼君少將(廿三)ニ裝束ヲ 帯リ持ノ衣ト脱ギ替ヘシム	少將(廿三)ニ裝束ヲ脱ギ替 ヘシム	中將ニ裝束ヲ脱ギ替ヘシム	
少將信濃守ヲ召シ供ヲ命ジ テ上洛、尼同伴	信濃、八、主、参リ御供シテ上 洛、尼同伴	中將太宰大貳ヲ召シテ供ヲ 命ジ、九州ノ諸大名供奉シ テ上洛、尼同伴	
人々ノ喜、姫ノ父入道高野 ヨリ下リテ對面	歡慶、父宰相ノ喜	父祖對面	
賞罰應報 ○少將ハ三位中將ニ(後、 大納言ヨリ左大臣)	賞罰應報 ○少將丹波ノ三郎ヲ本領 ニ送ヘテ賜ハル	賞罰應報 ○中將ハ大將ニ(後、關白 ○秋月ノ尼ハ新造ノ御所 ニ大尼君トテカシツカ ル	
○伏屋ノ尼ハ信濃國ヲ賜 ハリテ國司尼御前ト呼 バル	○伏屋ノ尼ハ信濃ノ内ヲ 所領ニ賜ハル	○あいきやう、あはしヲ 賜ネ出サセテ、中將ノ 弟三位少將ニ贈セシム	
○繼母子入平、あひしノ ミハにほひノ真願ニヨ リテ室ヲ出サル	○繼母失ハルベカリシヲ 野もせノ託言ニヨリ室 サル。姫之ヲ扶持ス	○繼母ヲモ尋ネ出シ、尼君 ト言ベテ御所ヲ造リカ シツク	
	○大納言ハ大臣ニ任テ、 中將左大臣ノ女ヲ妻ニ 迎フ	○大納言ハ大臣ニ任テ、 中將左大臣ノ女ヲ妻ニ 迎フ	
	賞罰應報 ○繼母追ハレテ狂死	賞罰應報 ○梅ヶ枝燈籠ニ流罪	
	○明石ノ海士掃部助トナ リ明石浦ヲ賜ハル	○繼母うつほ船ニツキコ メテ海ヘ流サル	
	○貞家伊豫ノ目代ヲ賜ハ リシヲ辭シテ高野ヘ上 ル	○朝顔ト同日ニ薨ノ君死 亡	
	賞罰應報 ○繼母、しかま電電	賞罰應報 ○繼母、しかま電電	
	○姫ヲ妻テシ武士斬罪ソ ノ妻放免	○巫女、あきの等褒賞	
	○宰相丹後守もりい系ト 名告ル、所知入	○宰相丹後守もりい系ト 名告ル、所知入	

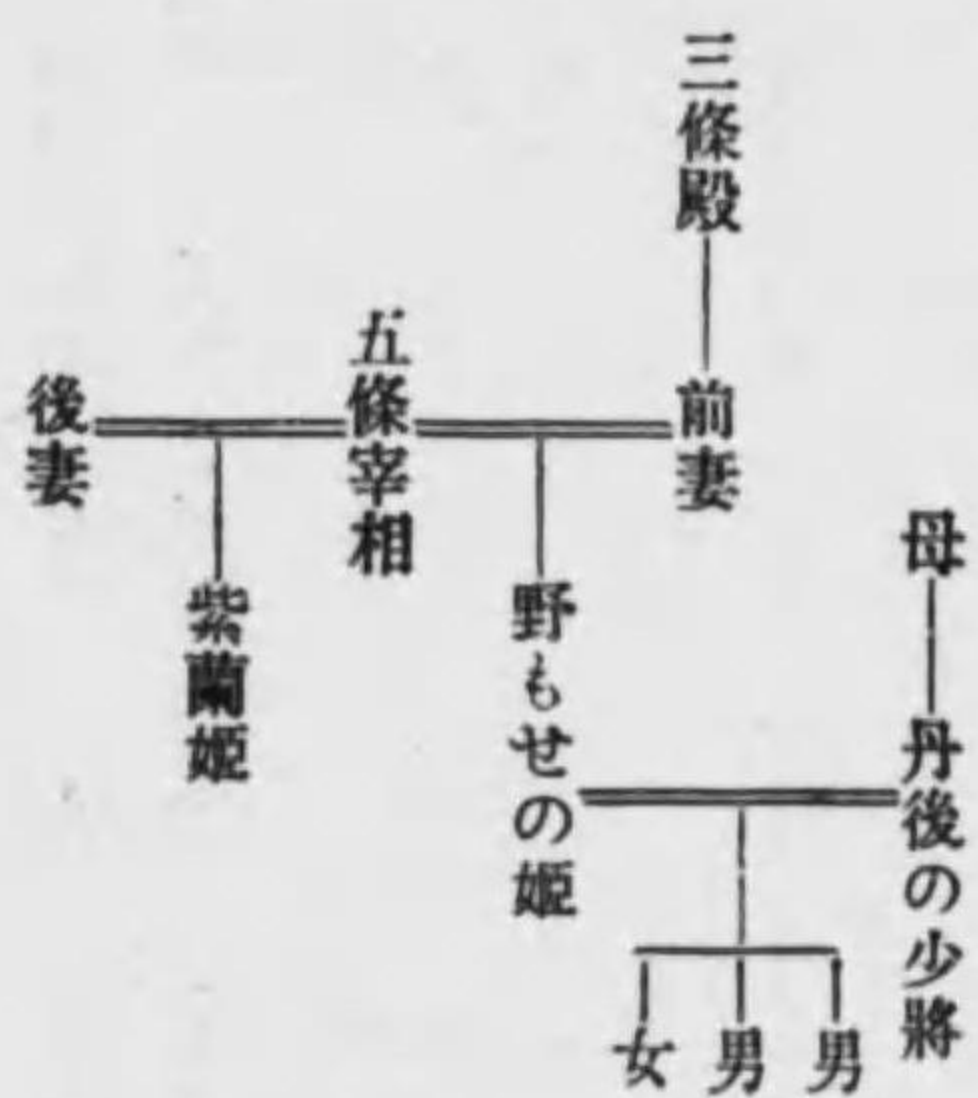
伏屋ニ於ケル姫ノ長歌ノ述 懐ト尼ノ同情	伏屋ニ於ケル姫ノ長歌ノ述 懐ト尼ノ同情	兵庫ノ津ニテ廿四五許ノ小 冠者ト道連ニナリ同船ス。 兩人ノ唱和	
少將大井ノ渡ノ船中ニテ六 十許ノ翁ト道連ニナル。歌 ノ唱和	少將大津ノ渡ニテ翁ノ舟ニ 便乘シテ詠吟	赤間ヶ關ノ遊君かうま すノ許ニ泊ス(異本)	
翁ノ知人ニ泊ス	翁ノ家ニ泊ス	道スガヲ冠者法文ヲ 説キ、自ラ若カリシ 頃ノ想ヲ語りテ贈マ ス(異本)	
道スガヲ翁ニ言ヒアテラレ 山伏ノ少將アラヌ物語ス 翁若カリシ頃ノ自ラノ想ヲ 語りテ贈マス	翁ニ歌ノ目的ヲ言ヒアテラ ル 翁若カリシ頃ノ自ラノ想ヲ 語りテ同行ヲ約ス	◎中將松林中ノ冠者ノ知人 ノ伏屋ニ泊セシニ、内ニ入 レバ玉置ニシテ天人ニモテ ナサレ、名笛ヲ贈ラルト夢 ミテ覺ム。笛ノミ種ル。冠 者ノ所有ナリトテ改メテ讓 ラル	
少將かんかちノ宿ニテ夜住 吉ヲ祈念シテマドロミシ夢 ノ姫ノ歌ニヨツテ姫ノ伏屋 ニ在ルヲ知ル	少將夢中ニ姫ト逢ヒ歌ヲ贈 答ス 姫同夢ヲ見ル	◎中將松林中ノ冠者ノ知人 ノ伏屋ニ泊セシニ、内ニ入 レバ玉置ニシテ天人ニモテ ナサレ、名笛ヲ贈ラルト夢 ミテ覺ム。笛ノミ種ル。冠 者ノ所有ナリトテ改メテ讓 ラル	
姫伏屋ニテ少將ヲ夢ム	姫ノ母夢ニ現レテ三日ノ中 ニ喜アルベキヲ姫ニ告グ	◎中將松林中ノ冠者ノ知人 ノ伏屋ニ泊セシニ、内ニ入 レバ玉置ニシテ天人ニモテ ナサレ、名笛ヲ贈ラルト夢 ミテ覺ム。笛ノミ種ル。冠 者ノ所有ナリトテ改メテ讓 ラル	

左大臣夫妻住、吉、二願果タシノ参詣	一男一女生マル 左大臣關白	一男一女生マル	少將夫妻住、吉へ御参詣、百日参詣	中將夫妻清水へ御参詣 關白トナリテ夫妻月ノ十八日清水へ参詣、通夜				
◎關白後生觀音 北方後在地願菩薩	家門繁榮	同上	同上	同上	北政所(對の屋)ノ二子ノ榮達	◎帝ヲハジメ人々ノ出家 草花ニ化生	◎藤朝顔ノ探ヨリ御子出生 死亡、魂朝顔トナリ宮ノ思ハ電トナル	家門繁榮
(住吉明神ノ利生)	同上	(清水觀音ノ利生)	(清水觀音ノ利生)	(清水觀音ノ利生)	(藤朝ノ方便)	(沼津觀音ノ利生)		〔もりたか沼津觀音へ御参詣〕

(ふせやの物語)



(美人くらべ)



右の対照表によつて、前記諸書構想上相互間の關係は瞭然であると思ふ。其の成立の先後は断定は出来ぬけれど、詞章から觀ても『ふせや』が最も古からうといふことだけは言へさうに思はれる。そして『美人くらべ』は其の改作と看做す事も許され得ると考へる。兩者の關係は影響とか模倣とかいふ程度では無い。次に『ふせや』に近い

のは『秋月』で、『異本』の刊本より早からうといふ考、及び『京極大納言物語』といふ名稱は本文の冒頭によつて假に名づけられたもので、『秋月』の原本とするが至當なるべき事を『室町時代小説集』解題並びに『近古小説解題』、『秋月物語』、『京極大納言物語』に論じてある。『いはや』は最も遠い。『いはや』は僅かの類似の他、寧ろ『秋月』との交渉が大きいやうに見える。本書並びに『美人くらべ』とは間接の關係と言つてもいい、位である。『花よの姫』は『鉢かづき』の改作といふべきものであるが、同時に『いはやのさうし』をはじめ上に擧げた諸書とも關係あるべきことは表の示す通りである。

附記 『異本秋月』が刊本の原本であらうとの平出氏の意見は、尙考慮の餘地があると思ふ。例へば『異本』には最初から「あいのめのおにがはら」とあるが、刊本は「おはらのつばれ」といふ名で初から記され、終の方に「おにがはら」とあつて、「此つばれはもとかはらのつばれと申せしが、姫君をころさんたくみをして、よろづにをそろしき事侍れば、おにがはらとぞいひける」(刊本秋月物語下巻)

と見えてゐる。原本の「鬼瓦」を解釋敷衍したと見てよいのであるが、「おにがはら」といふ名で知られてゐるのを其のまゝ、『異本』に用ゐたとしても不自然ではない。又兩書の中間本或は姉妹本、母本等の關係に立つ諸本も無きを保し難いから、兩書だけその關係を決定することは無理のやうに思はれる。

又、刊本について『近古小説解題』(六頁)には「刊行の年代詳ならず」と見えてゐるが、『新小説年表』(三八頁、近代篇、假名草紙)には「萬治年間版」とあり、家藏本の卷末は左記のやうになつてゐる。

寛文四年甲申五月吉日

東洞院三本木三町目

繪双紙屋

喜左衛門開板

以上諸物語を比較すると、『朝顔』の異色があるのは既に述べた通りであるが、其の他は皆大團圓式説話である

こと、神佛の靈驗説話であること、實母の靈の守護、救ひ主の老尼、それから腹黒乳母に悪武士、夫の遍歴、繼母の報罰といふ定型若しくは其の變形に過ぎぬのが一般である中に、『秋月』の連子あいの君の特に同情深い性格と、『いはや』の姫を棄て殺す役の佐藤左衛門の進退及び男主人公がはじめの婚約の人でないことと、『美人くらべ』の繼母の自決と、『花よの姫』で連子がなく、又姫が申子であり其の救ひ主の山姥であるなどが稍注意せられる。(勿論それらも異常な構想と目するほどではないが。)

もし本小説が最も古いとすれば、『住吉』に學んだ諸點を除き、大體如上諸書の類型的構想の骨子を創り出した事に於て看過され得ないものがあらう。そして『住吉』と本書との隔たりが、本書と如上諸書との隔たりより比較的に大きいといふ事が言ひ得られるが故に、なほ然く言はねばならない。全構成も割合に冗漫なところがなくよくまとまつてをり、まじめなおとなしい、靜な情味の中に物語つてゆく態度、表現も素直で、わざとらしさやぎこちなさや卑俗さが殆どなく、近古小説としては先づ佳作といふべきであらう。

繼母の性格は類型的ながら一貫し、父の母なき愛兒に對する慈しみ、溫良で邪氣の無い姫の可憐さ、父の再婚が、「母」といふものの欲しい姫の慙懣に出てるものも哀れに珍しく、其の「母」が己が仇になつてゆく運命悲劇の展開が此處から始まるのに、偶然の事實としての後妻の婚嫁よりも一段のいたまじさが加へられる。戀人を搜めて國の隈々世界の果、否天上地底まで遍く經巡る愛の行脚は、『秋月』でも『朝顔』でも、『おもかけ物語』でも『天稚彦物語』でも『毘沙門本地』でも、否世界の童話に共通した一様式であるが、本小説では、「戀する人を憐む」誓忝き住吉明神の他人事ならぬ深い同情が特に力を用ゐて寫し出され、これに導かれて來た夫を、「たとひ鬼神なりとも、少將ならば奪られん」と慕ひ焦れる姫の燃える純情も頼もしい。春の夜の朧月の光を浴びて、前裁に夢

のやうに立ちすくんでゐる若い旅籠れのした美しい山伏の姿も浪漫的である。信濃守を召すあたり、それから賑やかな都還りは愈々童話らしい興味が感ぜられるが、「罪あるものに罪を與へねば、かへりて中々まさる事の出で来るなり」といふ信條は、にほひの優しい慈悲を以てしてもなほ、動かし得ない力に作者を支配してゐる時代の倫理觀念・宗教觀念・法律觀念であると共に、大切な社會訓として、永遠に、そして常に、人間の畏るべき自然の制裁が、壞り難き宇宙の絶対理法が、そしてその存在の眞正を肯定し希求する空想が、此の不用意に投げ出されたやうな言葉の中に、單純で且意味深い姿に説き示されてあるやうに感ぜられる。たゞ主人公夫妻の後生の説述が全説話に何の關係もなく、取つてつけたやうで變であるが、『浦島太郎』でも『物ぐさ太郎』でも同様で、消し難い時代意識は仕方が無い。

【題 號】 伏屋の尼君に女主人公が救はれて其の庵に伴はれ、其處で、暮ひ下つた山伏の少將とも再會するに由ること言ふまでもなく、秋月の尼に救はれたあいきやうの君の物語が『秋月物語』と呼ばれてゐると同じである。改作の『美人くらべ』は即ち改變附加せられた發端の條に由つて命名せられたといふわけである。

【年代及び文體・用語】 『ふせや物語』の名は『風葉和歌集』（卷八、扇旅）に見えてゐる。『古物語類字鈔』に

風葉集・色葉集の所見

「ふせや物語

風葉集旅ふせやの「墨水遺稿」卷一、一〇七頁

と擧げ、又別に

「ふりや物語

色葉集卷三物語ふりや

按に、古物語目録は、ふるやに作れるよろしげなり。又おもふに、上のふせやの寫誤にはあらじか、同前)

とある。『ふりや』は暫く措き、本書の少將は後に關白となるのであるから、「關白北方」の名稱に矛盾はないが、

『風葉集』所載の歌は

「雁がれよしばしとまりて旅の空こひなくわたの物がたりせよ」（丹鶴齋書本）

とあつて、本書（本輯四八頁）のとは稍似て而も同じではない。本書の一本——と言はんよりは本書の古本乃至原本といふべきもの——であらう。そして右の歌が却つて

「かりがれよ都のかたえ行ならばしとまれ、ことづてもせん」

とある『異本秋月物語』（室町時代小説集）の同場面に相當する歌に近いことも注意せらるべきであると思ふ。（刊本『秋月』の歌は又此の『異本』のに近くして、『ふせや』には遠い）

本書を通讀しての感じでは、文體詞章何となく古雅な一種の氣品があつて、近世的な平俗なにはほひに餘り浸潤してゐないやうに思はれる。『美人くらべ』に比する時、一段と此の感じが深い。内容に盛られた思想からも同じ歸結に導かれ得るが、此の種のものでは比較的古い方の作と考へられる。若し古い『ふせや』があつたとすれば、それに遠くない頃の作か、或は古い『ふせや』に僅少の新しい時代的潤色の加へられたものかであらう。しかし「おさあひ」（三九頁）「行あひばら」（四六頁）などの語も見えるし、やはり室町期の作ではあらう。明應八年以前の作であることだけは前田家本の奥書で明らかである。（原本並所在の項参照）

【原本並所在】 『新日本小説年表』にも、古代篇、散逸物語目録中に入れてある通り（それは『風葉集』に見え

本輯に収めたのは編者亡父の筆寫に係る一本に據つたので、原本は大震災の混乱で所在を失つたのは遺憾であるが、同類の物の中で『いは屋もの語り』『いはやのさうし』『異本』だけは残存してゐる。

本文を校訂するに當り『美人くらべ』を参照することにしたが、幸に前田侯爵家の厚意によつて尊經閣の秘本披露の機を得、且校合をも許されたので漸く望蜀の念が満し得られた。前田家本のごとは、十數年も以前に大野木克豊氏が東京帝國大學國文談話會で紹介せられたやに記憶する。亡父の筆寫したものが在るのを知つたのは、それより遙か後、亡父を帝都に迎へてからである。而も編者は間もなく大患に臥し、父亦鬼籍に入り、竟に今日に至るまで對校の機が恵まれなかつた。

前田家本は白地雲形表紙粘葉綴鳥子紙の古寫七行(八行の箇處もある)堅本(縦約七寸、横約四寸八分)で、「ふせやのものかたり」と表記してある。内題も同じく「ふせやのものかたり」とあり

「明應八年八月五日」

の奥書のある一巻である。亡父の筆寫本の間接の原本とも見らるべきもので、少將がにほひに通ひ初める段は、既に脱してゐる。

なほ前田家本には、「ふせやの物語考追記」(大野木克豊氏調査)の短い一文が添へられてある。『異本秋月物語』との關係を略述し、『近古小説解題』の梗概を通しての『美人くらべ』(當時有朋堂本未刊)との交渉を推測し、如無僧傳説の影響を指摘してある。簡略ながら大體愚見と一致してゐるが、早く『秋月物語』との關係に著目せられたこと、新古の『ふせや』及び『秋月』成立の過程の想定(即ち『秋月』の成つた時、新古『ふせや』共に存したか、其の據所としたのは何れの『ふせや』であつたか、凡て不明であるが、成立の順序を推測して試みに言ふならば、

大野木氏のふせやの物語考追記

古『ふせや』から新『ふせや』が生れ、次いで間もなく『秋月』が成つたのであらう。『異本秋月』の刊本に先だつべきは『室町時代小説集』の説の通りであらうとの見解)と、龜の件は古『ふせや』になかつたかもしれないとの假想とを、氏の創見として特記して置きたい。

【系統・影響】 改作せられて『美人くらべ』となつた他、『朝顔』は勿論『秋月』でも『花よの姫』でも、『ふせや』より後の作であるとすれば、直接に間接に、部分的に全説話的に、即ち此の系統に屬する繼子物型戀愛小説の數種に少からぬ影響を與へてゐることの想測が可能であることは、前に説いたところでおのづから明らかであらう。そしてそれは『落窪』によつて代表せられてゐる此型古物語(『落窪』以前又『落窪』と同時代の散佚した同種の物語がどの位在つたかは知り難いが)に源流を發してゐる同系の説話・文學の史的展開を意味するものであること勿論である。

其の展開の間、説話としての形態の變移、作品としての構想の進化等と共に、各時代の姿相風向が照映せられてゐることも著しいものがある。『ふせや』と『美人くらべ』の終局について比較しても、前者が大團圓の結末に附するに更に主人公夫妻の本地的説明を以てせねばならなかつたのと、後者にはこれがなくて、代りに、前者では入獄に止まつてゐる繼母の刑罰が自殺の形式に進められてゐるのに看ても興味ある對照をなしてゐると言へる。更に徳川期を降るに隨つて、作家の個性に根ざす獨創的な改變をも加へて一層複雑化して來てゐることについては、單に繼子物語の史的考察といふ立場からならば、數多の例證と多様の問題が擧げられ得るが、特に本小説の影響文學として著しいものは無いやうであるから茲には省略することにする。

たゞ古淨瑠璃の山城左内の正本の外題に『ふせや』の名が傳はつてゐるが、其の内容が知られないから本書と關

古淨瑠璃ふせや

係のあるものであるか如何かを定め難い。

かくれざと

寫上下二卷二冊

今宵は秋も半ば夜も半ば、二千里の外まで隈なき新月の光に浮かれ出て、賀茂川を徒渉りし、南へ／＼と行くうち、いつか木幡の野邊へ出てしまった。ふと目に入つたのは向ふの岸陰の大きな異様な穴、その奥から漏れて来る人聲。さては狐の古塚か、音に聞く鼠の隠れ里か、都への土産話にと拔足差足孔道を牛町ばかり辿れば、忽然と眼前に展開した一箇の別世界。棟門・唐門建て並べ、臺盤所あり遠侍あり、五十間の厩、五十もとの鷹部屋、金銀瑠璃水晶の殿堂庭苑、泉水の美花木の妍、遙につゞく山海の絶景、すべてこれ人外の境、唯驚異の眼を瞪る他はない。更に驚いたのは、此の豪奢の殿造りに人一人影を見せず、代りに立ち働くのは數多の鼠共であることである。立白を圍んで、杵を振上げながら異常な聲に節面白く謠ふ米唄のをかしさ。

早苗の葉には蛭も附きそ。虎毛の猫は聲をいや。

誰か来たやうである。馬に乗つて驅附けた早打の鼠であつた。そつと聴き耳を立てると正に一大事變の突發である。事の様は、此の程攝州西の宮に棲む鼠、惠比須殿の御供へを盗み取つたといふので、狛犬の怒に遇ひ、恐れて逃げ還つて愁訴したので、鼠の同勢二三百、西の宮の社殿を襲ひ毀つた。惠比須狛犬に命じて平田舟の地獄落し、釣針の絲のさげ裏に、鼠共を散々に苦しめ懲らせば、親を喪ひ子を殺され道々逃げ還つた鼠共、復讐の凝議に餘念なき折柄、吉報を齎したのは蝙蝠の四郎、伊勢の國渡會郡に坐す惠比須の御兄月讀の宮、明日西の宮へ茶の湯に招かれるにつき、松風といふ茶臼に河しまといふ挽木を拜殿に取出して支度中であるといふ。時こそ来れと押掛けた鼠共、掃除した數寄屋には塵を撒き、寶物の茶臼には小便をしかけ挽木は打折つてしまった。勿論月讀の宮招待は俄に中止とならねばならなかつた。

惠比須の憤怒絶頂に達し、急ぎ狛犬を召して比叡山の大黒天へ詰問の使を命じた。大黒は打出の小槌を振つて、白・挽

木とも舊物よりも見事なのを出して辨償されたが、惠比須の怒は解けず、散々に鼠を罵り、且舊の白・木でなければ受取らぬとの無理難題である。狛犬再び参つて此の旨を傳へると、最早堪忍ならずと今度は大黒も立腹し、惠比須の口上に悪口を言ひ返して遂に談判破裂、攝州近在の鼠共は追はれて我先にと比叡山に逃げ登る。惠比須俄に兵を集め、龍宮城へ下知して魚貝の軍を召せば、龍王止むなく仰に隨ひ、集まる軍兵無慮十萬八千餘騎と註せられた。(上巻)

此の趣を耳にした大黒天神は三面の形を現して赫怒し、比叡山に城を構へ、都の内の鼠數少しとて俄に早打を以て隠れ里の鼠共を召し上せ、此方も軍勢十萬餘騎、鳴尾の鼠次郎穴住を大将として武を耀かすところに、敵陣から使者が参つて、惠比須自ら系圖を誇り、大黒を卑しめ威す勸降の詞を齎したので、大黒は改めて穴住を使として應酬の口上を傳へさせた。悉くも初利天主と仰がれる此の大福徳神に對つて、不具者の漁師殿が系圖自慢も事可笑しや。其方こそ降参なくば御運も末と滔々と述べ終つたはよいが、鳥居の邊りにねうくと啼き立てた虎毛の猫に氣勢を挫かれ、流石の勇將も魂を馬諸共に空に飛ばせて逃げ歸つた。

惠比須軍は四條室町惠比須町、大黒軍は二條河原町大黒町と互に勢を示して對陣し、今や戰雲低く閉さうとする刹那、意外の調停者が突如として海の方から現れた。彌勒菩薩の化作、唐土の布袋和尚である。日本に渡り都一見の折柄、三條邊の妙しい馬煙に怪しみをなし、それが二舊友の合戦と聞き知つて、兩神の陣門に駆けつけ、神佛二道争無きを本とするのみならず、福の神の譯は貧乏神の幸、福は下からと些細の原因に歴々の不和こそ笑止、柔和忍辱は佛道の掟、平に堪忍あれと懇に説いて和平を取結ばせた。

「思ふ中には垣をせよ」といふ事もある。遠きは花の香、餘り近いのが却つて口説の因と、和尚の計らひで兩福神の社殿の間に隔ての板が打たれた後、和睦の宴が二條富の小路布袋屋町の布袋の宿所で開かれた。めぐる盃の間に、昔を思出の相撲が始まる。惠比須の行司に大黒・布袋互に絶衝を盡し、勝負は更に見えず、二人共にさても取つた取つたといふ感歎の聲に思はず夢が破れた。(下巻)

擬軍記物

【性質】 童話的寓話譚である。そして、近古小説の中に一群を形成してゐる擬軍記物の一で、且一種の異

概

梗

異類合戦記

類物である。即ち『精進魚類物語』(一名『魚鳥平家』)『鴉鷲合戦物語』『十二類繪詞』『佛鬼軍』『雞鼠物語』『墨染櫻』(一名『草木太平記』)『河海物語』等と同じ系統に屬すべきもので、同時に一面に於て『梅津長者物語』『大悅物語』等の福神物——祝儀物——に聯り、他面に於て『猫の草紙』『鼠の草子』『やひやうゑぬずみ』『藥師通夜物語』等と共に鼠を取扱つた近古小説の一として特殊の意義を有するものである。

附記 大黒天にも關し、鼠の説話でもある『藥師通夜物語』(後人の附した題簽に『福齋物語』)『上京福齋物語』『寛永飢饉鼠物語』など記したのもある)は、右の意味からすれば其の兩者に跨る性質のものとも言へようし、直接交渉の有無は措いて、此の點では、少くとも以上の鼠小説中では、素材上本書とは先づ最も關係の近い作といふことが出来る。又『雞鼠物語』は雞と鼠との争から起る鳥獸の合戦譚である。

多少の諷刺もないではなく、又、近古文學通有の本地物的色彩を帯びてゐるが、童話的の成分が濃い。單純な御伽草紙系の作と看るべきであらう。

【構想・表現】 軍記物のパロディ、特に、惠比須・大黒といふ仲よしの而も平和の福神に戦をさせる處に皮肉な滑稽がある。そして同時にそれは神佛の争闘であり、大體に於て、海と山との、魚貝と獸(鼠)との合戦といふわけである。其の中で、狛犬の他に海方に猫太郎と鷹のすけがある不調和さは、鼠の強敵といふ用意からであらうが、之に對して山方に馬が屬して鼠軍に驅使されてゐるのが妙である。

南北朝から戰國時代へかけて、輦轂の下屋、修羅の菴と化した慘禍、特に兩頭首の勢力争ひ、東西兩軍の對立、京師の市街戦と、觀て來ると、應仁の兵亂も或意味では反映してゐると見られぬでもない。兩福神が互に使者を遣して、問答に内外典を引き、又自らの氏系圖を誇り合ふのは、特に狂言には『齋樂棟』『酢薑』『牛馬』『羯鼓炮礮』

系圖就べ

等の一群を作つてゐるほど、近古文學に共通した著しい時代意識の顯れであるが、西の宮の惠比須殿が本土生れの蛭兒の命であるといふ系圖は、普通の傳説通りで珍しくないけれども、之に對立する舶來の大黒天神が、なほ大國主神に結びつくのを避けたのはそれとして、

「奈くも天に在りては須彌山の頂に坐して、三十二神に仰がる、帝釋天王也」(本輯八四頁)

とは思ひきつた吹立てやうである。雙方の言葉戦ひそれ／＼に面白いが、惠比須の方は比較的正直らしく、老獪さと理窟では大黒の方が一段上と受取れる。問答戦では先づ叡山方に團扇が上りさうである。

結局、支那から來遊した同じ福神の布袋和尚の扱ひで和睦が取結ばれ、神佛兩部めでたく合體、同時に本朝・天竺・唐土の三國提携も成つたわけである。

此の終局を更に黄梁一炊の夢としてしまつてゐるのはくどいやうでもあるが、大黒・布袋兩福神の相撲に惠比須の行司といふ畫面を當込むに利用しようとしたのもあらうし(同じ近古小説の『梅津長者物語』(室町時代小説集所載)にも、是が見える。それから出たのでなかつたら、當時弄ばれた戯畫か人形でもあつたのではなからうか)(年代)の項参照)は、はじめの隠れ里の怪奇が是で夢裡に消失する結果にもなるのである。隠れ里へ屬附けた早打の口上を聴いてゐると思ふうちに、いつのまにか比叡山の勢揃となり兩軍の對陣となり了る變轉の自在さの無理も、話説の心理的自然性に其の避難所を覚める前に、夢ならば問題無しに寧ろ自然にさへ救はれてしまふ。

扱その隠れ里は、後に説く如く(素材)の項参照)一種の非實在境の展開であるが、勿論作者の創出したところではなく、又其の殿舎の形容にも『太平記』(卷三七)に粉本を求め(年代)の項参照)てゐると共に、特に既と鷹部屋を點出して來たり、白を並べて米を打つ狀など寫してゐるのは、恐らく『宇津保物語』(吹上(上)卷)の吹上の宮及び種

宇津保物語
吹上(上)卷

松が牟婁の家の景趣に擬したと考へられる。既の挿繪を『宇津保』流布の刊本のそれに比べても(刊本の臨本のそれも想像出来るから)一寸似てゐるが、殊に「畫詞」の

「側に西東の御殿、別當あづかり事々しう、御馬十づつ、鷹屋に鷹十づつすまたり。大殿町、檜皮葺の金銀瑠璃して造り磨きたる大殿・波殿更にも言はず照り輝けり」(吹上の宮の狀)

「男ども五十人ばかり並み居て、壺盤立てて物食ふ(中略)男ども集まりて、狙たてて魚・鳥・つくろ。(中略)御殿に、よき馬二十づつ、西東に立てたり。預りども居て秣飼はず。側に鷹十ばかりすまたり。(中略)間一つに白四つたたり。白一つに女ども八人立ちて米しらげたり。(中略)これは酒殿、十石入るばかりの瓶、二十ばかりすみて酒造りたり。(下略)」(種松の家)の狀)

とある文を偶合とすることは出来まい。本書の此の條の描寫の半ばは殆ど全然『太平記』の文に借りてゐることも此の想像を強めるからである。

謡曲隱れ里

又、謡曲に同名の曲(四百番外百番)があつて、靈鼠が女と化して現れる報恩話話を内容としてゐるが、若し此の曲の方が早いとしたら、或は本書の構想の一部に何等か影響してゐるところがあるかも知れない。でなくとも所謂鼠の隠れ里の傳説を素材としてゐる點は兩者同一である。(其の主題は各、全く異なるところのものであるが)。

但し本書に取材せられた隠れ里の傳説は、それが物語の發端をなしてゐる他、其處の鼠共が召集に應じて大黒軍に参加するといふだけで、それ以上は、且それから後は全話とは緊密な關係は無い。僅に、戦因の物語られる場所が其處であるだけが意味をなしてゐる。隠れ里の傳説を活かさうとしたのは面白いが、それと福神合戦と二つの主題を一篇に併せ盛らうとして、而も兩者の結びつけ方が餘りに無造作に過ぎてゐる。それも南柯の一夢とあれば問題にならない。

七福神

とにかく、たわいのないものではあるが、無邪氣な茶氣もあり、御伽草紙としては一寸面白い作と言へよう。そして扱ひの布袋和尚の言ふやうに、「禍は下から」と、仲よしの兩神の不和も、全く豫期せぬ部下末輩の心ない些細の行爲に端を發してゐる事の戒と、「餘り近きは口説」の基といふ人生教訓とは、やはり眞理である。

【素材】一 惠比須と大黒 所謂七福神の完成は、個々としては其の時期が不同であり、又古くは壽老人を缺いて狸々が加はつてゐるが、近古少くとも徳川初期には略、作り上げられてゐたやうで、前記の『梅津長者物語』には

夷三郎・大黒天・辨財天(稻荷)・毘沙門天・壽老人・福祿壽・布袋和尚

と七神完備し、又大黒舞のこと及びその歌詞も見えてゐる。(『大悦物語』にも載せてあるが歌詞少異)

狂言蛭子大黒天

狂言「蛭子大黒天」(『猿狂言記』卷之二)

「西の宮の蛭子三郎殿と比叡山の三面の大黒殿へ」と祈誓を付けてござれば」

とあり、(兩神各の由來の物語が述べ立てられるのは、本書の系圖競べの原據かとも考へられぬではない)。「大悦物語」(『今昔物語』卷一六「參長谷男依觀音助得富語第二八」それから出た「宇治拾遺物語」卷七「長谷寺參籠の男利生にあづかる事」の説話に基づき、若しくは同一童話の別に地方的に遊離してゐたのを素材とした孝行物語)には、「大黒天」と「夷子三郎」の兩福神が孝子大悦之助を守護することがあり、「藥師通夜物語」では、大黒天が鼠共の爲に宮毘羅大將に代つて藥師に陳訴し、又同書卷末に「大黒判」と在る下知狀まで附してある。

鼠と大黒天

鼠と大黒天との縁故は、その神位が子(北)である一方、印度神の内地化に當つて、大國主神話(『古事記』上卷)の禽獸童話的分子が附隨して來たに因るのであらう。なほ此の内地化に際して、大黒神の負はされてゐる袋は、これ

も右の神話に結びついた爲であらうが(『塵塚物語』卷四「夷大黒之事」の條に、ト部兼俱の説として載せてある大黒の由來談も、袋の事から大國主神が本體であることを説いてあるが、印度神には觸れてない)原神(顯教)にも附屬してゐる物であることが一層此の轉移を容易ならしめたのであらう。打出の小槌は隱義・隱笠と共に鬼が島の寶物の中に數へられてゐた物でもあるが(『平家物語』卷六、祇園女御の條・御伽草紙「一寸法師」狂言「寶の槌」寶の笠」節分等)これが佛説の如意寶珠の變形——一方に於て彦火々出見尊海宮行神話(『記』上・「紀」神代卷下)の干滿珠と轉化すると共に——であらうとの想像に、確證を與へる有力な材料として、『尤の雙紙』(三七、「丸きものしなじ」の「大黒の持つは如意寶珠」の記述と併せて、本書の大黒からの返書中に、

「手に持ちたる槌こそ、如意寶珠の形を示し、心のまゝに寶物を打出す。諸々の衆生の願ひを叶へ、心に隨ふいはれあり」

(本輯八五頁)

とある文が注意せらるべきであらう。(『さよひめ』考説参照)

元來、印度神としての大黒天は、密教では毘盧遮那の惡魔降伏の相の現れとして闘戰神であるが、(此の意味からすれば、惠比須との戦争も奇とするに足らないが)顯教では食厨に祀られる施福神である。我が大黒天は主として後者のその移入であらうが、本書に現れてゐるところに見ても、兩者の混合したまゝで傳來してゐることが知り得られる。(辨財天と共に毘沙門天を合體させてある所謂三面大黒天そのものに既にそれが認められるのであるけれども)又、大黒の系圖物語りに、帝釋に附會するもの(構想・表現の項参照)全くの出鱈目ではなくて、

「昔摩伽陀國中、有婆羅門。名摩伽、姓憍尸迦。有福德大智慧。知友三十三人、共修福德。命終皆生須彌山頂第二天上。摩伽婆羅門爲天主、三十二人爲輔臣。以此三十三人故、名爲三十三天。喚其本性、故言憍尸迦」(『大智度論』卷五六)

印度神としての大黒天

に其の縁由の原據の説明を求むべきではなからうか。

なほ、夷三郎の名は既に『源平盛衰記』(卷九、康頼熊野詣の條)に見え、『吾妻鏡』(卷四三、建長五年八月十四日庚申)には「三郎大明神」と記してあるが、『太平記』(卷二五、自伊勢進寶劍事并黄梁夢事)に至つては、

「姪子と申すは今の西宮大明神にて坐す」

と明記せられてをり、之を、

「西宮のえびす三郎九郎殿」

と呼んでゐるのは狂言釣女『狂言記』(卷之四)の頼うだ御方である。

布袋和尚も、早く「十訓抄」(卷下、第一〇)「可成幾才能事」の(四六)に

「さればにや布袋和尚の十無益を書き給へる中に、文武不備心高無益とあり。和尚は彌勒の化身なり」

と出てをり、舞曲「小袖會我」にも

「又布袋和尚の十無やくに、きやうやくとせつにて、僧形むやくとのべ給ふ」

とあり、『梅津長者物語』(上卷)には

「是は震旦徑山寺の布袋和尚とは我事也」

と名告つてゐる。

二 隠れ里 次に隠れ里であるが、勿論鼠に限つたわけではない。謡曲「小袖會我」に「命社鹿の隠れ里云々」、御伽

草紙の「鶴の草紙」の「隠れ」は鶴の棲處の靈洞であり、又舌切雀の竹籤の御宿も其の隠れ里(参考)の項参照で

あるけれども、鼠のそれが特に名を成してゐる。そして隠棲の巢窟の意に過ぎないのであるけれども、傳說的・

童話的な好奇的神祕觀念から其處に特殊の非實在的世界を空想したい欲求が、之を美化し不可思議化して終に一箇の理想郷にまで作り上げてしまつたのである。即ち所謂仙境思想の變形で、天狗の内裏(天狗の内裏(参考参照))といふも相似た想念に基づく。必竟は在來の蓬萊思想・龍宮思想の流れと動物生活に關する知識的興味との結合である。(そしてこれが又やがて其の儘、かくれ遊びがてらに、生身の普賢菩薩も拜まれようといふ浮世の外なる不夜城の歡樂郷の異名へと移つて行つたと怪しむに足らない。)

しかも右の空想が確立せられるには、本書が自ら明示してゐる「費長房」の「壺中の天地」仙話などに有力に示唆誘導せられたであらう事は疑を容れない。此の仙話は「蒙求」(中、「壺公譚天」などの影響かして、近古の人々にはかなりの興味を以て迎へられ流布してゐるらしく、「會我物語」(卷二)には「費長房が事」の一條が挿入せられてをるほどである。(『今昔物語』卷一〇「費長房夢習仙法」至蓬萊返語第一四)にも變つた形で古く載つてゐる。『壺中天地乾坤外』といふ「朗詠」の元稿が句も膾炙されてゐたものであらう。(本輯七一頁頭註及び『ほうらい物語』考説参照)

鼠の隠れ里の名が傳說的に特に有名であることは、『藥師通夜物語』に

「人王三十二代用明天皇の御宇より已來代々の記録、れすみの頭領かくれ里と申所に御座候」(徳川文藝類聚第一、事實小説『福喜物語』)

とあるのも滑稽であるが、

「雪やひく松や鼠のかくれ里友直」(『小町踊』春上、千日)

といふ句もあり、『俚言集覽』(加集)に此の句を引いて、「かくれの里は肥後五加のかくれ里」と説明してある。即ち平家の落武者の子孫の隠棲地として有名な五箇庄をさすのである。(これも後のものながら、去來の「鼠賦」にも、

「汝が隠里、いづくのほとりぞや、武藏野の鼠穴にや、出羽の境の鼠が關なる、信濃の奥の鼠窟なる、風俗文選」卷三、賦類附譜)

など言うてある。前項に述べた謡曲の「隠里」は即ち此の武藏野の鼠穴で、本書のそれは、西の宮と叡山、乃至は京に近い處を必要とした爲ではあらうけれど、これにも傳説上の地方的原據が無かつたのもなさうである。

伽婢子の栗栖野隠里(木幡野隠里)

「伽婢子」(卷一)に「栗栖野隠里の事」の一怪話が載せてある。「白猿傳」式の英雄怪猿退治傳説で、播州印南の内海又五郎といふ者の武勇譚になつてをり、又後の馬琴の「八犬傳」(第六輯卷之五下)の庚申山に現八が猫怪を射る條(第六十回、胎内實現八妖、申山窟冤鬼託體)を想起させる場面の在る説話でもあるが、原説話は「剪燈新話」(卷三)の「申陽洞記」であること勿論である。(馬琴にはそのいづれもが粉本になつたのであらう)ところで、其の化猿の爲に奪取せられてゐる幽地といふのが、舊主たる鼠共の告白に隨へば、

「そもく我等は是虛星の精靈として、大黒天神の使者也。此所は鼠の住所として世に隱里と名づく」

と説明せられ、且、その鼠共に送られて還つて來た又五郎が

「目を開くに一つの白き大鼠其の外十四五許の鼠大さ豚の如し。地を掘穴を穿ちて、野原に出てたり。道行く人に爰は何處ぞと問へば、木幡山の麓也といふ」

といふのであるから、説話の内容は翻案であつても、利用せられた傳説は、口碑の據る處が在つたのかも知れない。但し、その申陽洞に當る木幡野の隠里、大黒天神の使者などいふ記述を省けば、右に引いた文の處でも「虛星之精」と稱する老父共が穴を穿つて送り還すことも、

「聲止開目、見一大白鼠在前。群鼠如豚者數輩從之」

剪燈新話の申陽洞記

といふのも全く原説話の儘である。若し口碑の本據が在るのでなかつたとすれば、そして翻案に際して、其の素材が、却つて本書からなど借りられたらうも知れぬとすれば、或は木幡野の隠里は本書作者空想裡の關東からの移植であつても不都合はない。

馬琴は「燕石雜志」(卷四、浦島之子の條)に

「この餘、鼠の隱里は述異記に出たり。それには鼠國とあり。」

とだけ記してゐるが、此の「鼠の隱里」といふのは、單に傳説としての鼠の隱里のことだけを意味するのではなくて、御伽草紙としての「隠里」即ち本書を指すものであることは、「鼠の嫁入」「鼠の草紙」と並べて「かゝる類の物語は、昔繪巻物にてありけるを、後に梓にのぼせしならん」と論じてゐるのでもわかる。ところで、その「述異記」の文とは、「鼠國」の題下に

「西域有鼠國。大者如犬、中者如兔、小者如常。鼠頭悉白。商賈有經過其國者、若不祈則嚙人衣裳。」

と見える簡單な記述である。前に述べた「剪燈新話」の「申陽洞記」には無論關係があらう。又我が國の鼠の隱里傳説の發生進展にも或は關係があらう。けれども本書の直接の原據としての唯一の資料とは見做し難い。

【題 號】 本文の

「もしは日頃聞き傳へし此の野邊には、鼠の棲む隠れ里のありといふ」(本輯七〇頁)とあるに出てるのは言ふまでもない。(なほ隠れ里の説明に)

刊本には「かくれ里の物語」と題してある由であるが、未見の書であるから、内題がさうであるか如何かも知り得ない。(「原本並所在」の項参照)

かくれ里の物語

又、一本(早大本)に附せられた「あびす大こくかつせん」の名は、其の書の内容に相當してゐて、論はないこと後に述べる通りである。(「原本並所在」の項参照)

太平記の影響

【年代】 文中「徒然草」(九七段)を引き(文句は少し違ふが)(本輯七八頁参照)、又鼠の隠れ里の殿舎の描寫中、「十二間の遠侍には云々」(七一頁参照)及び「六間(原本「門」)の會所には云々」(七三頁参照)は、「太平記」(卷三七、新將軍京落事)の佐々木道譽の宿所の體を敘した

「爰に佐渡判官入道譽都を落ちける時、我宿所へは定めてさもとある大将を入替んすらんとて、尋常に取したためて、六間の會所には大紋の疊を敷雙べ、本尊・脇繪・花瓶・香爐・鑪子・盆に至るまで、一様に皆置調へて、書院には、蕨之が草書の偶、韓愈の文集、眠藏には、沈の枕に純子の宿直物を取副へて置く。十二間の遠侍には、鳥・兎・雉・白鳥、三竿に懸雙べ、三石入許なる大筒に酒を滿へ、遁世者二人留置きて、誰にても此宿所へ來らん人に、一獻を進めよと、巨細に申置きにけり」

といふ文を殆ど其の儘借り用ゐる處から見て、本書が右兩書以後の作である事は明らかであるし、其の他、鎌倉と京都と五山の分離對立、大和國片岡の達磨寺中興(永享二年)等の史實も年代測定の參考資料にならぬではないが、それよりも直に注意を惹くのは、鐘の銘の件で知られてゐる例の方廣寺の大佛の事が二箇所(七〇頁、八七頁)も見えることで、之によつて、略、徳川の初世(秀吉創建の天正十四年以後たるは勿論、恐らく再建の慶長以後)と推定し得る。全體の内容・詞章から言つても、餘り古く溯らせるわけにはいかない。

梅津長者物語との先後

序に、本書末段の大黒と布袋との相撲に惠比須の行司を勤める構想について「梅津長者物語」に比すると、本書の文が

「いざや昔を思出の相撲を始め申さんとて云々」(本輯八九頁)

薬師通夜物語と本書

とあるを見れば、兩書共通の素材から取り來つたのでないとすれば、「梅津長者」の方を早しとする方が自然らしくも考へられる。いづれにしても兩書の間は何等かの關係あることだけは否まれないやうに思ふ。

又「薬師通夜物語」は御伽草紙「猫の草紙」に學んだところがあると思はれるものであるが、寛永十八年の飢饉の事を敘し、卷末の「大黒判」の日附が「寛永二十年二月日」となつてゐるから、それより古い作でないことは知られる。斷定は出来ないが、本書の方が全體の感じからいへば少し早かりさうに思はれる。「通夜物語」は創作の年時からいつても、主人公の籤醫福齋の名からいつても、「竹齋物語」(寛永十四年以前の作)の影響を受けてゐることは確かで、假名草紙の色調が多分にある作である。

【原本並所在】 西村市良右衛門刊の寛文版「増補書籍目録」(舞草紙部、一五八丁ノウ)に「二 かくれさと」とある。

元禄五年刊の「書籍目録」(五之卷「舞草紙部、二八丁ノオ)にも「二 かくれ里」と出てゐる。

正徳五年刊の「増益書籍目録」(卷二、「ウ」の「假名部、二二丁ノオ)には「二 かくれ里」と見えてゐる。

朝倉氏の「日本小説年表」(舊版、三一頁)には、年代不詳部に「〇かくれ里 二」と見えてゐるが、「新修」の方にはこれが無くて、その代りに

「〇かくれ里の物語 二 明暦二年

卷末に明暦二年ぬ屋仁兵衛」(三五頁、近代篇、假名草紙)

とある。「書籍目録」の記載と併せて、本書の刊本であることを推知し得るけれども、未だ管見に入らない。

東大國文研究室本
(本輯底本)

本輯に收めたものは、東京帝國大學國文學研究室蔵の上下二卷二册、奈良繪入十三行の寫本で、體裁は普通の

御伽草紙風の金泥草花模様紺表紙に「かくれさと上」「かくれさと下」と記した赤色の題簽紙が中央に貼つてある(内題は無論無い)袋綴横本(縦五寸八分)である。

附記 同體裁の『住吉物語』三冊、『ぶんせう』三冊、『大しよくわん』三冊と一組になつてゐる箱入の冊子である。下巻の終一枚だけは『住吉物語』の文(裏は挿繪)が誤つて綴込まれてゐる。

平出氏の『近古小説解題』には掲げてないが、同書(三二〇頁)『鼠の草子』の條に

「余また別に鼠草紙といふ繪巻物を見たることあり、斷簡なり。中に京の大佛三十三間堂などの文句見えたれば、こは慶長頃のものならん」

と附記してゐるのは、本書の繪巻になつてゐる物ではなかつたらうか。(年代)の項参照。序に、平出氏が「繪巻物」と言ひ「鼠草紙」と呼ばれてゐたとしてをられるところから考へると、『考古畫譜』(卷九)の「鼠雙紙」増補の項に見える

「補」同異本

「補」古畫目錄云、鼠草紙異本

「補」古畫類聚目錄云、鼠草紙異本(和正考古畫譜、下、一五四頁)

といふのも、本書に關係ある物ではなかつたか。しばらく記して疑を存して置く。

早稻田大學附屬圖書館に「惠比須大黒合戦」(一冊)といふ物が在る。繪入(丹綠)十一行豎小形(縦四寸二分)の刊本で、「小寺姓、玉鬼文庫」の墨印があり、名古屋の人、小寺廣治(號連城、又玉鬼)氏の舊藏に係る。題簽は剝脱してゐるが、内題に「ゑびす大こくかつせん」とあり、内容のみならず文詞まで殆ど全く本書そのまゝであると言つてよい。たゞ前半の隠れ里の一條と、結尾の和睦の宴の相撲、随つて黄梁一炊の夢が省かれてあるだけである。即ち

本書の繪巻と
鼠の草紙

早大本「惠比
須大黒合戦」

「ゑびす大黒のなかあしきらんしやうをたづぬるに、津國にしのみやにすむねすみども、ゑびすどの、御まへ成もり物をぬすみ取。御まへにありしこまいぬ二ひきをみて大きにいかり
吠
ほへければ(下略)」

から始まり、

「ちからおよばすりやうほうかんにんしたまひけり」

で終つてゐる。所謂兩福神の合戦から布袋和尚の扱ひまでといふわけで、純粹な擬軍記物としての主題だけ——と言つたよりは其の部分だけがと言つた方がよい位である——が本書から拔出されて、改題せられたものである。大黒が鼠軍を召集する條の文も

「みやこの内のねすみ共をあつめ給ふに、其かすすくなし。さらばかくれさとにつかひをたてよと仰けり。このゆへにはや打來りてかくと申ける」

と本書と全く同じであり、而も前に、隠れ里について何の記載も無く、却つて鼠共の評定の席に蝙蝠の四郎が飛んで來る挿繪の説明に「むつみのかくれさと」「かうもりの四郎とひ」「むつみ共なげき」とある(無論それは隠れ里での事では無いのを誤り註したのである)に看ても、此の刊本が本書から出たものであることは言ふまでもなく、此の刊本の底本も本書に先だつものでないことが斷ぜられる。

【参 考】 櫻のや、井上淑蔭(井上文雄の門、武州入間郡石井の里長)の作で同名の書(師の文雄及び藤原政之の序、本間游清の跋、清水光房・小山田與清等七人の詠歌を添へてある。文政十年五月作)があるが、舌切雀

かくれ里
一名舌切雀

かくれさと

りんき講と
かくれ里物語

の童話を擬古文に綴つたもので本書とは全く別の物である。明治二十八年十一月に、鈴木弘恭校閲、岡野竹園標註の『編かくれ里一名舌切雀』といふ表題で、東京の松柏堂から刊行された繪入本を編者は藏してゐる。

又、やはり同名の書(二卷、石橋真國編)、〔圖書刊行會本、近世文藝〕があるが、江戸の各岡場所の事を考證したもので、本書とは関係ない。『八聲雜隱れ里』と題した元文五年版の『吉原細見』を覽たこともある。

『群書一覽』の著者尾崎雅嘉の隨筆『蕪月庵圖書漫抄』卷三、「〇りんき講」の條に

〔上略〕予が若年の頃ふるき草紙に、りんき講といふ本ありし。花田市六といふものを、妻のれたみて禪にてしる繪などありし。これはりんき講の處え出家の來りて、りんきのあしきを引事をいひて異見するに、人の妻の僧と問答應對をかきたるもの也。りんき講といふ名は改て、かくれ里物語と號せし本なりし。またふるき人形の狂言にも、りんき講といふあり。〔日本隨筆大成卷二、四三八頁〕

とあるにみれば、さういふ物もあつたと見える。

因に、『新日本小説年表』五二頁(出版年代未詳部)に「〇りんき講 三」と見えてゐる。寛文版『増補書籍目録』舞草紙部、一六二丁ノオ『廣益書籍目録』五之卷、『物語書』部、三四丁ノオ)にも出てゐる。

かくれ里の記

末文に

『かくれ里の鼠のはつかにもかくるよしなし』ことを、そこはかとなくいひいづべき事は。大あなむちのあなかしこと、筆をもとめなまし。

天明とあらたまりぬるはじめのとし彌生の比小車のうし、こみの里に筆をとるものはたぞ

四方 赤頁

(新百家説林、蜀山人全集二、三頁)

とあり、且遊客の一行を七福神中の大黒・夷・壽星に準へてゐるなど、或は本書を思ひ寄せてのことかも知れない。

梗

めでたい話は昔から随分ある。しかし不老不死の薬に上越す奇特はあるまい。抑此の靈薬は仙人の住む蓬萊山又の名藐姑射の山に在ると聞く。昔帝堯此の山で四仙に遇ひ、かの靈薬を授けられたが、毒盡くることなければ、人慾却つて世を亂すを懼れ慮つて、之を函に藏めて驪山に埋めた。長生不死の靈草黃精は、その函の上に生ひ出たのであるといふ。

蓬萊とは南、溟海の彼方、昔伏羲氏の時に、大きき各一萬里もある六つの大龜が集まつて甲の上に載せてさし上げた仙山で、言語に絶した理想の樂園、かの岩戸神話の長鳴鳥の産地でもあり、垂仁天皇の朝に田道間守が勅を受けて、とまじくのかくのこのみ」を搜めた所謂常世の國のことである。天界の神仙も降り遊び、十方の仙人來り集まる。柏梁臺あり、不老門あり、長生殿の内にはかの靈薬が瑠璃の壺に納められ、八人の天仙日夜監視し、十六人の鬼神は嚴重に門を固めてゐる。これほど大切にされてゐる位であるから、効験の著しいことは、之を嘗めた唐土の仙女麻姑が三百餘歳を経てなほ年少の顔を保ちつゞけてゐたといふのにも知られる。(上卷)

かやうにめでたい薬であるから、萬人の希ひ求める處であるが、始皇帝の威もなほよくせず、勅を蒙つて自ら千人の童男女を率ゐて大海に泛んだ道士徐福は、蛟龍と闘ひ風波と争ひ、終に行方を失つてしまつた。漢武は西王母仙を召して七葉の桃とかの不死の薬を獲、玄宗は方士を遣はし、蓬萊の大眞宮に到らせて、天仙楊貴妃と在りし日の契を記念することが出来た。かの貴妃が昔舞つた霓裳羽衣の神曲こそ天上の舞樂だつたのであつた。

こゝに紀伊國名草郡にあづみ(安曇)の安彦といふ漁師があつた。長閑な春日を沖に漕ぎ出て釣を垂れてゐるうち、俄に風波の難に襲はれ、南へ〜と押し流され、終に見知らぬ島山に漂着した。意外にもこれが音にのみ聞く蓬萊の山であつたのである。そして此の仙境へ到り得たのは、寛厚・寛慈・正直・慈悲、彼が本性の天理に通うてゐるが故である。清

梗

に遊んでゐた七人の仙女達は斯く教へ告げて、扱安彦に先づ溟海の水を浴びて膚を淨め若やがせ、一粒の薬を服させて自然智を悟らせ、それから案内して仙宮の内を隈なく觀せた。慈悲・正直で孝心篤い美德の褒賞として、不老門の内長生殿にして、一仙士から瑠璃の壺中に納めてある不老不死の薬を七寶の器に移し容れて授けられた後、暇を乞うて再び溟海に泛び、故郷日本へ安彦が歸り著いた時には、已に三百餘歳を経てゐて漸く七世の孫に尋ね逢うた。王質の昔語り、浦島子が例を今見る心地である。

帝の召に寄つて急ぎ参内し、仙山の有様を具に奏聞し、かの靈薬を獻つた。観感淺からず、安彦は三位の宰相に任じ、不死の靈薬を嘗め給うた帝は、忽ち盛りに若やいて長生の壽を得給うたのであつた。其の後、安彦は七世の孫と共に通力自在の仙人となり、今は此の人界も我が住む所でないとして、空を翔り雲に乗つて、天上の仙宮に昇り去つたといふ。

(下卷)

梗

【性質】 繪詞風の祝儀物といふべきものである。此の種の物に卷子本の「若みどり」といふ物もある。(續輯 收載豫定書目の一)

蓬萊はめでたい仙界である爲に、祝賀の表徴として、高砂の尉姥を配した島臺が工夫されたり、蓬洞の名は仙洞御所をことほぐ異名に轉用せられたりしてゐる。蓬萊を題材としたり、之に准らへたりした祝言文學も少くない。謠曲「鶴龜」や今様の「蓬萊山」をはじめ、特に歌謠に多く作られてゐる。大抵は類型的なものであるが。本書は蓬萊山に在るといふ不老不死の靈薬に關する話が中心で、其の仙山の由來、勝景、其の地を覺めた和漢の人々の諸傳説、特に最後に紀州の一漁夫の浦島式神仙譚が物語られてゐて、それは一面漂流譚的説話でもある仙郷淹留説話である。

【素材】 一 仙郷淹留説話 或偶然の機會から、又は尊信してゐる佛神仙士等の導によつて、人外仙境に

武陵桃源

到り遊ぶといふ神秘的な物語は、世界的なものであるが、我が國の此の系統に屬する諸説話に直接緊密な交渉を有するのは、やはり支那神仙譚である。

劉阮天台

壺中の天地

王質の朽柯

菊慈童

徐福

就中最も知られたものに武陵桃源『桃花源記』がある。これは可なり人間的な、そして稍實在味を帯びた傳説であるが、(我が肥後の五箇庄めいた意味が含まれてゐる。)其の類話でそして著しく Fairy Land の色彩を加へてゐるのは、天台山に迷ひ入つた劉晨・阮肇の二人が歎待せられたといふ女仙郷『續齊諧記』である。更に愉快なマジックがあつて童話的なのは、費長房が赴いた壺中の天地の奇譚『後漢書』七二下、方術傳)であらう。いづれも『蒙求』にも載つてゐる(卷中、武陵桃源・劉阮天台、壺公論天參照) 我が國人にも親しみ深い話柄となつてゐる。(後の『剪燈新話』(卷二)の「天台訪隱錄」などは、桃源傳説及び「劉阮天台」傳説の流れを承けた其の變形と看られ得るし、長房には又別型の仙界淹留説話もある『後漢書』及び『蒙求』卷下、長房縮地參照)。それと並んで有名なものに、Kip Van Winkle 式の晉の樵夫王質の傳説『列仙全傳』(卷四)がある。これも早く詩歌の題材として迎へられ、『明詠集』(卷下、雜、仙家附道士、隱倫)や『新撰明詠集』(卷下、雜、仙家附道士)或は勅撰集の「秋」雜等の部にいろ／＼の詠を留めてゐる。(近松の「國性爺合戦」の第四段「九仙山」の構想も此の傳説に示唆を受けてゐる)今一つ同様に名高いのは彭祖『莊子』逍遙遊「列仙全傳」(卷二)に附會せられた慈童及び之に關聯した鄒縣の菊水傳説『抱朴子』内篇、僊藥卷一・「太平記」(卷一三)「龍馬進奏事」、謡曲「枕慈童」(名菊慈童)である。そしてこれは菊花の酒に因んだ重陽の宴の起源傳説をなして風俗史的意義を加へるにまで至つてゐる。

かやうに大陸の深山に迷ひ入り或は有意的に覺め到的説話型を、地理的に海上に移した形のものもある。これが有意的な場合は、例へば徐福『史記』(卷六、秦始皇本紀第六・同卷二八、封禪書第六・後漢書)八五、東夷列傳第七五「列

臨叩の方士

謝自然

アイヌ浦島

王母と方朔

日本の仙郷説話

仙全傳』(卷二等)であり、貴妃に會つた方士『白氏文集』(二二、長恨歌傳)である。但し前者は目的の達成を見ない形(『史記』「太平記」(卷二六)、歸還報告せられないが到達した形(本朝渡來説。後に説く)、別様式を取つて仙化した形『列仙全傳』)など種々に轉化展開してをり、後者は、其の渡行の目的が仙樂獲得でない點に異色がある。又偶然の場合に所謂漂流譚の一種である。徐福の傳説も此の側の意味をも併せ有してゐるのである。『列仙全傳』(卷九「補遺」)に載する蜀の華陽の女仙謝自然も、有意的に蓬萊を覺めて海に泛んだ點では前者の型で、異島に漂著した結果に於ては後者の形を成してゐる。さうして彼女は目的を果さずして、而も後、師から秘法を授けられた事によつて終に入仙の冀望を完了し得た。アイヌの浦島式傳説(世界童話大系第一六卷、『日本童話集』アイヌの部(二五)「アイヌ浦島」)などは此の漂流説話の類に屬するものである。

其他仙界が天上に位置する場合もあれば、地下に所在する場合もある。又單に天界若しくは人外仙境との接觸といふだけならば、天仙降下の型、昇天登仙の型、求道仙化の型、いろ／＼數へ擧げる事が出来る。其の中で特に日本説話に少からぬ影響を與へ、又本書との關係も直接であるのは、西王母並びに東方朔の傳説(『漢武内傳』「列仙全傳」(卷一・二參照)である。ことを注意して置かねばならぬ。そして又『史記』(卷一二、孝武本紀第一二)などに載する武帝の一生の事績の大半は亦實に蓬萊搜索にあつたのであつた。

日本神話でも人界と仙界又は別世界との交通往來の説話はいろ／＼あり、又歴史時代になつてからも断えず種の様式で此の種傳説は發生流布して來てゐる。(古説話の新時代裝を施された變形も無論在る。)特に浦島傳説と並んで、粟津冠者傳説『古事談』第五、神社佛寺)を繼承する有名な依藤太の三上山傳説(『太平記』(卷一五)「三井寺合戦」當寺檀越事、依藤太事)、『依藤太物語』謡曲「百足」引鐘)によつて代表せられる龍宮行の説話型があり、他面仙境淹留

説話と巡島説話との要素を含み、且宗教的意義を加へられた地獄極樂廻の説話型もある。(六〇〇頁「天狗の内裏」考説参照) 是等の中には、神婚神話や武勇傳説に連なるものもある。其の中で本書と直接交渉を有するのは浦島傳説であり、それは彦火火出見尊の海宮行神話(『記』上巻「紀神代卷下」)をはじめ、本據の上に内國的關係を想測し得ること勿論であるが、なほ其の發生並びに進展に當つて、支那説話の影響の大きい事を打消すことは許されない。本書も亦縦には直接間接に内國の同系の先進諸傳説の流れを承けてゐる一方、横に著しい支那神仙譚の影響を蒙つてゐることを否定出来ない。

序に他の同系の説話に就いて言つても、『伽婢子』の泉州の藥種商長次が平家の亡命者三位中將維盛と語る十津川の仙境(卷二「堺の長次十津川の仙境に入事」)、太田道灌の江戸築城に掘抜井戸の雁金堀が觀た下界の仙境(卷九「下界の仙境の事」)は、それら「剪燈新話」(卷二「天台訪歴錄」卷一「三山福地志」)の翻案であらうから不思議はないが、同書の卷六「伊勢兵庫至仙境」の北條氏康の臣伊勢兵庫が海上の仙島に到る話は、恰當の本據が指示され得ない。強ひて「新話」中に求むれば先づ卷四「鑑湖夜泛記」などでもあらうが適切でない。田道間守の傳説や補陀落山漂著傳説やを取合せたもののやうに思はれる。古いところでは「竹取物語」の車持皇子が説話中の靈島でも、亦近代になつてからの、例へば猪名部の墨繩が迷ひ入つた公輪魯仙の仕へ奉る立々皇帝太上老君の仙宮(『飛騨匠物語』卷一、蓬萊の山)でも、楠家の烈女姑摩姫が導かれた无上立通仙觀(『關西俠客傳』第三集卷一「姑摩姫苦學讀」劍書、無上立通化現仙觀)でも、いづれは支那式蓬萊乃至桃源境でないものはない。

更に此の支那神仙譚に連なつて、人外境へ現實世界から逸脱するといふ心持と説話型の流移とは、かの海尊仙人をして——殘夢傳説にも結びつきつ、——蝦夷渡の先導者たらしめた義經高館生脫説の一樣式(『源義經將義經』

『本朝神社考』卷六、都良香の條「義經知緒記」下巻「義經勳功記」附錄、夢伯問答「孝經樓漫筆」卷三等参照)を生むにまで至つた事を注意して置きたい。

二 蓬萊仙境 さてその仙界理想郷の雄は何と言つても蓬萊であらう。如何なる人外の非實在境でも、美化理想化せられてゐるところ、其の概念の内容に於て、想像的な描寫に於て、多少でも蓬萊の空想的傳説的要素の混入せぬ——少くとも共通せぬ——ものは無い程に普遍的で、仙界の汎稱にさへなつてゐる。

山海經 元來蓬萊は、方丈・瀛洲と共に渤海の中「在虛無縹緲間」と信ぜられてゐる三神山の一である。『山海經』(海内北經第一二)に「蓬萊山在海中」と記し、『史記』(卷二八、封禪書第六)には

「(前略)蓬萊・方丈・瀛洲、此三神山者、其傳在渤海中。去人不遠。患且至、則船風引而去。蓋嘗有至者。諸僊人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白、而黃金銀爲宮闕。未至望之如雲。及到三神山反居水下。臨之風輒引去。終莫能至。」云

蓬萊 と説述してゐる、此の三島は又鳥形の壺器に似てゐるところから三壺(蓬壺・方壺・瀛壺)とも呼ばれてゐる。(『拾遺記』卷二)

列子湯問篇 而も三島は太古に於ては五山並居してゐた一部であるとなす奇抜な傳説を詳しく載せてゐるのは、『山海經』と共に此の蓬萊傳説の源泉の一と目せられてゐる『列子』(湯問第五)である。即ち其の湯問に應じて夏革の言ふ所に随へば、

「渤海之東、不知幾億萬里、有大壑焉、實惟無底之谷、其下無底、名曰歸墟。八紘九野之水、天漢之流、莫不注之。而無增無減焉。其中有五山焉。一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰蓬

葉。其山高下周旋三萬里、其頂平處九千里、山之中間相去七萬里、以爲三鄰居焉。其上臺觀皆金玉、其上禽獸皆純縞。珠玕之樹皆叢生、華實皆有滋味、食之皆不老不死。所居之人皆仙聖之種、一日一夕飛相往來者不可數焉。

●帝は天帝
●禺彊は人面鳥身の北海神
●龍伯之國は大人國

而五山之根無所連著、常隨潮波上下往還、不得暫時焉。仙聖毒之、訴之於帝。帝恐流於西極、失羣聖之居、乃命禺彊使巨鼈十五舉首而載之。迭爲三番、六萬歲一交焉。五山始峙而不動。而龍伯之國有大人、舉足不盈數步、而暨五山之所、一釣而連六鼈、合負而趣歸其國、灼其骨以數焉。於是岱輿、員嶠、二山、流於北極、沈於大海。仙聖之播遷者巨億計。下也。

蓬萊の名義と其の解釋

蓬萊仙境の來由は右のやうであるが、其の名義についても、或は「浮來」「邠來」「公來」「古浮來」などさまざまの字を宛てて釋かうとする説さへ生じた。多くは類音から來て、前述の古傳説に附會し來つた通俗語源説的の説明に過ぎない。日本化するに際しては、所謂「常世」思想、「常世國」の觀念と混錯して、却つて其の名によつて呼ばれるに至つた現象を「萬葉集」などに示し、一面渤海の東幾億萬里に在りと假定せられるが故に、此の神代ながらぬこととなるのである。

日本と蓬萊

の豐葦原瑞穗國を、老いず死なすの「よもぎが島」に見立てられるにさへ及んでゐる。特に秦皇の徐福派遣は一面此の想像に實證を與へようとしつ、一段蓬萊と日本との結合を緊密にした。加之

日本各地の蓬萊

終に日本の各地に實在せしめられるといふ結果を見る事になつたのは、不自然ではないが入念の至である。「およそ日本にて蓬萊と稱する所多し。或曰熊野日本傳或曰富士源經六帖或曰熱田熱田傳或曰加賀白山日本書紀或曰攝津吉六家抄或曰伊豫三島國記の說むかし蓬萊方丈圖或曰安藝嚴島源平盛衰記或曰在丹後國丹後傳と「廣益俗説辨」(正編卷三、神祇、熱田大明神楊貴妃となりて唐朝を亂し給ふ説附蓬萊の説)に記し、「訂一話一言」(卷八)原

富士と蓬萊

形勝から或は名義から又は傳説の結合からとそれごとく一様でないやうである。右の中では、熊野と富士とが最も有名で、特に三國無雙の蓬萊は、「天地之分時從、神左備而高貴寸」靈山として、都良香を俟たずして「神仙之所遊萃」なるを知るべく、不死の藥を焚かずとも、蓬萊山は此處東海の碧空に白扇を懸けてゐる。熱田蓬萊の由來傳説に至つては荒誕滑稽を極めて、井澤氏の所謂俗説の好例證といふべきであらう。なほ紀伊國の蓬萊の事は後に説きたい。

以上、蓬萊山の由來・名義・所在等に關して考察を費して來たが、此の仙山が地理的に外形上の移動展開を營みつ、ある間に、所謂蓬萊といふ仙郷に關する概念が、他の仙界觀念との交渉出入から、異常な成長を遂げて來たことは特に注意せられねばならぬものがある。勿論完全化を目ざして進展しつ、あるのであるが、同時に却つて本來の純粹の蓬萊觀念に比して、甚だしく雜駁なもの、茫漠たるものもなつてしまつたのも止むを得ない。本書の如きは正に其の偽りなき提證者であらう。

非實在的理想郷の實在を信じたい好奇的及び宗教的な願望と、それを展開發達させる藝術的な空想とは、自由で且無限である。汎神論的思想と氣分とからは無數の仙境の現出も亦妨げない。古傳説に於ては、蓬萊は其の聯立の關係を保つてゐる五山乃至三島の他者との間に、何等價値の高下も無く、其の説述も一括して行はれてゐる。其の他所謂十洲と言ひ(本輯一〇〇頁頭註参照)、特に「山海經」などには、實に無數の同格蓬萊がある。否蓬萊は其の中の單に一仙島たるに過ぎない。

蓬萊と相似仙境との混錯

しかもそれらの仙境は、空想裡の人外理想郷たる點に於て、そして又それらが各、理想化して空想せらるればせらる、程、相近接し重なり合つて來るのは寧ろ當然である。かくして蓬萊は前に述べたやうに傳説的に他の同格仙島から頭角を露はして來る一面に於て、先づ地上の相似仙境と混錯し、又天界と連接し、終には異邦の思想上・信仰上の理想國と合一するに至つたのである。例へば「藐姑射山」(「莊子」逍遙遊)、例へば「崑崙・縣圃」(「淮南子」墜形訓)或は黃帝の「五城十二樓」(「史記」卷二二孝武本紀第一二)或は大蜃の空中樓閣(本輯九五頁頭註参照)、又は月宮嫦娥の都、海底龍王の宮、長鳴鳥の遊び珍果の實る「常世の國」、さては西方彌陀の淨土(「佛說阿彌陀經」)若しくは南方補陀落世界(「舊華嚴經入法界品」)をはじめ各種の仙山靈境と殆ど分つ無きに至つてゐる。特に佛教思想、就中極樂國觀念との混濁は蓬萊をかなりに變化させてしまつた。「阿彌陀經」の所説と本書の描寫とを併讀しただけで足りる。勿論人外理想郷たるに於て變りはない。空想的な度に於ても減退してはゐない。唯寂光の彩雲に包まれて一段麗麗嚴淨さを加へてゐると共に、原始蓬萊の面影は漸く影を薄くしつ、あるのを觀るのである。好奇心の満足よりも信仰心の憧憬の對象に移り行きつ、あるのも言ふまでもない。文字に現されてゐるところに就いて言へば、謠曲「江島」でも宴曲「不老不死」でも、此の混融の過程をよく示してゐるものと言へる。なほそれは蓬萊

蓬萊と極樂

に限つての現象では無く、其の混融は時代文化の全般に互るものであり、又此の展開の道程は支那本土に於て既に發足せられつ、あることも無論の事である。日本神話の常世思想が又蓬萊と結合して來たのも、極めて自然である。即ち蓬萊の所在と假想せられた島嶼の位置が不明である爲に、蓬萊の觀念だけが諸方に遊離して、他の仙境へ進入すると同時に、又他の仙境の内容を形成してゐる各種の要素を吸引併合して、茲に飛仙戯れ、菩薩舞ひ、仙樂風飄法音微妙、七寶嚴飾瑤臺光耀、「長生殿裏春秋富、不老門前日月遲」(「萬歲千秋重なり」)つて、「松の枝には鶴巢くひ、巖がそばには龜遊ぶ」無上無比、最大級のめでたい所謂蓬萊山の完成を觀たのである。

本書の蓬萊仙境も、如上の進展しつ、ある各段階に於ける數種蓬萊、並びに殆ど完成の域に達しつ、ある蓬萊の無批判的な集合觀念の表出である。

不老長生藥

三 不老不死の仙藥 不老長生の妙藥として、傳へられ工夫せられたものは、彭祖の仙方(「列仙全傳」卷二)劉生の日精(「抱朴子」內篇、金丹卷四)から現代の何々素・若返り藥の類に至り、東西古今殆ど數へ舉げるの類に堪へないであらう。特に此の願望の熾盛な爲か支那に於て此の種の藥物が自然にも人爲的にも多く傳へられて來てゐるやうに思はれる。南陽鄧縣の菊水は、居民下流を汲んで百四五十歳の齡を延べ、烏哀國の龍瓜蘆は「服二粒二千歲不餓」(「洞冥記」卷三)と珍重せられた。しかし、生存慾の本能に立脚する一面、宇宙天與の飲食悉くが此の目的に適ふ靈藥であるといふ意味を象徴して、之に好奇的な空想を加へ來つたといふ點に感興が在る他、此の仙丹・靈草の實體についての諸傳説の穿鑿は、本書の解明に於て持に必要問題ではない。

「當初徐福が稱たる蓬萊の神藥は、熊野に生る人參ならん歟、これ亦しるべからず」(「支同放言」卷二、植物部(第一九)人參和名考並詩歌)

不死の靈藥

と例の考證辭を發揮して得々然たる義笠翁の無邪氣さ加減を、愛敬過ぎた一例として附け加へて置くに止めよう。徐福と熊野との關係は後にも説かねばならぬところでもあるから。

不死の藥に至つては、漠然不老と聯關して考へられてゐると言ふだけで十分であらう。若し強ひて其の本體を質する者があるならば、假想せられた永生の冀求の完全な現世的充足の對象に向つての人類の普遍的（或意味では通俗的で、迷信的で、又童話的）な憧憬に形體を賦與したものと答へねばなるまい。而も是が傳承に關しては、安彦について物語る本書の奇聞よりも、月界の仙宮に近い「駿河國にあはなる山の頂」の邊、「雲の中へ立ち昇る永遠の幻煙の方が未だしも有難いやうである。

四 安彦漂流譚の本據 安（阿）疊の安彦が漂流譚は、何か地方的の口碑らしいものがあつたのか如何か聞く所が無いが、其の説話系統から言へば 一 に述べた支那及び日本の先進同型類種の諸説話の流れを汲むものであり、且本書の記述について觀る時、其の説話の形態と表現とに當然浦島傳説の外形的影響を想測し得べきは何人も疑はないところであらう。即ち海島漂流譚式仙界淹留説話で、神婚説話の形は取つてゐず、又動物報恩説話の要素も玉手箱モチイヴも含んでゐない代りに、桃源傳説や王質傳説に間接に連つてゐるものである。其の仙郷も全然日本のものではない。

此の説話が本書作者の創り出したところであるか、或は本據をなす傳説があつたのかは不明であるが、唯参考として一二の資料を附記して置きたい。

『和漢三才圖會』卷五六、山類、補陀山に

下河邊入道の補陀山行

「四條院之時、下河邊六郎行秀入道知定房自那智乘船。其樓以釘固閉、法華經讀誦赴于南海三十餘日而到補陀落山。」

其山危險岩谷幽邃。山頂有池、又有石之天宮、是觀世音遊行地也。智定止住五十餘日而復乘船歸朝、貞永二年五月從紀州絲我莊通書於北條泰時示其行狀。終不知其向後。

と見えてゐる。これは『吾妻鏡』(卷二九)の「貞永二年五月」の條

「○廿七日〔辛未〕武州參御所給。帶一封狀、被披覽御前。令申給曰、去三月七日、熊野那智浦、有渡子蒲陀落山之者。號智定房。下河邊六郎行秀法師也。故〔右〕大將家、下野國那須野御時之時、大鹿一頭掛下勢子之内。幕下撰殊射手、召出行秀、被仰可射之由。仍雖應嚴命、其箭不中鹿、走出勢子外。小山〔四郎〕左衛門尉朝政射取畢。仍於狩場遂出家、運電不知行方。近年在熊野山、日夜讀誦法華經之由、傳聞之處、結句及此企。可憐事也云々。而今所令披覽給之狀云智定詔于同法。可送武州之旨申置。自紀伊國糸我庄執送之。今日到來。自在俗之時出家遁世以後事、悉載之。周防前司親實讀申之。折簡候之男女聞之、降感涙。武州昔爲弓馬友之由、被語申云々。彼乘船、入屋形之後、自外以釘皆打付、無一扉。不能觀日月光。只可懸燈。三十箇日之程食物井油等僅用意云々」とあるのを指すのである。下河邊入道がノアの船めいたものに乗つての南海補陀洛山渡航譚である。安彦物語に直接の關係は無からうが、同じ紀州の古傳説として、同じ仙島渡訪説話として一顧の値だけはあらう。

なほ前掲『三才圖會』の文の次に、編者良安が附記した文中に、補陀山の所在の推測と共に又同系の一箇の漂流譚が含まれてゐて、これは餘程實事談らしさを以て紹介されてゐる。

牛島菜の補陀山行

「按補陀山浙江寧波府之海中島也。近于明洲津矣。元祿六年阿州鹽飽牛島源左衛門船與水主二十人、颶風至補陀山。時二月二日、偶有日本人、來問所以其來。蓋去十一月自伊豆北風起、南洋又西風。許諾倡行養口於寺院。以告京師。自北至北京行。七月廿一日令到來乘船歸長崎。蓋補陀山悉寺院耳。」

これは徳川期の話で、且紀州人ではないけれども、同じ南海道の人である。そして此の類の話は可なり多いので

鬼の島と蓬萊
(漂流譚の童話)

あるが、今直接の必要が無いから一々挙げない。

事實としての外國漂流異聞はいつの世何れの國にも存し、其の生還者の齎した土産話は好奇の耳を以て迎へられ、一段の誇張を加へて擴がるのが常である。随つて其の漂流の異國怪島が屢、一方鬼が島式蠻土の面影が傳へられるに並んで、他方人外仙境的理想郷の實在を保證せしめられようとするのが一般である。其の童話的な空想の活現である點は同じであり、『宇津保』の『俊蔭卷』や、『竹取』の車持皇子の妄誕旅行談などは其の物語化された著しいものである。又此の兩者の混錯を看るに至るのも寧ろ自然であらう。(狂言の『寶の槌』や『節分』などでは、明らかに『蓬萊の島なる』鬼の持った隠蓑笠・小槌の寶物と記し、同じく『寶の笠』や『首引』の『鬼が島』との間に概念上何等の差異點が見出され得ない。一寸法師や桃太郎の渡つた鬼が島もそれであるらしい。)爲朝・朝夷・牛若丸、或は和莊兵衛・夢想兵衛・志道軒、史的・小説的種々の人物の上に傳へられ記される數々のガリヴァー式巡島(廻國)説話も、此の事實としての漂流談或は探險譚と童話的的空想(及び或ものは寓話的意圖も加へられて)との結合から胎生して來る一つの説話型で、心理的には最も自然な發生の原理と展開の必然さとを留意せられてゐるものと言ひ得る。『山海經』に展開せられてゐる幻怪神奇の世界は、かゝる巡島説話の無拘束な活躍壇場として誂へ向のものたるを失はない。上述の諸日本説話に範を垂れたのは當然である。

巡島説話

山海經と巡島説話

五 紀伊蓬萊附徐福 安彦が赴いた仙境は地理的には勿論紀州と關係なく、寧ろ想像上の旅程であり方位であらうが、其の郷里たる紀伊國と蓬萊との別様の意味に於ての特種な關係は、考察を逸することは許されない。そしてそれは亦本書の他の部分の素材とも決して没交渉のものではないからである。

衣奈浦蓬萊

先づ其の一は紀伊國の内に現實に存在する蓬萊仙境である。『紀伊國名所圖會』(後編卷四)「海部郡、衣奈莊」の

條に

「蓬萊 同村の海上にある小島なり。巖の形、宛龜背に山を貫へるがごとし。近來首の形をなせる巖缺け損じて、いさゝか觀美を損ずといへども、猶奇狀實するに堪へたり」(大日本名所圖會第二輯第一〇編)

と見え、上掲の「衣奈浦蓬萊の圖」を挿入してある。如何にも本輯本文の寫眞版挿圖(九四頁九五頁間参照)に對比して其の龜負蓬萊の狀を聯想させるものがある。

而も紀州に於ける仙山の傳説的存在は一にして足りない。右は其の形狀によつて獲た名稱であらうが、茲に又もつと來歴の複雑な蓬萊山が在る。そしてそれがかの始皇帝の勅旨を奉じて尋ね到つた秦の徐福の目ざした靈地で、率る來つた童男女と共に其處に世を終つたといふ珍しい傳へを遺してゐるに於て、かの支那説話の終局に一解決を與へる點でも見道されない。それは即ち前にも觸れて置いたが、三社權現に知られた熊野である。橘南翁は



紀伊國名所圖會(後編卷四)

「徐福といふ人(中略)日本に渡り、熊野の浦にあがりて耕作をなし、童男童女を養育して、子孫まで熊野の長となりて、安福に繁昌せりといひ傳ふ。故に熊野の新宮本宮を今にいたり蓬萊山といふ。(中略)其徐福の塚は新宮の濱手の畑中にあり(下略)」「西遊記」環編卷三「徐福」

と記し、徐福上陸の地、蓬萊山と名づける楠と小社の事、自作の徐福を詠じた五言絶句の事など書き添へてゐる。「南紀名勝略記」「順禮細見」には徐福祠が昔在つた由を、そして後者にはそれを世俗蓬萊山といつた由を載せてあるとして「大日本地名辭書」(紀伊、東牟婁郡)に引き、上の徐福塚を指すやうに推測してある。楠の傍に小社の在つたのが洪水で共に流失した由を南谿が記してゐる波多須村の矢賀丸山との混同がありはせぬかとも考へられる。徐福の來著した蓬萊は富士山で、福の魂化して鶴となつたなどいふ傳説(「増訂一話一言」卷一三「原卷二〇」)「鶴郡鶴羽記」後段四七七頁参照)が存する一方、上記此の地の口碑は更に進展して

「又一説には秦徐福^{一作徐福}蓬萊にゆき藥をもとむとて此所にいたり死しけるを、熊野權現にまつれりといふ。」「廣益俗説辨」正編卷三、神祇、「熊野神天竺」より飛來り給ふ説」

までに至つて、摩羯陀國の善財王と本地を争つてゐる。(本輯二七頁「朝顔の露の宮」照合)

要するに徐福の搜めた蓬萊島は、間守が到つた常世の國とは反對の方向に位置する此の東方君子國の汎稱であり、随つて其の國土の各地に小蓬萊の地形的、傳説的簇生を看する一實例を、此の州郡にも發見し得るといふ歸結に到着するのである。(四六九頁参照)

徐福傳説の遺展

序に、徐福が不死の藥を搜めて海に泛ぶ事は、前に引いた漢土の諸書に載せる所であるが、本書の記述は、「太平記」(卷二六)「妙吉侍者事附秦始皇帝事」の文に據つたことは兩書を併せ讀めば瞭然である。なほ「藥師通衣物語」

にも此の傳説を載せ、使臣が蓬萊に到り得ぬのは龍神の所爲と怒つて、百千の毒矢を以て龍神の化した鮫大魚を射殺した崇で、其の夜始皇帝龍神と戦ふと夢みて崩じたとしてある。そしてこれは既に古く「今昔物語」(卷一〇)、「秦始皇在咸陽宮政」(世語第一)に始皇の愛馬左驂馬の事にも關聯した説話として載せられてをり、(全然同じ形ではないが)その本據は「史記」(卷六、秦始皇本紀)の所傳に在ること勿論である。

其の「史記」には「方士齊人徐市」と見えてゐるので、それと徐福とは別人であるなどの論も生じたが(「和漢雜考或問」)、蓬萊に到り得ずして、其の責を鮫魚に轉嫁した狡獪方士(「史記」)が、終に海東の夷洲及び澶洲に赴いた形に進展した支那傳説(「後漢書」東夷列傳)に、もつと確定的に實證を與へようとしてゐる形として、孝靈天皇の七十二年八月、日本に來朝したといふ傳説は現れたのである。「天書」(卷三)「海經」(卷六、三)「徐福日本」

(「倭漢合運指掌圖」(亨)には、孝靈天皇六年丙子に「異國徐來富士山入」と出してゐる。富士を蓬萊として福が來り止まり、其の子孫秦氏と稱すとは「義楚六帖」の所傳である。)

そして、いつのまにか其の漂著地の一として擇まれた因縁深い國に生れた安彦が、此の本暗き燈臺下に儼存する仙境を知らずして却つて遠く海外に到つてゐる對照が、結果から觀た偶然の皮肉ではあるけれども或意味で興味のないではないといふ事を注意して此の項の考察を了へることにする。

【構想・表現】 本書の内容は、蓬萊並びに不死の靈藥に關する諸傳説の説明的記載と、安曇安彦の漂流奇話との二部から構成せられてゐると看することが出来る。尤も上巻は蓬萊仙境の概説で、下巻は其の仙山の神藥を求め、其の靈地に到らうと試みられた成功失敗種々の和漢古今の物語が述べられてゐると言つてもよい。聖代無窮・國土安穩は國民おしなべての敬虔な願であり信念であると共に、長生不死・富貴萬福は人類通有の

無限の欲求である。そして蓬萊仙境の異聞と不死の靈丹の獲得とは、天界・淨土の幻影と聯關して、此の冀望を満してくる空想の自由な飛翔でなければならぬ。たゞ本書は、他の一般の祝言文學の多くが形に偏し詞に律せられて人性本然の力強い此のたましひの表現を無感激のものにしてしまつてゐる傾向に慣らされて、取扱ひ方によつては面白い主題たるを失はないのに、簡單なそして平凡な仙界漂著譚に過ぎない程度に止まつてゐるのが遺憾である。神祕感も童話的な興味も餘り享け得られない。精神の蟬脱した浦島傳説である。斧の柯の朽ちたといふ童話的な心持の表現に似通うたものすら感じ得られない。學ばれた古傳説にすら遙かに遠いものである。唯、一粒の仙丹を含ましめられて、「安彦愚なる迷の胸忽ちに霧霽れて、さやかなる月に對ふが如くにて、自然智をぞ悟りける。」といふ嫌味のない擬古文調の氣分の動いてゐる邊りに、「自然智」といふ語形と語感とに一種の新し

浦島と安彦

みのある時代語が、しつくりと調和して生きてゐるのを見出して、一寸軽らかな氣持になる。
「春日之、霞時爾、墨吉之、岸爾出居而、釣船之、得乎良布見者」
忽ち眼前に展開して來る水江の釣人が古へ、それが姿を改めて茲に語り出された新浦島の安彦物語、彼が禁を破つて千悔及ばず

「若有之、皮毛織奴、黒有之、髮毛白斑奴」
と悲しい制裁に動揺するのを、此は天池に浴を取らせて

「かじけ黒みし膚は忽ちに色白くこまやかに若やき」
そして終に永生の若さを保たせたのは、めでたくの物語として當然である。若し原傳説が存したのなら、やはり此の心持から生れた意味が大きいことを閉却することが出來ないであらう。

但し、その新浦島の安彦が圖らず流れ寄つた仙境は、龜媛ならぬ仙女はるても、乙姫の住むてふ龍の都ではなくて、臨叩の道士が大唐皇帝の爲に覺めた三神山の一に充當するのであるが、其の仙島が若し鱗甲の上に坐してゐるとすれば、龜に縁因のない事もない。現に『浦島傳』の「とよの國」が既に「蓬萊山」そのもので、「靈龜」の化した「美女」は、「妾是蓬萊山之女也」と自ら名告つてゐる程である。安彦を導く女仙は、此の種仙傳説には普通の事ではあるけれども、『搜神後記』(卷一)の哀相・根領の奇談(馬琴はこれを浦島傳説の本據と推定して、『燕石雜志』(卷四、一〇)「浦島之子」の條に引いてゐる)及び其の類話(若しくは異傳か)ともいふべき「劉阮天台」の仙鄉譚(前出)の面影も間接には偲び得るやうな氣がするし、或はそれよりも『竹取物語』の「蓬萊の玉の枝」の條の描寫をも想はせる節がないでもない。もとより渤海の蓬壺は「其中神約多三仙子」い答ではある。

羽化登仙

終の羽化登仙は、此の種の仙人傳説の定型で珍しくない。特に支那傳説では平凡事で、一々例證を擧げるまでもない。『列仙全傳』のどの一卷を開いただけでも十分である。前に記した女仙謝自然なども「貞元十年白日昇天」したのである。日本神仙譚も甚だしく支那傳説の影響を受けて、殆ど異なるところはないものが多く、天仙或は地仙となつて稱暉するのが常である。前に引いた『萬葉集』(卷九)の「詠水江浦島子」一首「短歌」では、「後遂壽死」浦島子をも、『續浦島子傳記』では「形容童子の如き仙人にしてしまつてゐる。(御伽草紙では龜と夫婦の明神と現れた。)後代では馬琴など自作の主人公を仙人化することによつて局を結ばせるのが好きで、史上の國民英雄鎮西八郎も馬上昇天すれば、南總の八靈玉も自ら定めた六十の停年制に隨つて身を退いた後、地仙となつて終を知らぬ御伽らしい大團圓である。

帝に藥を獻じて不老の壽を捧げ奉つたのは、王母獻桃の支那古傳説『唐物語』第一六にも物語られてゐるを題材と

した脇能『西王母』『東方朔』等と類型をなしてゐるが、必竟『竹取物語』の末段を明るくしたのである。そして書を焚き儒を坑にした他の帝に皮肉な笑を投げたのである。

前半に長々と書き並べられた先進諸傳説は、唯羅列的記述以上に出てゐず、何となく煩瑣な感じがする。後段の説話を導き出す順序として書かれてゐるやうではあるが、もう少し後の物語に集中されて述べられて行くといつた意識がはつきりしてゐてほしかつたと思ふ。或所は孤立的に各記述が集められてゐるといふだけのやうなところもあり、後の物語も前の諸傳説と同じ蓬萊物語の一として最後に語られてゐるといふだけの形にも見える。結局作者は、安彦の神仙譚を書くつもりでゐながら、蓬萊仙境の傳説的記述も書かねばならぬやうに感じ書きたいと思ひつゝ、此の二つの氣持が、一つの纏つた主題を中心としてしつくり融け合はぬうちに表現せられてしまつたのであらう。そして結局やはり所謂蓬萊物語なのである。それが又其の時代らしい氣分ではある。さうして前に言及したやうに、其の安彦が——同時に作者が——觀た蓬萊も、授かつた不死の仙丹も、支那直輸入其の儘であること、なほ全作品の味が純日本味でないと同じである。

【題 號】 内容に相應する意味のものであること言ふまでもない。

舞曲蓬萊山

因に、幸若舞曲三十六番中の一で、所謂御伽草紙二十三篇中にも收められてある『濱出』の一名を『蓬萊山』と呼ばれてゐるが、本書とは關係無い。

【年代】 不明である。『太平記』以後の作であることは確であるが、徳川期の所謂擬古文めいたところもあり、或は甚だ古いものでないかも知れぬ。しかしすつと降つた時代のものであるまい。若し寛文頃に刊本が在つたとすれば勿論、無かつたとしても大略徳川初世頃のものではなからうかと考へられる。

京大文學部藏
本
(本輯所收)

【原本並所在】 京都帝國大學文學部藏寫本、上下二卷二冊、奈良繪入、十行本で、金砂千雲形金泥草花模様紺表紙の粘葉綴本(綴六寸)である。題簽には「ほうらい物語 上」「ほうらい物語 下」とあり、内題、奥書無し。

他に傳本が在ることを未だ聞かない。唯、少年の頃家藏の舊い繪卷を觀た記憶が残つてゐる。詞書の内容に就いては全く想起することが出来ないが、安彦(?)が蓬萊島に漂著して仙女に遇うてゐる畫面だけは、はつきり印象せられてゐる。

刊本の存否は確證が無い。諸書籍目録にも餘り見受けられない。『小説年表』にも載つてゐない。唯、寛文版(西村市良右衛門刊)の『増補書籍目録』(舞草紙部、一六二丁ノオ)に「二 ほうらい」と出てゐるのが、本書の刊本ではないかと想像せられる。以後の元祿・正徳の『廣益』『増益』等の書籍目録には出てゐないのから推すと、或はもう其の頃既に古刊本も稀少になつてゐたのかもしれない。

概

越後國長岡上田の莊、ましまのふといふ所に權頭むれただとして天下に雙ない長者があつた。六十六箇國に建て置く藏の數は法華經の文字の數ほどあり、五人の子の父、多くの家來の主として何不足ない身の上であつたが、六十一歳の正月上旬、或夜今日から七日目の夜半にあの世へ迎へ取られる用意認めおけと天人の告ぐると夢みて打驚き、今更に今生の樂程なく盡きんこと心細く、さりながら極樂の七日に當るてふ餘生の七年を後生のために捧げようと、金色の御堂を造つて光堂と名づけ、供養には、弟のまのの三郎が勤にまかせ、吹き出す息に三世の諸佛現し給ふと沙汰する聖徳の誓高き都の天台和尚を招ずることとなつた。

嫡子まのの太郎二百餘騎にて上落しての懇請を上人は快くうべなうて、先づ太郎に復命させ、みづから七十餘僧を伴ひ下り、途に出迎へた權頭の許に入つた。

七日の説法の御布施には、一日は嫡子太郎、二日は二郎、三日三郎、四日四郎、五日五郎の五子、六日は弟のまのの三郎、七日はむれただと一日代りに參つて數の財寶を寄進すれば、近國遠國より聽聞の貴賤引きもきらす。かうほう(康保)五年三月中旬の供養と聞えた。

結願の歡びに上人への御馳走とあつて、むれただの下知で先づ武士の遊が行はれた。千萬人が中から三百人、又其中から八十人、又其中から十人が擇び出された中で、此の美男揃の榮冠は權頭が乙子、まのの五郎むれみづに落ちた。みめ容貌、裝束馬鞍に至るまで都人も恥づかしいよそほひであつた。

此の度は女方として、六十人すぐつた美女揃、さまざまの女の遊・草子揃ども催される中に、何處から来たともなく立交つた十七八の姫君のあてやかさに、人々訝しみ問へば、めでたき説法の砌、美女揃に加はらうと天降つた者ぞと答へて、天より降り下つた舞臺に六十人の女房をも上らせて、三日が間妙なる歌舞に興を添へるのであつた。凡眼には見え

概

れど、大殿の館の邊、三世の諸佛降らせ給ふ旨をも天女は告げた。そして三日の未の刻に名殘を惜しみつつ、來世の導を契つて天へ歸り去つた。

御堂の供養はめでたく終り、上人も都へ歸り、權頭は歡喜し、人々は尊仰止まぬ中に、獨り空しく心を盡くし、一目見た天つ少女の面影を身にしめて幾春秋を聞え憶れつゞけたのは、其の日の美男まのの五郎むれみづであつた。

清水の觀音は終に此の切なな戀の訴へを捧げられた最初の御佛でなければならなかつた。(上巻)

一七日參籠の後、形の如くの御夢想があつた。しかし不幸にも五郎の願は報いられなかつた。汝が戀ふるおもかげの在り處、我は知らぬ也。越後國藤井の觀音こそ誓深き佛にたまします。其の御前にありと聞くと、さきのはまゆふけの内を尋れよとの御告である。これから五郎の神佛に歸つての果てしない戀愛行脚が始まる。越後國ゆするき權現、越中國立山、越前・敦賀・紀伊・大和と廻れど、驗無く、とある濱邊を通つて行く三人の女の口の端に、己が噂が上つてゐるのを耳にして驚きもし頼もしくも思つたが、戀しき人の在り處を知らせ給ふ神佛更におはせぬ誓の空しさ。年廿一といふに七年目に故郷に歸り、さんこの郡馬頭觀世の夢想にまかせて、出羽國羽黒の觀音に一七日肝膽を碎いて祈誓を籠め、驗なくば靈地を續さんとまで歎き申す。

漸く面影の天女の在り處が知れた。しかし下界の衆生の及びもつかぬ寂光淨土の如來の御前に花香を捧げてゐたのである。數の御佛も力を添へて憐み給ふ中に、羽黒の觀音みづから漸う探り出して五郎に向ひ、叶はぬ戀を思ひ止まれと諭し、せめてもの慰めに、其の面影を此の世に遣し棄てた體の在處を夢に教へられた。

五郎は生國うつほさいといふ深山に分入り、百三十八歳になると自ら言ふ老翁に三日目に遇うて問ひ聞き、かくて觀音の示された乾の方の淋しい松山の、嘘ばかりを留めた古い御堂の跡を訪うて通夜した曉の夢に、戀しいおもかげは嬾しや見えた。返歌もしてくれた。

戀しくば尋れて來ませ我がすみが西の國なる彌陀の淨土へ
都ほしの長者の疑、父が越後に下り、山神の神木を伐つて堂の棟木にした崇て一類悉く亡び、唯一人生き残つたので、常に此の堂に花香を捧げて父母の後世を弔ひ、七年苦行した報で、今淨土へ召されてゐる。過ぎし日は尊い聖の説法聽

聞に降られた御佛達の御供して遊に参り會うたのであつた。妾故の廻國、御志は嬉しくいたはしいが、此の世では叶はぬ戀。今羽黒山の暫し勤を替らせ給ふ隙に見えたと告げて、明け行く空に消え失せた儚さ。残るは衣の下に鼻と抱きしめ一た苦蒸す骨のみであつた。

權頭の館には苦蒸した怖しい怪人が主人を尋ねて来たと言ふ。聲だけはさながらに五郎殿なのも訝しと言ふ。聲だけてはなかつた。父母を一目見たさに正身が歸つて来たのである。が、親兄弟の歡びは僅に一夜に過ぎなかつた。夜の明けた時、むれみつの姿は復も見えなかつた。

五郎が一筋のまめ心は佛神の憫みを蒙り、竟に淨土へ召された。けれども如來のまします寂光の都へは、下界の佛達には中々参られぬのである。五郎は又一人旅を續ける。三月程行いて逢うた廿四五の若僧に問ひ、又百廿日行いて犬飼星に、又五月行いてやよひ星に、九月行いてすま星に、又行いて明星星に。と、次から次へ問ひ尋ねつゝ涙と共に辿り行く末も遙けき雲路の果。明星星に別れてから三百日、天の川の釣人と名告る銀の釣針を垂れた八十許の老翁に逢うて、此處で復例の如く教へ繼がれた玉の輿に乗つた上臈に、漸う行き逢うたのはそれから又十三月の後であつた。五十餘人に圍繞せられた十七八の美しい姫宮は、面影を慕ひ行くむれみつと知つてゐて、輿を留めて、さまざま深い志に同情の語を寄せ、普賢菩薩に問へと教へて別れた。

普賢・文珠の導で漸く目ざす寂光淨土へ著いた。觀音・勢至の試問に遇ひ、七寶の蓮華花咲く八功德水の底、三世の諸佛三重の花の上に現じ給ふ由見究めて答へ申せば、めでたくもむれみつが戀故數多の年月を送り、清淨持戒の身となつて、菩提に志した功力により近き佛になり得たる事よと、紫磨黄金の臺に載せ、寂光の都なる如來の御前へ送られた。

御前に銀の花を挿んで供へ参らせてゐた面影の姿を見るより、遙々と慕ひ來て尋ね會うた歡に咽び合ふ二人、面影参つて早三年に餘る、いみじくも深い契ぞと感じ給ふ如來の妙音。むれみつが清淨の戀愛行脚はかくてめでたく果たされた。

五郎は愛染明王、おもかげは辨才天と現れ、越後國眞言寺は此の兩人の本地と傳へる。此の物語讀まんところ、十方諸佛天降つて護り給ふといふ。唯一念の信こそ即ち佛道である。(下卷)

梗

概

本地物

戀愛遍歴説話

【性質】 照號の一名に呼ばれる通り辨財天女の本地物語である。そして又愛染明王と併せての本地物語である。即ち越後の眞言寺の縁起譚である。そして説話の型態から觀れば、戀愛遍歴説話を形成してゐる。其の戀愛の對象が地上の女人でないところに、神婚説話的關係が生じ、其の動機としての天女の人間下降に羽衣傳説的佛がある。勿論純神婚傳説でなく、又白鳥處女傳説でもない。報罰の意味からの下界淹留の動機を含む天女傳説でもなく、其の降下の因由は諸佛冥感の聖僧の法座聽聞に在つて、此の點では袂衣の中將の笛にめで降下した天稚御子(『袂衣物語』卷一上)と類型をなしてゐると觀ねばならぬ。戀愛の目的達成の爲の祈願、それに對する夢想託宣は例の如くであるが、祈願せられた神佛が常に知らぬと答へては順次に他の神佛を紹介してくれる形に童話的な要素がはたらいてをり、又遍歴の路程が延長して終に天界に暨んでゐる部分には、支那傳説とも關涉を有する『天稚彦物語』毘沙門の本地等と相通するものがあるのを認める。しかしすべては主人公の父の夢想に基づく佛法歸依の大善根に起因し、幾年月の戀愛行脚の忍苦が報いられて、終に寂光の都、如來の御前なる戀人に尋ね會ふ奇縁の有難さ、結局

「世の人に傳へ、遍く道心を起さしめ、佛になさん方便なり」

信これ即ち佛道、溢らざる純愛は亦即ち信、かくて地上の人間の戀もやがて淨められて上天久遠の法契となる。故に

「此物語讀まむするところには、十方の諸佛天降らせ給ひ、護り給ふとなり」

と明らかに説き添へられてある佛法物語である。其の「うつほさい」の深山の夢想に儂い逢瀬を見せ、獨體の現身を示したあたり、「神祇釋教戀無常」、北邙一片の烟と立上つては、いづれか「如夢幻泡影」の理ならぬ。速に

内體の戀を解脱して寂光淨土に志せとの論し、例によつて法談小説の套型である。平安朝物語よりはやはり假名草紙の趣味と筆致とに聯なる種類の作といふべきもので、作者は編徒の類でもあらうか。

【素材】一辨才天女の懸想 天女と人間との戀愛乃至交婚といへば、羽衣傳説の原始的な形である白鳥處女型 (Swan-maiden type) 説話などもさうであるが、それは少し異なつた種類のものとして、特に佛説の所謂辨才天女と凡夫との戀愛説話といつた一様式について考へてみると、やはりその發生進展は決して偶然ではない。

辨才天は詳しくは大辨才功德天である。其の名に示すやうに能辨の天神である。又妙音天、美音天とも呼ばれる音楽の天神でもあることは、其の形像の一様式が——そしてそれが一般に信じ行はれてゐるところでもある——證してゐる通りに、琵琶を象徴の樂器として携へてゐるにも知られる。そして終には辨財天になつて七福神の中に數へられ、且其の中での唯一の女神として尊仰せられるに至つてゐる。元來は其の性別も或は男天とも言はれてゐるやうであるが、後には専ら理想化せられた女人美の應身として觀られ、此の意味から毘沙門天王の妹 (又は后妃とも) とせられてゐる吉祥天女と混視せられて來てゐる。此の端麗な女天の容姿が信仰の對象として以外に、憧憬の標的となるのは論を俟たぬ。

吉祥天との混視

「このさまのよき限りをとり具し、雖すべききはひまぜぬ人は、いづこにかはあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば、法氣づきくすしからむこそ、又佗しかりぬべけれ」(源氏物語「帯木巻」)

とつれづれの雨衣に皆笑ひ消してしまつた品定の人々の心持の中には、藝術美・信仰美の圏外に置かるべき最も凡俗的な或共通した氣分の動いてゐることを否定し難く、茲に所謂辨才天女懸想説話は、其の生成を既に古く暗示せられてゐると言はねばならぬ。況んや神婚説話 (且それが天女・仙女・女神等について語られてゐるものも

随分ある) は別に原始時代以來の神話傳説として盛んに展開しつゝ、あるに於てをやである。又況んや、其の妙音天女は一面に於て最も淫慾熾盛なりとせらるゝ、蛇性蛇身との連結の信仰を民間に播布開展せしめつゝ、あるに於てをやである。

頼家の天女懸想説話

本書の素材となつた口碑なり或は本據らしいものが在つたか如何かは不明であるが、江の島の辨才天を愛慕した説話は在る。『頼朝のそと』(『名』頼朝最期物語『國史叢書』所収) に載せてあるところのものはそれである。即ち頼家が鎌倉建長寺の大覺禪師を訪れた席へ出現した辨才天の麗姿に憧れて、其の歸り去つた後「今一度本地の御姿を拜み申したき由」を願ふと、忽ち腥風吹き起り天地震動し、龍蛇の本體を顯してのたり出た有様に、頼家主從肝を消して逃げ歸つたといふのである。(辨天から大覺へ給仕にと透られた善財童子が、如意と名づけられて一生禪師に仕へたといふことが謡曲『江島童子』にも語られてゐる)

辨才天の愛戀傳説

右の話が時代を経て轉化したのか、或は全然別のものか、或は又兩者の本據になつたやうな傳説が他に存したのか詳らかでないが、やはり江の島辨才天に戀した青年の物語『辨財天抄』が傳へられてゐる。徳川中期の田沼浪人某に關する説話で、これは其の念願が容れられた怪奇の事實と、分を知らぬ癡者の貪著に對する恐ろしい報罰とを語つてゐる。(藤澤衛彦氏著『日本傳説研究』第一卷「見が淵」参照) 此の説話には別様の意義をも含んでゐる。觀ることが出来るのであるが、兎に角以上述べて來たやうに、汚濁の凡夫が超人間界の辨才天女に思慕を寄せるといふ物語が、一箇の遊離説話として結象展開すべき可能性を具へてゐるといふことに就て十分な理由が存するものである。

朝鮮説話—天

附記 辨才天女ではないが、天女が夢に現れて青年に思慕せられ、後其の妻となる物語が朝鮮説話の中に在る。

慶尚北道安東郡の宣根といふ風流才子が兩度も天女を夢み、其の繪姿まで授けられて愛念轉禁じ得ず、終に天女の示現にまかせて玉蓮洞といふ仙閣に尋ねて行いて契を結び、己が家に伴ひ歸つて一男一女を設けたが、宣根が應試の爲に都へ上つた間に、前に宣根の愛を受けてゐた侍女梅月の妬心から冤罪を蒙つて、天女は舅の怒と侮辱に逢ひ恥ぢて自殺してしまつた。試験に登第して歸郷した宣根は悲み驚き、父が迎へてくれた新嫁に心も移らぬ愁傷の中に、或夜の夢枕に立つた亡妻の訴へ言に始めてそれと知り、急ぎ梅月を詰問して服罪させ、其の腸を裂いて夢の教のまゝに妻の遺骸に供へたと見る間に、天女は再び蘇つて、一家新な喜の聲に満ち、かくて新嫁を右夫人に、兩手に花の樂を見たといふ。(山崎源太郎氏著『朝鮮の奇談と傳説』二一九頁、天女の再生『春宵佳話』所載)

天人の降下歌

なほ天女の降下歌舞は、五節の舞姫の起源傳説(『江談抄』第一、公事、『十訓抄』卷下、第一〇、可成、幾才能事、諸曲、吉野天人等)や羽衣傳説に含まれる東遊起源傳説(『海道記』、『續教訓抄』卷一、上、吹物、諸曲、羽衣)を始め、殆ど天女に附き物の形になつてゐるほど一般的である。

二 天界索行型説話 茲に特に此の稱呼によつて認めようとする説話型は、其の純粹な形に於て、

- イ 天界の超人間が降下して地上の人間と契る
- ロ 或事情に依る兩人の別離、超人間の歸去
- ハ 人間が其超人間の夫(妻)を慕ひ求めての天界遍歴
- ニ 其の遍歴の途、諸星・諸佛神等に順次請ひ尋ね、其の教に隨つて巡行する
- ホ 最後に搜め得ての再會

天稚彦物語と
毘沙門本地

の諸條件を具へてゐる事を要する。即ち所謂“Cupid and Psyche type”の類種を做すものであるが、上に擧げた條件の下に一つの型態を形づくつてゐるものとして取扱はれ得ると思ふ。此の意味に於ての同型説話の代表は——そして本書の構想とも關係の緊密なのは——『天稚彦物語』(室町時代小説集所收)である。『毘沙門の本地』(新編御伽草子、上巻所收)の一部にも此の型の説話形式は含まれてゐる。但し、『天稚彦』の方は一面七夕の由來の説明傳説でもあり、天界に昇つて行くのが女性で、希臘神話の「エロスとサイキー」の場合に一致するが、『毘沙門の本地』の方は尋ね巡るのが天竺羅曼國の金色太子で、これが天から降つて來た人物であるのに、搜められるのが却つて地上の嬰婁國の姫宮で、それが死して靈界の大梵王宮に生れ替つてゐるといふ複雑した形である。しかしその姫宮も實は一時假に人間界に降つてゐたので、やはり此の型の條件に恰當する。

又朝鮮の羽衣傳説の一種として、三輪氏の『傳説の朝鮮』(第四編、童話)に載せてある「郭公」と題する説話は、勿論白鳥處女型説話でもあるが、又“Jack and Beanstalk type”や(兎から貰つた木の實を蒔いて、それから生えた木の芽の伸びるのに乗つて天へ昇ることがある)前記の兩書の内容とも類似した點がある。難題説話である點は、明らかに古事記神話(上巻、蛇の室の段)の系統を引く『天稚彦』と軌を一にし、天の川の岸邊の柳に登つてゐる青年の影が川水に映つて實子に發見されるのは、これも記紀神話の玉の井の段(『記』上巻、『紀』神代卷下)の變形である黄金の井の一段を含む『毘沙門の本地』と共通し、又天地を遊行する神馬の在るのは、同書の金麗駒に相應する。そして、前掲條件の(二)が完全な形で具はつてゐないだけで他はすべて充當してゐる天界索行説話である。その相互の先後關係などは俄に斷すべきでないし、その何れもの本據なり中間説話形なりが在つたのかも知れないが、兎に角類型であると共に、又何等かの交渉があることが想測せられ得る。朝鮮傳説の方は又「郭公」の鳴

朝鮮説話

聲の説明に關する天然傳説的要素も附随してゐる單純な形態ではない。

附記 朝鮮の羽衣傳説でも、他地方の所傳、例へば高橋亨博士の『朝鮮の物語集』所載の「仙女の羽衣」(金剛山の羽衣傳説)〔世界童話大系には第一六卷「日本童話集」朝鮮の部(七)に「羽衣傳説」と題して收め、前記「羽衣」の異傳を附してある〕は、原形に於ては右の傳説と同一根源であらうことは確かであると思ふが、前記兩近古小説との近似は、「郭公」傳説ほどではない。勿論白鳥處女型傳説であると共に、やはり一種の天界索行型傳説であることは同様で、此の點内地の羽衣傳説に比して、後日譚にまで延長してゐる異色と、そこに羽衣傳説を離れても存立し得る別種の説話類を保持してゐる事實が注意を惹くことと、そしてそれが此の項に於ての考察の題目に觸れて來ることを一言して置きたい。

さて、説話型としての諸條件は前に掲げたが、特に七夕の由來談に關聯しつゝ、天界(特に天の川)遊行傳説として、本説話型の完成を助け、少くとも『天稚彦物語』或はその内容の一部としての天界遍歴傳説の本據となつたものは、支那傳説の張翥の天河探險譚であらうことは疑を容れないであらう。即ち『漢書』(卷六一、張翥李廣利傳第三二)の漢使の大夏河源探險の事實から傳説化して『荆楚歲時記』等に見えてゐるところで、例の蓬萊好の漢武の勅を受けて、天の河の水上を探るべく、槎に乗じて到り、牽牛・織女に逢うて還つたと復命したといふ傳説で、日本にも早く『今昔物語』(卷一〇)に「漢武帝以張翥令見天河水上」語第四として載せ、『俊秘抄』(卷下)にも「天の川うき木にのれる我なれや云々」と詠んだ采女の歌の典據として此の傳説を掲げ、『寶物集』(卷一、命を賣と云ふ沙汰)にも見え、謠曲『七夕』に取材せられてゐる。なほ『天稚彦物語』の内容が、此の傳説からのみ進展したと斷ずるのは勿論早計であらう。其處には「Cupid and Psyche type」の遊離傳説の別に浮動してゐるものが在ることを否定することは出来まい。

張翥の天河探險譚

【構想・表現】 上卷は權頭むねただが後生の爲に建立した御堂の大供養の事が中心となつてをり、下卷にはむねただの末子まのの五郎むねみつの戀愛行脚が語られてゐる。

光堂
美男・美女ぞ
ろへ
何々ぞろへと
何々づくし

其の御堂の名を光堂と名づけたとしてゐるのは、有名な奥州藤原氏の建てた平泉中尊寺の金色堂に想を得たと勿論であらう。又其の供養に美男ぞろへ・美女ぞろへの遊を催し、草子ぞろへに打興するのは、物合・競物の平安朝趣味の習俗の流れを承けてゐると同時に、他面「十二段草子」の「花ぞろへ」「美人ぞろへ」と共通した心持で、謠曲の蘭曲「舞車」も一名「美人揃」と呼ばれてゐる。「平曲」の「源氏揃」「大衆揃」(卷四)、「朝敵揃」(卷五)や、やはり蘭曲の「兵揃」などの名目の與へられてゐることや、或は「蟲づくし」「草づくし」の草紙類の喜ばれた傾向と併せ觀ても(名目が「揃」「盡」でなくても、内容がそれである例も多い。宴曲などには特に多い)、後の淨瑠璃に於ける構想上の殆ど慣例的に必須な要件のやうになつた「何々づくし」「何々ぞろへ」の定型を展開させて行く氣勢はかくて漸次に助長せられつゝ、あつたのであらう。

下卷のむねみつの遍歴は、戀人を探ねめぐる此の種小説の定型であるが、それが天界へ延長せられてゐる爲に、其の部分が稍變つた形になつてゐる事は前項に説いた通りである。相手が天人である以上、それは不思議ではない。唯其の昇天の途中の有様が、『天稚彦物語』の内容に餘りに近似してゐる。即ち兩書男女の位置が逆になつてゐるけれども、「天稚彦のおはします所は何處ぞ」と尋ねて行く長者の乙娘が先づ遇ふのはゆふづつ即ち宵の明星で、「我は知らず、これより後に逢ひたらむ人に問へ」と告げる。次は帚星、次はすばる星、順次に同じやうに答へ答へて後に遇つたのが「めでたき玉の輿に乗りたる人」である。本書の方がもつと複雑である。「毘沙門の本地」に至つては一層複雑になつてゐる。僧形のゆふづつ・彗星、男女の幼兒を伴つた女人、又僧形の七曜星・明星、

天稚彦物語及
び毘沙門本地
と本書

銀の車に乗つた上藤の月、光菩薩、黄金の車の日光菩薩、大河の岸の若僧地蔵菩薩などと次々に行き逢ふのである。その天界乃至冥界索行の前に尋ねる妻が夢に現れて今の在所を告げ、自身の許へ招く事があるのも本書と同様であるばかりか、夢覺めての太子の歌

むば玉の夢に妻はありつれどさむる現におもひげはなし

の一首にも、何等か本書との交渉を語つてゐるやうな感じがする。或は

『天稚彦物語』→『本書』→『毘沙門の本地』

の順序に轉化して行つたのではあるまいか。いづれも、七夕・辨才天・毘沙門とそれらの本地物語である點でも關係は親近である。尤も三つの作品相互の直接關係だけを問題にするのは少しく偏見に失する。素材としての説話間の先後關係、交渉出入等の一概に斷じ難いものあることも考慮に値する。少くとも三書が構想上無縁のものでない事だけは言へる。

本書の山中の靈夢に配した獨體の寓論は、佛説の方便として、特に最も通俗的に知られたものに一休の法語「骸骨」がある。又小説の構想としては、他に假名草紙の「二人比丘尼」「七人比丘尼」等にも用ゐられてゐるところである。同時に先進傳説として、有名な小野小町が獨體の「あなめく」の歌物語『江家次第』卷一四、踐許上、五、御即位附后宮出車・『古事談』第二、臣節・『發草紙』卷四・『和歌童蒙抄』第七、草部、薄・『袖中抄』第一六、あなめく・『讀曲』通小町・御伽草紙『小町草紙』等をも想起させる。

其の夢中のおもかけの「戀しくば」の歌は、『古今集』(卷一八、雜下)の

「我が庵は三輪の山も戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門」

小野小町の獨體歌物語

戀しくばの歌

葛の葉型怪婚説話と歌物語

の改作であること勿論であるばかりでなく、其の段の構想は亦おのづから、同じく右の本歌に胚胎して此の種怪婚説話の定型を作り上げつ、展開して來た説話系の進展の一階次をなしてゐるものと言ふことが出来る。何となれば、此の系統での尤なるものは、葛の葉傳説『泉州信田稻荷縁起』であることは改めて説くまでもないが、右の『古今集』の本歌それ自身に既に早く神婚傳説的歌物語が附著して語られてゐるのを見るからである。(『和歌童蒙抄』第七、雜、杉參照。伊勢國あふきの郡の藤原と三輪明神との神婚傳説也。)

全説話の構想及び主題の上から觀る時、之をかの江の島辨才天の愛戀物語等に比して、雲泥の相違ある清高な精神的の天・人戀愛物語であるが、表現が如何にも稚拙で、且平俗に傾き過ぎてゐる感がある。もう少し空想的でももう少し典雅でそして引き締つてゐたら、もつと面白く讀めるのであらう。

【題號・年代】 女主人公の辨才天女の名を取つて題したこと言ふまでもない。その名の由つて來るところは勿論

「姫君のおもかけを一目見しよりわりなき戀のはじめとなり」(本輯一一一頁)

とあるにも説明せられてゐる通りであるが、

「天より天降り給ひしおもかけとやらん申す君を見そめしより」(一一三頁)

「おもかけは辨財天と現れ給ふ」(一二二頁)

とあるを始め隨處にそれが天女の名そのものとしても書かれてある。一名の「辨才天の本地」の題名も同時におのづから明らかであらう。

創作の年代は不明であるが、先づ室町期とすれば季世で、或は徳川の初世刊行年代に遠くない頃のものかもし

れない。

【原本並所在】本輯所收のものは、帝國圖書館藏、上下二卷一本、繪入(無彩)十行の豎本(縦八寸四分)で、題簽は「辨才天本地下」(新しい表紙に題簽)内題は「おもかけ物語上」「おもかけ物語下」柱は「おもかけ上」「おもかけ下」、卷末には本文に示したやうに

「萬治三歲庚二月吉日

福森兵左衛門版行」

とあるものである。

正徳五年刊の『増益書籍目録』(卷一、二)の「假名部、五丁ノオ」に「二、辨才天本地」(辨才天の本地)と出てゐるのは本輯に收めた右の刊本をさすのであらう。

元祿五年刊の『書籍目録』には、「舞草紙部(五之卷、二九丁ノウ)に「二、辨才天の本地」又「物語書」(同卷、三三丁ノオ)にも「二、辨才天本地」と見えてゐるのは恐らく重出であらう。西村版の寛文の『書籍目録』(「舞草紙部、一六二丁ノオ)には「二、辨才天」とあるのが本書であらう。

『小説年表』(三八頁、近代篇、假名草紙)には

「○べさいてん本地 二 萬治三年

と見え、舊版(二七頁、假名草紙)には

「○辨才天の本地 二 萬治三年

一名 おもかけ物語」

として出てゐる。

本書は前記帝國圖書館本の他、管見に入つたものはない。他に刊本が在るかも不明である。寫本の存否も傳聞したことはない。

序に『書籍目録』(五之卷「物語書」部、三七丁ノウ)に「一、辨才天通夜物語」と見え、『小説年表』には「出版年代未詳部」に入れてある)てゐるのは恐らく別書であらう。

概

近江國竹生島辨才天の由來譚である。
昔、大和國松浦谷壺坂に松浦長者とて果報いみじき人があつた。御名をば京極殿と申し、傳へ聞く天竺の須達長者にも劣らぬ有徳の人であつたが、唯一つ子の無い不足を長谷の觀音に歎き大願を立てた誓空しからず、參籠の夜半ばかり、枕上に立つた觀世音に金の囊を賜はるとの靈夢を蒙り、勇み喜んで歸館した長者夫妻は、程なく授かつた玉のやうな女子に、御夢想の時刻に準へて小夜姫御前と命名して鍾愛した。

人生は不定、姫四歳の時、長者は假初の病が重つて、北方に後事を託しつゝ、三十六歳を一期として逝いた。長者歿後の姫母子の身の上はみじめなものであつた。財寶は臣從と共に散佚し、昔の榮華に引替へて、露の命を繋いで行くたつきにさへ困却するやうになつた。

さよ姫十六歳の春を迎へて、亡父の十三回忌が迫つた。澤邊の根岸を摘み、里の落穂を拾ふ今の母子の身の上では、追善などは思ひも寄らぬ事である。孝心篤き姫はつくづくと案じ、親の菩提を申ふ爲には身を賣りても誓むと聞く。驚熊鷹の餌になるとも何か苦しむべきと思ひ定め、春日の明神に祈誓して、此の志を遂げん爲に然るべき人に引合はせ給へと願ひ、興福寺から説法に來てぬた聖の法座でも、親の菩提は身を賣りても申ふべき子の務との訓を聽聞し、益々初志を固めた。

茲に陸奥國安達郡に年經る大蛇の棲む大きな池があつて、八郷八村の氏神と崇められる此の蛇神に供へる爲、年に一度みめよき姫を此の池に生贄に捧げるのが土地の慣例であつたが、今年不幸にも其の番に當つたのは、里長こんかの太夫といふ有徳人であつた。神事は避け難し、さりとて一人の姫を如何してむざと大蛇の餌にせられよう。漸く女房の勸に力づけられて、身替の女子を買ひ取らうと、都をさして旅立つた。

概

都一條小川町菊屋に宿を定め、洛中を尋ねたが手に入らぬ。奈良に立越えてみたが思ふやうな人に逢はぬ。國からの途すがらも勿論探して來たのである。詮方盡きて興福寺南大門に立てた高札が、ゆくりなくも説法の下向道のさよ姫の眼にとまつたのである。未婚の少女を價を限らず買はうとの高札の面、所は輿禮籠屋の五郎太夫と讀んで、明神の御はからひと尊く嬉しく、然し母上に暇乞してと思つて姫は急いで京極殿へと歸つた。

其處へこんかの太夫が尋ねて來た。それは春日大明神が八十許の老翁と現じて、太夫に此の松浦谷の古への長者が館を指し教へられたからである。札の主と知つて姫は愈、明神の導きと有難く、親の菩提の身賣と聞いて感激した太夫が定めた砂金五十兩に身を代へることを承諾し、唯父の追善の爲五日が間の暇を貰つた。

門外で黄金を拾つたといふ姫の知らせに、驚喜した母は、亡き長者の恩よと感泣して、昔の家來共をも喚び集め、懇に亡夫の供養を營んだ。

姫が實狀を母上に打明ければならぬ約束の五日目が來た。動願したのは母君である。冥途の父上のみが親かと怨み泣く母に纏られて流石に聞え悲しむ姫は、迎に來た太夫にあらげなく引立てられた。後を慕ふ母を嚇しつ腫しつ、姫によき大名の婿取して迎へ取らん日を御待ちあれとたばかり、太夫は漸う母子を引離した(上卷)

思ひ設けぬ生別の悲しみに取亂しながら、母は思ひ出して一言云ひ添へた。姫が肌の守は父の形見の法華經五の巻、女人成佛、八歳の龍女も浮かんた有難い提婆品ぞと、あてのない再會を泣く泣く契りつゝ教へて見送る後影、持佛堂に哭き倒れた母はいつか氣も亂れて館を迷ひ出、戀し悲しに兩眼を泣き潰し、奈良の大路に童共が弄びの物狂になつてしまつた。

ならばぬ足弱の長旅に、幾度か途に行き悩みつゝ、露に濡れ血を流すさよ姫のいたはしさを思ひ知らぬではないが、情願では叶はじと、杖を上げ眼をいからし、歩めと急がせる太夫は、げにも梅若丸をさいなんだ人商人そのまゝであつた。隅田川の標の家をまざくと見れば、母の上さへ悲しく思ひ合される姫が心は涙で一ぱいである。

漸う奥へ下り着いた。太夫の家に迎へ入れられた後、清淨の座敷に、身を幾度も垢離に淨められて移されたので、珍しい土地の習と訝る姫は、女房達の言葉によつて始めて、さくら井が淵といふ池の主の贄になると知つて、夢かと驚

き悲しんだ。太夫の妻はいたく同情し、明年の春熊野詣の折、御形見と文とを必ず母御に届け参らせようと、涙と共に慰めるのであつた。(中巻)

神事の當日となつた。もとより親の菩提の爲の身賣故、姫の覺悟は殊勝であつた。髪を少し切つて、涙に筆の跡もしどろな母上への文に巻き込めて北方に預け、白木の輿に乗り、十八町を練り連れる一門に護られて池の端へ急いだ。やがて三艘の船が漕ぎ出して池の中島に著け、三重の棚の上段に姫は供へられて、神主は祝詞を奏し始めた。見物の貴賤は岸に群る。

祈願終る間も疾しや遅しや、魂を飛ばして急ぎ漕ぎ返した神主や太夫等は、今や影向あるかと待てども音も無い。御機嫌を損じたかと一同震へ怖ぢ、我先にと逃げ歸り、門戸を閉ぢて潜んでゐる。

取残された姫は、一心に提婆品を讀誦して靜に最期を待つ折しも、俄に天地震動して十丈許の大蛇は日月の眼を耀かし現れ來り追る。姫は騒がず大蛇に向ひ、身の上を告げ、暫しの暇を得させよと、「云何女身速得成佛」天龍八部人與非人皆遙見彼龍女成佛」と高らかに五の巻を讀みかれば、不思議や、十二の角一度に碎け、御經に撫て下されて、鱗もはら／＼と落ち散る奇特。一度影を水底に没して現れた時は十七八の女房姿、姫の前に畏り、妾ももとは人間で、伊勢國二見浦の者、繼母に憎まれ家を出て、人買に賣られ／＼て此の地の栗原の十郎に買ひ留められてゐたのを、其の頃此の池がまだ川で、橋の成就せぬところから、占卜の訓にまかせての人柱の籤を、測らず引當てた情なき、腹立たしき。怨念やがて蛇身となり、池の主となつて棲むこと九百九十九年、生贖の人を食ふこと八百餘人、今日御經の功力で三熱の苦を免れ、得道の縁を成す歡びの布施物にと、龍宮城第一の寶、如意寶珠を捧げた。

姫は夢に夢見る心地、大蛇は「鬼神に横道無し」と、姫を陸地に送り著け、更に郷國大和へ送り届けようと誓つた。惘れ悦ぶ／＼の太夫夫妻始め村人一同に別れを告げた姫は、再び池の汀に立つて喚べば、大蛇は姫を頭に戴き、池の底へ沈むと見え、利那が間に和州奈其の郡猿澤池の岸邊に漕ぎ上げ、白雲に打乗つて昇天し去つた。それから此の池をさる澤と呼ぶやうになつたのである。そしてこの大蛇は、本地壺坂の觀音であるといふ。陸奥の國も以後安穩に鎮まつたと傳へる。

梗

概

梗 概

再び故郷の土を踏んだまゝ姫は、戀しい昔の館を訪へば、狐・梟の棲處と荒れて、懐かしの母上は影もまき、所の人に尋ね問ひ、念ぎ奈其の都へ復出て見れば、親子の奇縁盡きせず、松浦物狂と京童に鬪らるゝあさましの母の御姿、澤るゝ涙を拭ひもあへず、かの如意寶珠を押當つれば、忽ち兩眼開いて、母子對面の嬉し涙は、例少い事共であつた。母子は相伴うて松浦谷に歸り、如意寶珠の力によつて昔に彌益す長者と榮え、家來も集まり、奥州の／＼の太夫一門も召上せられて、數の財寶を賜はつた。其の後まゝ姫は大和の國司と婚して數子を設け、不老不死の徳を具へ、後近江國竹生島の辨才天女と現れた。竹生島といふは八方大地を離れた浮島であるから、地離寶山といひ、又夜の間を生じた島故、明けずが島とも呼び、夜の間竹が三本生ひ出たので、竹生島とも名づけられてゐる。如意寶珠は此の島第一の寶であるとのこと。今でも參詣の者には大福徳を賜るといふ。返す／＼有難いは孝行の徳である。(下巻)

本地物

【性質】これも亦本地物である。そしてこれも亦辨才天女の本地物語である。唯其の祭祀の場所が同じでなく、垂迹の由來を異にするによつて、前の越後眞言寺の辨才天のそれとは全然別箇の説話として物語られてゐる。而も此の方は有名な竹生島の祭神に關する一傳説として語られ、それに大和國壺坂の觀世音の本地の説明が附随せしめられてゐる。

法力と孝徳

説話の型態としては前のものとは全く異なり、孝行談式人身御供説話で、それに關聯して、梅若型人買説話と、法力説話としての魔界得脱譚(龍女成佛傳説の系統を引く「法華經」讀誦説話)と、如意寶珠奇特説話とを含んでゐる。全體の色調から、やはり佛法物語であり、そして孝徳説話であると言ひ得る。宗教的な要素と倫理的な要素と合體し、それに童話的、寓話的な成分を交へ、且地方的口碑と時代色とを色濃く織込んでゐる。そして説話の本據としては「法妙童子」を通して佛説にまで(?)鑿究せられ得べく、女主人公に借り來られた氏名の上に望夫石の古名媛を再生せしめてゐるのを見るのである。其の母の愛子に離れた後、盲ひとなつての狂氣は、亦能劇・謠

曲文學に特に美化せられて著しい一群類をなしてゐる所謂狂女物——物狂——の趣向たること論を俟たぬ。女主人公の誕生は申子説話の形を取り、又心願が春日大明神に掛けられ、その大明神が人買に對して老翁と現じての託宣があるのも、當代此の種の物語の類型である。

なほ大蛇の素性に關して、挿話的に附著し、解説的に添加せられてゐる部分には、かなり複雑な要素を含み、繼子傳説・人買傳説・人柱傳説・人蛇(怨念蛇生)傳説・九十九傳説等を凝集させてゐる。

竹生島神社

【素材】一 竹生島の辨才天と壺坂寺の觀音 竹生島神社は「延喜式」(卷一〇、神祇一〇、神名帳下)の「近江國淺井郡郡久夫須麻神社」で、祭神は「宇迦御魂」(豐字氣姫命)である。それが本地垂迹説が行はれてから辨才天女と習合せられ、嚴島及び江島と併せて日本三辨天と崇められるに至つた。「竹生島縁起」(群書類從卷二五)には、「帝王編年記」(卷一〇、元正天皇)に見える兩岳背競傳説の變形に關聯した本島生成説話を語ると共に、其の島神となつた淺井姫命が官軍を助けて逆臣惠美押勝を誅伐せしめられた靈驗を稱へ、後、大辨才天女の忽然化現した奇瑞を説いてゐる。「廣益俗説辨」(正編卷三、神祇)には「嚴島・竹生島・江島神は辨財天と云説附三神を辰狐王が女といふ説」の條に、

「一説には天竺辰狐王の三女日本に飛來る。天女は嚴島、赤女は竹生島、黒女は江島に鎮座ありと云」

の奇説をも掲げて其の妄を指摘してある。又「縁起」には「淺井姫命今地主者釋迦如來化現也」とも記し「今是大神者辨才天女、釋迦如來應跡」とも見え、島そのものが「大辨才天化現」とも説き、謠曲「竹生島」には「忝くも此島は九生如來の御再誕」と述べてある。その他、島名及び生成の由來に就てなほ種々の傳説の傳へられるものがあり(本輯一五八頁本文及び頭註參照)、湖形の琵琶に宛てて竹生島は其の「覆手也」と觀、生身の妙音天の居所として相應は

しいと考へられてゐる。(『溪嵐集』(所引))

都良香と辨才天との聯句

經正の秘曲と仙童の琵琶

なほ此の竹生島の明神に關して、藝術傳説、就中詩歌傳説としての都良香の逸話『江談抄』第四、『撰集抄』第七(八)「都良香竹生島並朱雀門詩作事」、『十訓抄』卷下、第一〇「可庶三能才能事(六)」「古今著聞集」卷四、文學「東齋隨筆」詩歌類等參照)、音樂特に琵琶妙手説話としての經正が秘曲『平家物語』卷七、竹生島詣『源平盛衰記』卷二八)並びに其の彈奏の名器についての説明傳説たる松室の仲算が仙童の奇譚『盛衰記』卷二八の同條、『三國傳記』卷一二「第二四」松室兒成仙事附竹生島管絃事「元亨釋書」卷二九、仲算童の條參照)の傳へられるものがあることは周知の事であるが、本書の内容とは關係はない。その他、仁和寺の覺寬僧正の夢想説話『三國傳記』卷一〇、「第一〇」(覺寬僧正竹生島利生事)を始め、數々の靈驗譚がある。

壺坂寺

壺坂寺は南法華寺と號し、大和國高市郡高取土佐町の東南壺坂に在り、本尊は千手觀音、開基に就ては諸説があるが、所謂西國三十三所第六番の札所である。枯木華開くといふその靈驗は澤市・お里の義太夫に誰知らぬ者もない。但し本書に語る其の本地とはこれ亦何の關係もなさうに思はれる。尤も盲者の目が開く如意寶珠は龍宮なり竹生島なりの寶ではあらうが、それを捧けたのが此の觀音の前身の大蛇だとすれば、やはり盲人の信仰する本尊に相應してゐるわけではある。

其の壺坂の附近に清水谷と呼ぶ所は在る。

「土佐の町を出て吉野の方へ數町ゆけば、清水谷と云ふ町有り。是より東にわかれて十町ばかり行けば、山上に壺坂の觀音堂有り。順禮の札所也(貝原益軒『和州巡覽記』)

松浦谷といふが在るかは聞く所が無い。或は女主人公の名や母の物狂の構想を示唆したらしい謠曲の題名などか

らの聯想で、作者の與へた名かも知れない。

二 女主人公の名義 女主人公のさよ姫は長谷の觀音の申子で、其の命名の由來は

「乃ち御名をば、御夢想のじせつ(時節)に準へて、さよ姫御前とぞ申ける」(本輯一二七頁)

とあるに明らかであるが、其の名の出處は、後の項に説く安積沼に關する口碑であるといふ物語の、安積某が娘の名を其の儘取つて來たのであるとしても——其の口碑が却つて本書或は本書の内容から生れたものであれば一層論はない——姫の兩親を松浦長者夫妻とする以上、『萬葉集』(卷五)の憶良の詠に名高い大伴狹手彦が妾、松浦佐用比賣を作者が豫想してゐることは確であらう。「十訓抄」(卷中、第六可存忠直事)二〇)では、もう此の領巾振山傳説は

「この山は肥前國にあり。松浦明神とて今におはしますは、この佐夜姫のなれるといひ傳へたり」

といふことになつてをり、支那の望夫石傳説と並舉してある(古今著聞集)卷五、和歌第六にも殆ど同文で擧入せられてゐる)のを見れば、佐用比賣の石化への進展が暗示せられてゐると共に、彼女の神化はかなり古いことが知られる。即ち名稱の準據となつた古傳説の人物それ自身既に人間としては終れなくなつてゐたわけである。

佐用比賣傳説の異傳

附記 『和歌童蒙抄』第三、地部、山の條に引いてある『肥前國風土記』の所傳では「藤原村第四姫子」と見え(國文註釋全書本に「よる」)、『袖中抄』第八に『童蒙抄』を引いた文にはそれが「弟日姫子」とある(歌學文庫本(壹)による)。又『筑前風土記』の所傳として同じく兩書に掲げてあるものは、「那古若」といふ女で、人名の異なるばかりでなく、説話も弟橋姫型の變つた形になつてゐる。海神の犠牲に供はる點では寧ろ本書の説話に通ずるところのものがあるけれども、恐らく關係はあるまい。なほ馬琴の『松浦佐用媛石魂録』の序文に、「領巾振山考」と題して此の領巾振山の傳説に關するいろ／＼の考證が附してあるが、直接の題目ではないから茲には其の批判を略する。序に佐用姫の石化は『十訓抄』著聞まではさうでないが、流布

本『曾我物語』(卷四、箱王祐經に逢ひし事)ではもう、さうなつてゐる。

謠曲松浦物狂(籠太鼓)

謠曲「松浦鏡」はこの佐用比賣の傳説に取材してあるものであるが、本書の女主人公の名義の轉用を、特に此の謠曲を媒としてなされたらうと考へる必要は毫も無いが、同じ謠曲の「松浦物狂」(日本古典全集)第二(所收)は、其の曲名を通して、「松浦鏡」或は少くとも佐用比賣の傳説——寧ろ佐用比賣の名といふ方が適切であらう——と本書との連繫をなすにも都合よい資料であつたと言はねばならぬ。勿論同曲は單に其の「松浦」といふ名と、物狂といふ構想以外には何等内容上本書との關係は無い。即ちこれは九州の松浦の某が臣關の清次が牢破りをしたので、其の妻を召捕つたのが狂氣して時の鼓を打ち、夫を慕ふに感じて、兩人共罪科有される物語で、普通には「籠太鼓」「弄太鼓」と呼ばれる曲である。「天鼓」や「富士太鼓」などからの思ひつきもあらうが、松浦物狂の趣向が導き出される爲に、或は「松浦鏡」の佐用姫が狭手彦から與へられた形見の鏡を抱いて狂亂の果ては投身したといふ一齣が手傳つてはゐないであらうか。若しさうならば、亦さういふ意味で本書と素材上或は構想上に間接の關係が生じて來ることにはなる。

因に「松浦鏡」の素材は佐用比賣傳説と鏡の宮の事とであるが、右の形見の鏡の哀話について、大和田建樹氏の『謠曲評釋』には

「昔は此謠に作れる如き傳説をや語り來りつらん」(第五輯、第六卷、一七〇頁)と註してあるが、その本據として、前に附記した『童蒙抄』所引の『肥前風土記』を擧げることが出来る。

尤も「松浦物狂」の名は普通は蘭曲の一として知られてゐる。やはり筑紫肥前國松浦の住人某が讒者の爲に冤罪を蒙り都上りした後、音信の無いのに悲しみ焦れる妻と子(二人が松浦の濱邊で人買(買)にたばかれて便船する一節を内容としてゐる)「籠太鼓」と此の曲との關係の有無は措くも、(少くとも名目上關係はあ

ると言へるが)本書と『松浦物狂』の名目との関係は前に『籠太鼓』について言つた事を移して繰返せば足りる。若し人買の爲に母子が別れ／＼になつて『隅田川』式の狂亂になる筋でもあつたのなら、別の意味も加はつて本書との親近さは一段増して來ることになるのであらうし、『能本作者註文』に世子作として載せてゐる『籠太鼓』の名が『松浦物狂』でなくても差支無くなる。なほ後世の物ながら『二百十番謠目録』に福來作として『待羅物狂』の名が見えることを附記して置く。

謡曲松浦姫と
佐(小)用(夜)
姫

又『舊謠いろは名寄』と『能の圖式』とに『松浦姫』、同じく兩書に『佐夜姫』、『翁草』に『小夜姫』、『二百十番謠目録』に『佐用姫』の曲名が見えてゐるが、相互及び本書との関係の有無は不明である。多分所謂佐用比賣の方なのであらうし、『松浦鏡』の別名らしくも思はれるが、記して後考に俟つことにする。

三 少女の生贄と邪神の歸伏 茲にもつと注意せられねばならぬ謡曲がある。即ち本書と特に緊密な關係を保持してゐるやうに觀られ得る作品として『池贄』(謡曲御書第一卷第二卷所收)を挙げねばならない。駿河國富士郡下方の郷大蛇の御池に贄の少女を供へる説話を内容とし、其の生贄の人選は、御園(引籠)モチヱに屬する型のもので、不幸にも通掛の旅人夫婦の一人姫が當つたが、両親の歎願に感應まし／＼た富士権現の神力によつて救ひ還される物語である。そして其の姫が贄の船にのせられて行く状を、

「あれ／＼見よや御池の面、小波立てて水うづまき、風吹き荒れて朱の船、おのれと沖にゆられ行けば、父母あれはと舟を慕へば、姫も互に名残を惜しみ、招けば招く風情はさなびら、松浦佐用姫、かくやらんと、汀にひれ臥し泣き居たり。」

と敘してゐる。本書の大蛇の生贄に供はるさよ姫とその松浦の氏の名も、或はこ、からなど暗示を得たのではな

謡曲池贄と本
書

かつたか。若し此の曲が本書より早く成り、又次項の口碑も本書より古く存したとすれば、其の口碑と、さよ姫の名からも聯想を容易ならしめる相似た素材を内容とする右の謡曲とが本書の生贄物語の主な素材となつたのではないかと臆測される。若し反對に右の謡曲が本書より後のものならば其の影響は逆であらう。(右の謡曲の素材としての富士郡の口碑——若し存したとすれば——と本書との間には、此の謡曲を通しての他、恐らくは餘り深い關係はあるまいかと考へられる)

唯、生贄の救助、邪神の歸降といふことが『池贄』にあつては明らかに他力的で神明の冥助に因るのに、本書は佛力特に法華經提婆品の功德で、且大蛇を降伏し得脱させるのは人身御供の姫自身である。此の點では前者が寧ろ素尊の大蛇退治神話(記)上巻(紀)神代卷上)の系統を直接に引いてゐるに對し、後者は龍女成佛の法華經功力説話の流れを承けてゐる日蓮上人の七面山龍女教化の高僧傳的宗教説話を主題としてゐる謡曲(現在七面『七面』の部類に屬する。それらの謡曲或は少くとも其の素材としての傳説は本書より早く流布してゐたらうと思はれるから、本書の創作に同じく影響してゐるものがあらうかと思はれる。『三國傳記』(卷八、第二七)毗舍離國真長者事)には蛇王が法華經の功力で天上に生れた印度説話も見える。

蛇神の生贄に供へられた少女が勇者に救はれるといふ説話型だけについて言へば、ヅントの所謂ヘラクレス型(Herakleus)英雄怪物退治説話で、世界的大播布説話の一種であり、我國では即ち素尊大蛇退治神話を典型としていろ／＼の形態で播布展開してゐる(私は便宜、大蛇退治型説話と呼んでゐる)のであるが、本書のそれは、救助者が英雄であり、救助の手段が武力・智力・又は寶劍の威徳等である代りに、生贄自身であり佛力であるといふ變形に於て成立してゐるところに、今述べた法華の信仰及びそれに関する宗教傳説との合流といふ現象に接觸

謡曲現在七面
と七面

英雄怪物退治
説話

大蛇退治型説
話の變形

するのである。

生贄の身替

生贄の身替も亦一の説話型をなしてゐるが、中には猿退治傳説（『今昔物語』卷二六「美作國神依三猿師謀一止生贄」語第七）のやうに自ら進んで身替に立ち、且怪物を退治する型のものもある。

人蛇傳説
九十九傳説

生贄を食す湖沼の主の大蛇が所謂人蛇であるのも、諸方の口碑に珍しくなく、其の蛇身に變ずる動機は種々あるけれども、怨念に基づくのが常型で、本書のもそれであり、九百九十九年間池に棲息してゐるといふ形に、九十九傳説の成分を含んでゐる。

歌枕安積沼

四 安積沼の大蛇傳説——さよひめ堂の由來 本書の蛇神生贄譚は、岩代國安達郡さくら井が淵の神事として語られてゐるが、地方的口碑としての資料は却つて同國の隣接した安積郡安積沼の方に傳存してゐる。それを本書の作者が借り用ゐたのか、或は既に隣郡へも遊離轉化してゐた類似の口碑が在つてそれに取材したのか俄に定め難いが、安積沼の方が原らしくも思はれ、且原形は少しく異なつてゐるやうに見える。

蛇骨地藏緣起

陸奥の安積の沼は古くから歌枕として知られてゐることは改めて説くまでもなからう。此の沼主に關聯して、昔の安積郷（後、日和田又檜和田、今、山の井村と改む）の跡の東勝寺（さよひめ堂）蛇骨地藏の緣起傳説が在る。藤知文の『東山志』（卷上）「安積、日和田」の條に引くところのものがそれである。

「蛇骨地藏 東勝教寺中」
傳記に曰、元正帝の養老年中淺香白川二郡を領せし淺香左衛門尉忠繁が家臣淺香を蕃時郷なるもの、忠繁を殺して其家財を掠め取しかば、忠繁が女葛蒲といへるもの深く憤り、身を淺香の沼に沈て大蛇となり、玄蕃一族を亡せしも足れりせず、猶其憤りの餘りにや、村中の幼女を以て贄とす。時に村民勘大夫が女贄に當れり。一女の必死せん事を恐れて杉浦金任が女佐世姫と云ものを以て己が女子に替らしめ、佐世姫は唯心を神佛に任し殊に念する所の法華經の提婆達多品を誦し

さよ姫堂

越後の人富永春部の『和名抄諸國郡考』（『存探叢書』所收）にも

「陸奥驛路圖云、檜和田驛の西に廢城ありと云傳ふ。安積左衛門と云人住たり。そこにさよひめ堂といふあり。さよ姫は彼人の女なるよし、東鑑を按るに、嘉祿二年安積六郎左衛門尉祐長云々（卷八、東山道下、陸奥、安積郡安積の條）
附記 右の文は『大日本地名辭書』三八八二頁、奥羽、岩代安積郡の條にも引かれてゐる。『吾妻鏡』流布本には卷三一、嘉祿三年四月二二日の條、將軍供奉人の連名中に「安積六郎左衛門尉」と見えてゐる。

しかし前者は文化三年に稿成り、後者も徳川季世の纂述に係るものである。前者の載するところの所謂蛇骨地藏緣起は寧ろ後世のもので、却つて本書などから出たのではないかと思はせられる感すらある。後者の引く「陸奥驛路圖」では、さよ姫は安積左衛門の女で、これが人蛇の本體なのか、生贄の當人なのか判然せぬが、本傳説と交渉の在ることだけは確と思はれるけれども、元正帝の養老年中の淺香左衛門尉の愚劣な傳會よりは「吾妻鏡」の人名に史證を求めようとしてゐるだけだが稍まじめだといふ他、好い參考資料を提供してくれない。

寧ろ「安積便覽」に

「當村は、昔安積沼に大蛇住みしとき、風雨烈しく耕作の實もあしかりしに、其蛇を退治してより、五穀も實のり、日和くなりしより、日和田と稱しけるにや」『大日本地名辭書』三八八二頁、奥羽、岩代安積郡の條所引）
と見えて地名傳説的分子の附著してゐる單純な形が舊形なのではなかつたらうか。或は又、菊本賀保の『和國花萬葉記』（元祿十年夏刊）に見える蛇骨觀音の緣起、

湖沼退治傳説
法力説話
蛇骨觀音

「昔此處に水代淵とて、淵に青龍住て人を惱ませしに、大師これをいましめ給ひ、其蛇骨を取て觀音を作り給へり」（卷一一、

東山道八ヶ國の内、陸奥、日和田の條〔これも大日本地名辭書同條に右の文の一部を引用してある〕

といふ弘法大師の湖沼退治傳説〔法力説話〕なども舊形を傳へてゐるやうな感がある。若し次に引く『觀述聞老志』所載の口碑が舊く存してゐたとすれば、それが右の日和田の舊口碑と合一して後世のさよひめ堂乃至蛇骨地藏緣起が進展したのではあるまいか。

觀述聞老志所載の口碑

けれども其の『奥羽觀述聞老志』の口碑とても甚だ古い形のまゝであるかは疑問である。即ち同書〔卷一〇〕では、膽澤郡の事として載つてゐる。それは富永掃部介といふ者の貪婪嫉妬の妻女が人蛇となつたといふので〔心月寺の條〕、それに關聯して

人蛇傳説

「蠖蛇湖」

在北葉場村。掃部介妻一日飲此池水而變爲化鬼物、忽入池中、死爲蠖蛇而棲于此。鄉黨怖之、自是每歲以婦人而爲牲焉。土人曰之蠖蛇湖。

小夜女生贊譚

と記し、又小夜女の上に於て

「四柱址」

在都鳥村。去池畔不遠。一鄉村落以女備牲而爲例焉。軍次兵衛義實嘗其備。仍買一女子、其名曰小夜。設架于四柳樹、饌之牲而歿池蛇出。女子信觀音日讀大悲經。此時轉讀數回。以其功德而蛇蠲解。獸苦、脫畜身、忽得佛果。女子亦脫死而無恙。後人稱設架地曰之四柱址。同村有壘死蛇地。曰之蠖蛇塚。

佐用姫の來典説——美人漂泊型説話

と載せてゐる。略、本書の説話と一致するのであるが、『聞老志』の成つたのは享保四年であるし、『國花萬葉記』よりは廿年以上後の作である。口碑としては元祿以前行はれたことに矛盾は無いとしても、本書より早い證左とは直にはなり得ない。なほ右の口碑に追記して、その小夜は即ち「松浦佐與姫」を義實なる者が遙々筑紫から買取

つて來たのであるとなす土人の言を拒けて、別に佐用姫が袂手彦に別れてから悲しんで此の地にさすらへて來て卒つたのを祭つたと傳へる一社が志田郡稻葉村に在るのに傳會したものであらうと撰者は言つてゐる。此の傳説は靜御前などによく附隨してゐる美人漂泊型説話として在り得ることである。

しかしそれらの諸傳相互の關係、本書内容の素材との先後等一々明確には辨じ難い。たゞ若し安積沼の傳説の始源に關して臆測することが許されるならば、その原形が生贄〔人身御供〕説話であるか、人蛇説話であるかは別として、或は意外に、かの姨捨傳説に於ける『古今集』〔卷一七、雜上〕讀人しらすの「我が心慰めかねつ」の歌と同じく、『金葉集』〔卷九、雜上〕の

「百首歌に旅の心をよめる 參議師頼

小夜中に思へばかなしきちのくあさかの沼に旅寐してけり」

の歌などから胎生した歌物語に、地方的な或遊離説話の結びついたものであらうも知れぬ。〔右の歌は、『堀河院御時百首和歌』〔太郎百首〕』夫木和歌抄』〔卷二四、雜六、沼にも出てゐる〕。それは牽強に過ぐる嫌があるとしても、大伴氏の愛人の漂泊傳説〔それも古くないのかも知れないが〕などから結象した他地方の口碑が流れ込んで舊い別箇の口碑と合抱したとしても不自然ではない。どの程度に本書の素材として意義を有するかは定め得られないが、何等か本書の内容と直接か間接かに交渉ある口碑が存してゐたらしいことだけは考へ得られる。

五 猿澤池の龍王 奈良の猿澤池は、采女投身の傳説〔拾遺集』〔卷二〇、哀傷、人鷹、大和物語』下卷、歌林良材集』〔卷下、第五、有由緒歌、猿澤池に身なげたる采女事、謠曲』采女』等〕に知られてゐるが、此の池と龍とは全く縁の無いことはない。『宇治拾遺物語』〔卷一一、藏人得業猿澤池の龍の事〕の鼻藏〔はなぞか〕が惡戯は、根なしことの龍の昇天物語であるが、『古

事談』(第五、神社佛寺)の日對上人が拜した龍王に關して、同書に

「室生龍穴者、善達龍王之所居也。件龍王初住、猿澤池、昔采女投身之時、龍王避而住香山春日山也。件所下人藥死人。龍王又避住室穴。件所賢僧都所行出也(下略)。」

と傳へてゐる。勿論本書の素材と直接の關係は無いのであらうが、猿澤池の主としての龍王傳説が古くから存した事は是でわかる。そして亦詠曲「采女」のシテも「龍女が如く、我もはや、變成男子なり」しかも所は補陀洛の南の岸に至りたり。これぞ南方無垢世界、生れん事も頼もしや」いづれは「讚佛乘の因縁」ならぬは無いのである。

本書のそれは、龍女成佛の誓に漏れぬのは同様であるが、終りに其の本地を説くと共に、女主人公を伴ひ來つて縁由を結ばせた此の池を去るについて、

「それより此池をさる澤とは申也」

と「付取」式の言語的機智の滑稽を基礎とする地名傳説的解釋を附してある。而も

「龍女は南方に飛び去り行けば、龍神は猿澤の、池の青波蹴立て蹴立てて、其丈千尋の大蛇となつて、天に群がり地に蟻りて、池水を返して失せにけり」

とある詠曲「春日龍神」の結文が、猿澤池の龍王傳説を確かめてくれると同時に、本書の右の場面構成の動機をも併せて説明してくれてゐるやうにも思はれぬことはない。春日明神も亦本書に於ても突然現形して、間接に蛇神得脱のなべてならぬ佛縁に一臂の力を添へて居られる。

六 孝行の身賣 生贖の身替に立てられることを別として、單に孝行のために人買に身を賣るといふことそれが既に本書の物語の大切な主題になつてゐる。人買傳説には安壽・對王型や梅若型やをはじめ種々の型態を認める

ことが出来るが、其の人買の手に渡る動機としても、偶然に誘拐される場合、強制的に賣渡される場合、合意的に身を賣る場合等いろいろある。本書のは最後の場合であるが、これらは傳説のみならず、事實としても勿論行はれたところであらう。本書のそれと類材をなし且事實談らしさを多分に持つ興味ある例話を「沙石集」(卷六「一六」)に見出すことが出来る。

「身を賣り母を養ふ事

去りし文永年中、炎旱日久しくして、國々飢饉夥しく聞えし。中にも美濃・尾張殊に餓死せしかば、多く他國へぞ落ち行きてける。美濃の國に貧しくして母子ありけり。固よりたよりなき上、かゝる世にあひて、飢死ぬべかりければ、忽ち心うき事を見んよりは、身を賣りて母を助けんと思ひて、母にこの様を云ひければ、たゞ一人持ちたる子なりける上、孝養の志ありければ、離れん事悲しく覺えて、死すとも同じ所にて手をも執らへて伏し、頭をも並べてこそ死なめ。幾程もあるまじき世に、生きながら離れんも口惜しきことなりとて、母ふつと許さざりけれども、若し命あらば自ら廻り遇ふこともありなん。忽ちに飢死なん事も、さすが悲しく覺えて、母はかく制しけれども、身を賣りて、代を母に與へて、泣く泣く別れて東の方へぞ行きける。三河國矢作の宿に、相知りたる者語りしは、商人の人数多具して下りける中に、若き男の人目もつゝまず音をたてて泣くありけり。人怪しみて何故にさしも泣くぞと問ひければ、美濃の國の者にて侍るが、母を助けんが爲に身を賣りて、何處に止まるべしともなく、東の方へ下り侍る也。母のあまりに別るゝことを悲しみて、聞え焦れ候ひつるが、目を數へてこそ思ひ起すらめ。命あらば廻りあふ事もありなんとしらへおきつれども、また二度、母の姿を見ずして、東の奥の山の奥、野の末に流離ひ行き、夕の煙、朝の露と消えて、また母を見ずぞや止みなんと、口説き立てて泣きければ、見聞く人も袖を絞らぬはなかりけり。至孝の志まめやかに、昔に恥ぢず、ありがたく覺えて返す返すも哀れに侍り」

右の物語は之を、都の吉田の少將と契つた美濃國野上の宿の遊女花子の狂戀を主題としてゐる詠曲「班女」、並

びに「都北白河に吉田の何某と申しし人の唯ひとり子」の梅若丸を人買にかどはされて焦れ狂ふ母をシテとした謡曲「隅田川」と併せ観る時、其の間に何等か素材上の脈絡があるやうに思はれないであらうか。それは措いても、本書の人買説話が、その「隅田川」の梅若傳説、或は同曲そのものからすらもの影響を受けてゐることだけは確かである。

親の菩提の爲の身賣

唯、本書のさよ娘が身賣の動機は、貧困の母への手助けではあるが主として亡父の追善供養の料に代らうとてである。そして又其の類例は、本輯の中でも、「はもち中將」の陸奥國和田庄、五郎太夫に賣られた羽持殿の北方が素性を伴つて

「みづからは都邊の者なるが、父母の菩提の爲に身を賣りて候。もとより覺悟の前なれば、よきに目をかけて、下の水仕になり共使わせ給へ」(本輯一八四頁)

といふ詞にも見出すことが出来る。さうした時代意識と習俗との反映と看られ得る。

本書挿話の人買説話並に人柱説話

挿話としての大蛇の自傳物語中に含まれて、二重の形をなしてゐる今一箇の人買説話は、身賣モチイヴではなくて誘拐モチイヴである。そして次々に賣渡されて最後に人柱にまで立てられるのである。それも御園モチイヴである點は却つて前に述べた謡曲「池贖」に一致するが、人柱傳説としては珍しくないところであり、必ずしも「池贖」——若し本書より早いとすれば——の影響に歸する必要はない。

摩尼珠

七 如意寶珠の奇特 如意寶は、帽・杖・髓などと、形こそ同じからざれ世界的に播布してゐる觀念であり遊離してゐる傳説であるが、佛説のそれは即ち摩尼珠(如意寶珠)で、これに天上のと人間のとの兩種ありと「大智度論」(卷五九)に言ひ、其の效用功德に關しても同書の同卷に

「此寶名如意。無有定色。清徹輕妙。四天下物皆悉照現。(中略)是寶常能出一切寶物。衣服飲食隨意所欲盡能與之。亦能除諸衰惱病苦等。」

とあるが要を得た説明と言へる。それだけではなく、人此の珠を得れば、「毒不能害、入火不能燒」(同卷)、又一人の願望を充すに止まらずして、「能雨一由旬」(同、卷三五)靈力がある。盲母の眼を開かせるも易々たるものであらう。否「能除四百四病」(同、卷五九)の無價摩尼珠寶は

「若男子女人眼痛腐盲聾、以寶示之、即時除愈。」

の明文が「般若經」(卷一〇、法稱品(舍利品)第三七)に既に出てゐる。

故に「大智度論」(卷二七)には「一切珠中如意珠第一」となし、「寶物集」(第一、玉寶たる沙汰の事)にも、

「爰を以て華嚴經には、一切の寶の中には如意寶珠勝たりと説き、妙樂大師は、如意寶の如くんば天上の勝寶と釋せり。實に如意珠などを得たらんには、五穀七寶何れが乏しき物あらん」

と讚歎し、延年唱歌の「如意寶珠連事」にも

「誠に金銀珠玉の珍寶はさることにて候へども、如意寶珠にすぎたる寶はあるまじいて候」と稱へるのである。

如意珠の來由並に所在

此の寶珠の來由並びに所在に關しては既に佛典に於て諸説が生じてゐる。或は佛舍利の變じて爲るとなすもの「大智度論」(卷一〇・卷三五)、帝釋の金剛の碎片となすもの(同、卷三五)、衆生福德因縁の故に自然に生ずとなすもの(同、卷三五・卷五八)、而して其の所在も、雪山中の寶山の頂とする説(同、卷二二)もあるが、一般には大海の中に在ると考へられてゐるのが普通のやうである。其の同じ大海の中でも、摩竭大魚の腦中から出た金剛堅がそれであると

いひ『雜寶藏經』卷七、波羅門以如意珠施佛出家得道緣、或は金翅鳥の内心が變じて爲つたものとなし『佛說觀佛三昧海經』卷一、六臂品第二、或は龍王の腦中から出たと説く『大智度論』卷五九。然し大海の龍王の宮の至寶と見做されてゐる考は最も普遍的なもののやうに思はれる。所謂大施太子の龍宮行の目的は即ち此の珠に在るので『寶物集』第一、玉寶たる沙汰の事、『三國傳記』卷九、第四、大施太子到龍宮、乞如意珠事、謠曲『太世太子』、能施・大意等人名の上に、又多少説話の上に異傳はあるが、釋尊の本生譚式説話として『大智度論』(卷一二・卷三五)や『佛說大意經』やに見える有名な因縁譚である。

日本の如意寶珠傳説

我が國の傳説界でも此の影響を受けて、海中、就中龍宮説が常識になつてゐるやうである。神功皇后がそれを獲給うたのも海中であり、『書紀』卷八、仲哀紀、平等院の僧正行尊が夢に到つて之を得たのも龍宮であり、『古今著聞集』卷二、釋教第二、波羅門僧正に難船を救はれて來朝した唐土の佛鐵和尚が奪らうとしたのも龍王の至寶のそれで、失敗して風波に悩まされたのは海上であつた『三國傳記』卷四、第二九、佛鐵和尚事。玉取傳説(謠曲『海士』、舞曲『大威冠』)の龍宮から奪還す名玉は所謂如意寶珠ではないが、此の傳説の發生進展に、龍王が如意珠を寶とするといふ思想が根柢をなすことを否み難く、依藤太が龍宮城から齎し歸つた「頸結ひたる依」(『太平記』卷一五、三井寺合戰並當寺撞鐘事附倭藤太事)は、即ち明らかに如意寶珠の變形である。海幸山幸の神話(『記』上卷『紀』神代卷下)の海神が捧げた干満の兩珠も亦恐らく所謂如意寶珠の轉化であらう。勿論一種の如意寶珠たるや改めて説くまでもない。なほ我が國でも

「喜見城の内には金剛藏に納めつゝ、龍宮城の内には淨瑠璃壇にあがむとや。目出度かりける寶珠の徳かなやれ〜」(『延年唱歌』白拍子)

のやうに、帝釋の所有をも併せ認めようとする心持もないことはない。民間の口碑では種々の形に展開してをり、又打出の小槌と變形(或は合體)して大黒神或は鬼の寶物となつてゐるのを看るのである。(四五頁「かくれざと」考説(素材)の項参照)、同種の如意寶珠たる隱囊・隱笠とも類縁が結ばれてゐる。

辨才天と如意寶珠

辨才天女と龍神及び如意寶珠との關係も究鑿して其の緣由を辿り得る。即ち江島の辨才天は往昔五頭龍といつた大惡蛇であつた今の龍の口明神と夫妻であり、『江島緣起』謠曲『江島』江島童子、謠曲『江島』では、其の天女の手から如意寶珠は勅使に捧げられる。天女と龍神とが諸共に出現して勅使を導き迎へるのは謠曲『竹生島』が既にさうである。その竹生島の辨才天と如意珠との由縁も、天台慈惠大師の興したといふ六蓮花會の儀式に關聯して『竹生島緣起』が次のやうに語つてゐる。

「仍此島大辨才天化現也。奇瑞惟多。斯會之儀式者、造大島嚴船於海中而祭之。後切破入海中。是則金翅鳥沒後、彼鳥心願入海中、成如意寶珠。願龍收領下、降雨七珍萬寶、於一切事、除怖畏念難意也。(下略)」

右の記述では金翅鳥の心臟説を探り、而もそれが龍王の所有に歸した形に於て肯定してゐるを看る。同緣起の、大鱸に變じて島を七匠し、主神及び七所の神子載せてゐたといふ大海龍が謠曲『竹生島』の「下界の龍神」なのでもあらうし、亦此の珠の守護者なのでもあらう。

宇賀と如意

否辨才天と如意寶珠との結合は、必ずしも間接に龍神の仲介のみを俟つに及ばないのである。これに習合せられた宇賀神(豐字氣姫命)即ち稻荷神が一方に於て摩尼珠を尾端に載せた神使の赤白狐を驅使する他面に於て、八臂の天女として其の左の第一臂手に寶珠を持ち、頭上の寶冠中に白蛇の姿を藏し、大蛇身と現すれば最早殆ど龍女と擇ぶ所は無い。變成男子の龍女は即ち八大龍王の隨一婆娑羅龍王の女、これが世尊に獻つたのは「價值三千

大千世界」の寶珠であつた。『法華經』卷五、提婆達多品第一二。龍女に説明を借りずとも、字賀に合一して、字賀翻如意也』とは『鹿王禪院如意寶珠記』の説く所「佛說最勝護國字賀耶頓得如意寶珠陀羅尼經」の名にも字賀神將の妙音天女と此の靈寶玉とは切り離すことの出来ない關係の結ばれてゐることが知られる。偽經であつても、却つてそれだけ此の傳説的迷信的觀念の進展を考察するには好資料である。六寸の白蛇と現じて影向せられた字賀大明神を『三國傳記』の撰者沙彌玄棟は

大辨才天如意珠王

「是、大辨才天如意珠王ト申ス也」

と釋してゐる。(卷四、「第一五」江州佐野郡宇賀大明神御影向書事」參照)

八 本據としての印度説話 以上部分的の素材に就て考察したが、なほ最後に、略、全説話の形態の具はつた、本據とも見做され得べき一二の印度説話並に其の類話の事を述べねばならぬ。『私聚百因緣集』(卷二「八」)に「堅陀羅國貧女」事といふ一傳説が載つてゐる。「言語集」云々」として収録してあるが、これが甚だ本書の説話に類似してゐる。

私聚百因緣集の印度説話
堅陀羅國の孝子傳説——身寶、身誓の生贊——念佛の奇特

天竺堅陀羅國に老母と一子とを抱へ、乞食して漸く三人の糊口を支へてゐる貧女があつた。其の一子なる心も貌も美しい童子が成長して十二歳になつた年の夏の末であつた。つくづくと思ひ入つた童子は、これまでの養育の恩に報い、且生活を助けようと健氣にも決心して、母の里へ物を乞に出た留守に門前を通る人買に身を五百兩に賣つたのである。祖母に身の代を渡し、事情を述べて出で去らうとするのを、祖母は驚き悲しみ、袖をとらへてやらじと泣く。童子も離れ難なの思であるが、人買共に急ぎ立てられて伴ひ行かれた跡へ、貧女は歸宅して夢かと涙にくれた。然し我が乞食も母への孝養、童子が身寶も亦母なる我への孝養、佛天の憫無くて叶

はじと心を勵まして老母を慰めかしづいた。

一方童子は同國第一の長者曇摩訶の許へ伴はれた。それは、恐しや此の國の西北に在る大池水に棲んで四季の始毎に國內の眉目よき十歳以上十五歳以下の男女を生贖に求める大黒蛇の人身御供として、かの長者の一人の愛女に代らせられる爲であつたのである。其の日が来た。

「高峯欄ヲ池東ノ岸カキテ、童子被ニ赤物、向ニ池最中ニ居。長者使、宣旨使、并大池池守等、向ニ黒蛇池邊カラス向岡ナラヒキテ見事ニテ有ケル」

童子は觀念して、母が毎夜唱へるのを聞き覚えてゐた「南無阿彌陀佛」の名號を高聲に申しながら後世の誓を如來に泣く泣く訴へ上げると、不思議や迫り來つた大蛇の邪見の眼から血の涙が流れ、燒身の炎熱頓に滅し、却つて童子に感謝を捧げ、七日の内に人身を得ん歡び、自今生贖を止むべき事を告げて黒蛇は池底に没し去つた。

「子ノ時忽然トシテ天有ニ靈雲靈光靈聲、唱、偶云、孝養善男女、佛天皆隨喜、現能息貧苦、當生諸佛家云々。大池並高峯欄邊照、天華雨」

童子は長者の女に配して「天下第一長者家」を繼ぎ、帝から小國に封ぜられ、祖母・母は迎へ取られて孝養の限りを盡くされ、童子は後終に大臣に昇つたといふ。

これがその大要である。男女の性の差はあるが、そして稱名と法華の違ひはあるが、本書の主要な部分と殆ど全く同じ説話になつてゐる。(前に擧げた謠曲「池贖」とも素材上或は何等か關係があるかも知れないが、本書ほどではない。かなり離れてゐる。別箇の地方的口碑としても不自然ではない)

又同じ「百因緣集」の右と類話(或は同一傳説かも知れない)をなす善見童子の傳説及び寶明童子の傳説があるがこれは更に後に説くことにする。

やはり印度説話として、池中の中島の蛇王が法華經の功力で蛇身を免れて佛道に歸した物語が「三國傳記」(卷八)に見えることは前に一言した。これは長者譚式難題説話でもあり、因緣譚でもある。本書との關係は無理に想測される必要はないが、類話として一顧して置くことにする。

唯前掲の諸説話では、本書後段の構想の素材となるべき部分を缺いてゐる。而も此の構想は前記堅陀羅國貧童の孝行譚の中に既に暗示せられてゐると言ふ事が出来る。それは同條の結に

「大經上云、神力以テ演大光、普照無際土、消除三垢冥、廣濟衆厄難、開彼智慧眼、滅此昏盲闇、閉塞諸惡道、通達善趣門、已上」

とある文である。そのみでない、其の構想を展げるに甚だ都合よい具體的の例話を、又同じ「百因緣集」が提供してゐる。

それは卷三「一七」專童子ノ事孝養名號ト云事の靈驗譚である。やはり印度説話で孝行譚で念佛禮讚説話である。昔天竺香喜國に專童子といふ美少年があつた。幼にして母を喪ひ、貧苦の中にも老いて明を失つた父に仕へて孝心篤く、偶、大飢饉に際會して慈善の長者妙法の家に入八萬四千人の施行があると聞き、老父の手を引いて來て衣食の施を受けたが、父の盲目を悲しむの餘り、俄に心に大願を發し、若し父の明を復することが叶うたらば、已れ富貴を得ん日、今日の長者のやうに慈悲を本として萬僧供養を營まうと誓ひ畢ると其のまゝ、悶絕して死んだ。而も此の至孝は佛天を動かし、冥府の炎(閻)王は童子を再び此の世に送り還す旨を宣し、且「授

彌陀名號として

「此法即釋迦如來一代已證珍寶、彌陀世尊萬德所歸、良藥也。出離生死門、萬行萬善之財寶、納如意珠、婆娑三毒家ニハ除業煩惱之病、良藥也。汝深可奉持」

と訓へらるゝと思へば、忽然として蘇生した。愛兒の骸を抱へて餘所の見る目も哀れに號叫してゐた老父の驚喜。否、喜は之に止まらず、童子が唱へ上げた「南無阿彌陀佛」の尊い御名に、思はず聲を合せて盲人の眼は、忽ち開いて再び此の世の光を見たのである。目のあたりなる名號の奇特と童子が孝心に感じ打たれた長者は、富貴の家を童子に譲つて一向に菩提の道へ赴いた。妙法には子が無かつたのであつた。扱童子の新長者はやがて刺史となり、孝養意に任せ、常に慈を施し、彌陀の信仰に專念した。現世安穩、後生善所、「此則報恩之力、念佛之功」である。

もとより本書の説話とは形式に於て全然は同じでない。而もこれは比喩の如意珠の奇特であり、又童子の再生は同時に或意味での親子の再會でもある。主題に至つては本書と異なるところはないのである。

如上述へ來つた印度説話が恐らく本書内容の本據であらうことは、其の梗概を比較しただけでも想像し得られるところであるが、併しながらこれらの説話が本書の直接の素材であるか如何かといふことは、今俄に斷じ難いものがある。それは次項に於て更に改めて考究せられねばならない問題があるからである。

【構想・表現】 辨才天女の本地を説かうとする佛法物語であるのは一であるが、前の「おもかけ物語」とは構想も主題も違ふ上に、筆觸が亦全然別箇の感じを出してゐる。

彼は童話的、此は傳説的、彼が佛教化せられた童話心から生れた物語と言へるなら、此は同様に佛教的着色を

人買と道行

謡曲の狂女物
及び親子の再
會

加へられた、或は佛説に根ざしを置く傳説の作品化と言へる。彼は愛を主題とし、此は孝を主題とする。併し一方が單純な性愛でなくて、佛教精神の濾過を経たそれであるに對して、他も單純な孝でなくて、同じく佛教的に意味づけられた孝である。而も彼にあつては信の讚美以上に遍歴の説話的興味が主となつてをり、此は經、法の奇蹟的な靈力が稱へられて孝道は寧ろ其の機縁に過ぎぬのみか甚だしく形式的である。否必竟説話としての湖沼大蛇傳説に絡まる集合傳説の面白味が主である。生贖物語は素材に於て既に中心説話であつたらうが、人買に伴はれての道行を作者がかなり力を入れて寫してゐるのは輕視することは出来ない。乞丐盲母との邂逅も素材が既にさうであつたのかも知れないが、なほ謡曲の狂女物、及び其の中での(例へば『三井寺』『百萬』『柏崎』等)、又さうでなくても(例へば『木賊』『弱法師』等)の親子再會の類型的な構想なり場面なりに親しみを持つ讀者の心持を作者が利用しようとしてゐることは明らかである。稍うるさい感すらある人蛇の素性の人柱傳説それに關聯した續子傳説及び人買傳説も、湖沼傳説の一口碑としては寧ろ自然であり、又さういふ素材を其の儘に採入れたのとも看られるが、それに對して何等の意圖を加へなかつた處にも(或は作者が創つたのであるとすれば一層)却つて作者の或用意が窺はれるやうに思はれる。本地の説き明かしが少しく突飛に過ぎ餘りに傳會に過ぐる感があるが、(さよ姫と竹生島との間に何等の聯想も起らない。後に説く異本ならば生贖が瀬田の橋での事であるから緣由はある)『嚴島御本地』の嚴島の大ごんぜんあしびきの宮が天竺さいせう(西域)國のてんいち、王の三女で、本地大日如来であつたり、舞曲『築島』の經島の人柱供養に二十九人の身替になつた清盛の童松王がこれ亦大日の化身であつたり(この舞曲も本書の種類の物としても注意せられ得る)、信濃の懶惰者物奥太郎すらすらおたがの大明神なのであるから『物奥太郎』も『おたぎの本地』如何に天外的の思ひよりであつても毫も妨げない。若し如意寶珠によつて

本地の説明

ごんかの太夫
の性格

竹生島との連絡が附けられてあるのだとすれば、却つて作者の構想の苦心とも言へば言へる。兎も角も作者の心理も讀者の心理も、時代意識を正しく映寫してゐる此の鏡の面に興味深く投影してゐる。

『おもかけ物語』に比して構想も複雑であり、人物の描寫も進んでゐる。さよ姫なり母なりごんかの太夫夫妻なり、人蛇なり、兎も角も性格描寫らしいものが施されてゐる。勿論類型的ではあるが、其の中でごんかの太夫だけ一寸面白い人物に取扱はれてゐる。他の人々よりは稍複雑な性格に寫されようとしてゐるやうであるが、これは或は人買といふ者の類型的な性格行爲をも唯慣習的に併せて採り込まうとしたが爲に却つてかうした形になつた意味もあるのではないかと思はれる。孝心を感賞する心持と母子を強制して引離し、足弱に答を當ててさいなむ行動、情を知らぬではなくて態と冷酷を努める心情、我が子を助けるために人の子を残す自己本位の慾望、腹からの極悪人ではないが全く利己的な長者氣質、作者にもう少しはつきりした創作意識があつたら、そして此の人物に興味を感じることが出来たら、又別な主題が生れたであらう。

此の性格の分裂から来る複雑さは恐らく作者のはつきりとは意識してゐないところであらうが、菩提の爲の身賣といふ宗教に淫した形式孝道を完美することに獻身する女主人公を稱へる一方に於て、

「これは夢みや現みや。扱も御身はさやうの情なき事し給ふみや。先だつ父の菩提を申ふ事はさる事なれども、此世に未だ生き残りたる母が身に、思ひをわけ心をいたまじむる事、これ孝行といふべしや。冥途の父は親にて、此世の母は親にてなきかとよ。あら情なの姫が心や」(本輯一三五頁)

と歎きの聲を上げさせて、それを「母の心ぞ理なる」と同感してゐるところにも、母の身の上に讀者の同情を集める爲ではあるが、そして分裂した局部的感激の表現であるが、全説話の主題である大切な教に我知らず反逆の情

刃を向けてゐて、其處に盲信的な時代思潮の中に目ざめようとしてゐる人間的な疑惑・自覺が不用意に皮肉にも曝露されてゐる。

大體に於て説話としては先づよく纏まつてをり、(素材として既に全説話が略形をなしてゐたのかも知れない。又後に説く『法妙童子』の翻案でもあれば、其の點は餘程減殺することにならねばならないが、さうすれば別様の意味で、即ち粉本よりも構想が日本化・地方傳説化してゐると言ふ事が注目される。それはなほ後に説く。)詞章だけに就て言つても、『おもかけ』ほど拙劣ではない。それに比べればかなり餘裕と潤のある表現である。ちりほうさん」でも「さる澤」でも少し無理ではあるが「竹取」式の趣味で、素材としての地方傳説としても許されようし、作者の拙い落とも觀られ得、話説に興味を添へようと企圖した點では一である。又粉本としてでなくとも、類作としての『法妙童子』の詞章の稚拙なのに比しても、本書の方が遙にいい。

さて本書の構想を論究する上になほ逸してならない種類の一作品がある。場合によつてはそれが本書の主要な粉本として素材の側からも重視せられねばならぬ事にもなり得る。それは即ち今述べた『法妙童子』である。『近古小説解題』(一九三頁)に、本書を目して、

「結構あめわがみ、物語及び法妙童子に似たるところあり」

と指摘してゐるのは、未見の作品の簡単な梗概を通しての推測であるけれども、よく中つてゐる。但し「あめわかみ」物語といふのは、『室町時代小説集』所収の『天稚彦物語』(日本文藝大系)の方で、一名を「たなばた」とも呼ばれてゐる所謂「別本天わか彦物語」(二九—三三頁に載す)の方を指してゐるのではないのであらうが、それは長者の乙娘が大蛇の生贄に供はるといふだけの類似で、而も必ずしも本書と結びつけて考へねばならないほどのもので

法妙童子

なく、さして問題とするに及ばないが、『法妙童子』との關係は決して單なる偶合とのみは見流して置けないやうに思はれる。『解題』に掲げてある『延齡涉獵書目』本(「原本並所在」の項参照)よりも、本輯所収のものに於て一層然るを看るのである。

『法妙童子』は三巻本と二巻本とがあり、『近古小説年表』(四二頁・四四頁、近代篇、假名草紙)によれば、寛文六年松會開板(三巻)、同八年足立三郎兵衛開板(二巻)、及び「鱗形屋より中本一冊として三版」とあるが、他に巻末に記載の無い刊本(三巻)、『近古小説解題』(三九四頁)には「萬治頃の刊本とおぼし」と推定してある。舊東京帝國大學附屬圖書館藏本を指してゐるかと思はれるが、大震災で焼失した、正徳三年西村屋傳兵衛板(二巻、舊藏亭文庫藏)等も管見に入つてゐる。古く寫本としても行はれたらうと思ふが(但し古寫本の傳存不明)、其の内容の大筋は、

昔、五天竺の内、はらなひ(波羅奈)國に無道の暴君があり、此の王殊に念佛を惡んで國中に嚴禁し、犯す者は殺すべき旨の命令が下つた。

茲に五天竺に三人と數へられる同國だんびり(檀思利)長者の一人千八歳の正月、其の類に餌食といふ文字の現れた不祥は、りやうあんのしらたきかつよといふ窟の神事の生贄に選ばれたのである。長者夫婦の愕き歎きいふばかりなく、三七日窟に祈つて漸く身替の許を得、家臣りうこう諸國を廻つて年齢容貌の相似た者を搜めた。

舍衛國に名ある武人で主の爲戦死した高六といふ者の妻子、今は落魄して、母は市中に食を乞ひ、童子の法妙は山に柴を拾ひ、辛うじて命を繋いでゐる折柄、偶々廻り來たりうこうに、母の留守を幸ひ、今年八歳の法妙は百金に代へて身を賣つた。歸つて來た母は悲歎の餘り狂せんとし、遂に戀しさに眼を泣き潰し、「此頃母に

かくして身を賣りし法妙童子やまします」と竹杖をたよりに諸方を尋ね廻つては、里の子等に「童子めくら」と嘲弄せられる見すばらしい乞食姿になり下つてしまつた。

長者の許に買はれて行つた法妙は、當日彌宜神主等形の如くの神事あつて愈、身替の生贖に供へられたが、思ひ餘つて唱へる童子が「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖教、皆是阿彌陀佛」の聲に忝や諸佛來迎あり、童子を食はうとした八頭の大蛇は忽ち十六の角折れ、身を翻へすよと見るまに、十七八歳の男子となり、童子の前に畏つた。如何なる罪業にや大蛇となり、人を服すること九百九十九人。今千人に當つて君が念佛の功力に佛果を得る有難さよと涙を流して禮し、君も早々故郷に歸り給へと告げて、菩薩に迎へられつゝ、光明を放つて西方淨土に飛去つた。

不思議に命助かつた法妙には、福祉彌が上に重なつた。檀毘利長者は之を嫡子としてかしづき、次子とした實子と兩人に家産を等分に譲ることになつたが、更にかの悪王の叡聞に達するに及んで、王は俄に改心して念佛を勧めるやうになつたばかりか、童子はやがて王位を禪られるに至つた。全く孝行の徳と稱名の奇特である。

新君の法妙新王は今萬乗の位に昇るにつけても母上の事忘れ難く、遍く搜めさせて漸く尋ね出し、行幸あつて再會を遂げ、宮中に迎へて孝養を盡し、其の後尼になし奉り、内裏に近く寺を建て、供養には阿難・迦葉・富婁那の尊者達を招じ、親王みづから母の爲に如來に歎き祈られた孝心に感應あつて、潰れた母の尼君の兩眼忽ちに開けば、貴賤男女悉く隨喜の涙を流した。

といふのである。童子と姫、念佛と法華、岩窟と深淵を取替へただけで、中心の事件として語られてゐる身替人身御供説話は殆ど全く同じである。盲母との再會、其の眼の開く佛驗も形の上の少異を除いて全く軌を一にして

法妙童子と本書

る。本書と右の小説と、何れかが一方の翻案であるべきことは疑ないものやうに考へられる。

法妙童子の物語の本據
百因緣集の寶明童子傳説

法妙童子の孝行譚の佛典の本據は未だ勘へるに暨ばないが、日本の説話集では前に引いた「私聚百因緣集」(卷一、二〇)に「寶明童子事附孝與念佛云事也」として出てゐる。即ち

「傳云。寶明唱十音、シカハ、免鬼害、昇帝位云々」

と記して、舍衛國の貧童子の身賣生贖譚が語られてゐる。けれども、これが其のまゝ、「法妙童子」の素材であるといふわけにはいかない。此の傳説は

「大旨如善見童子因緣云々」

と同條の結語にある通り、恐らく善見童子の傳説と同一の本據から出てゐるものと推測せられ得るが、其の善見童子の因緣譚も同書(卷三、四)善見童子ノ事附親子悲名號德用云事)に載せて少異の他殆ど同談である。而も寶明の傳説よりも稍詳しく、そして「法妙童子」の構想及び詞章に寧ろ近いところもある。例へば、鬼王の棲處が石室であり、名號の力によつて「頭上十二角皆落」又帝位を讓られて後

「昔名不捨號白善見天皇也」

とあるのは、即位の後「ほうめう新王」と呼ばれたのと同巧である。やはり舍衛國に近い非佛法國での事になつてをり、又生贖に供はる途に童子の伯父の沙門に逢ふことがあるのは、本筋に觸れないので梗概には略したけれども、乞食の母に途に出逢つて同情する一僧侶に相當してゐる。唯此の傳説では、身替でないのと、唱名者が父母であるのが著しい異點である。「法妙童子」でも餌食に定められた愛子の爲に父母が魔神に歎訴することはある。其の點は生年九歳にして、母が里へ物乞に出た間に身を錢に代へ、又長者の一子に替つて生贖となり、且自

同書の善見童子傳説

ら念佛十唱して鬼王を驚喜させた寶明の傳に大略一致してゐる。

更に、右二話をもつと詳しくしたやうな、そして又『法妙童子』にもつと近いやうなのは、前に述べたやはり同じ『百因緣集』(卷二)の堅陀羅國の孝子の身替生贖譚である。(或はこれも善見傳説の一變形又は異傳かとも思はれるが)。たゞこれに在つては、前にも述べたやうに、母の他に老祖母があり、又結末は身替の正身たる曇摩訶長者の一女と婚して天下第一の長者の家を繼ぐのと、それに魔神が大池の大黒蛇であるのが主な相違の條件である。併し、魔神が大蛇であるのと、法妙が王位に即く前に一度長者の家を繼いで實子(男)と家産を配分せられるのは、寶明・善見兩者の傳になくして却つてこれに恰當するのである。

又これも同じく前に『さよひめ』の素材を論ずるについて一應考察した、そしてやはり同書(卷三)の專童子の傳説であるが、親子の邂逅ではないけれども

「老父盲目ナル上、死シタル童子拘テ叫、見者流シ涙不哀ト云ナシ。然童子活ヘリテ先南無阿彌陀佛唱。生活シテ念佛スルチ父聞テ歡喜シテ身毛爲堅、共稱佛名、刹忽開、盲目。其日大會奇特只此事ノミナリ。諸人はチ聞、モノ孝養無雙、專童子頓死シテ生活、忽老父盲眼、開ナルト云アイケル」

といふので、孝養と稱名の奇特とは『法妙童子』と同斷である。如意寶珠の靈力そのものではないが、如意珠と比ぶべき法ぞと炎(闍)王に説き示された念佛の功で、『法妙童子』との距離は此の點でも亦『さよひめ』より近接してゐると言へる。そしてこれでも長者の家を譲られてゐる。

然らば以上の諸説話が『法妙童子』の作者に素材を提供して、法妙童子の物語は出来上つたと看ることが可能となるのである。

其の他念佛の功力、孝徳の善報を説き稱へる例話は、間接資料としてならば、同じ『百因緣集』の中からすら幾らも擧げられ得るが、以上の諸説話ほどに此の法妙童子の物語に親近な關係が想測されないから措くことにする。又、單に佛力で盲眼の開いた話だけなら、是も多い。既に『靈異記』(卷下、第一・第二・第二二話)などにもある。

茲で又考ふべき事は、『法妙童子』が作られるに際して、直接『百因緣集』所載の説話が素材となつたかは猶辨察を要する問題である事である。盲母との再會、その癒盲は假に作者の添加した構想であるとしても、亦「寶明童子」(刊本の本文は「ほうめう」とあるから「法妙」の文字に拘泥する必要はない。「法明」と死んでゐるものも在る)の他、人名地名に異同があるとしても格別の問題ではないが、生贖の供へられる魔神が、寶明童子傳説にしても善見童子傳説にしても、大蛇ではなくて「大鬼王」である事は等閑視出来ない事であると思ふ。若し『百因緣集』の所傳を素材としたとすれば、此の點だけ何故に作者が改めねばならなかつたかが疑問である。今試に臆測すれば

(一) 假に『百因緣集』が直接素材であつたとすれば、類話である堅陀羅國の孝子の傳説の方が詳細で且興味が多いところから借りて、その祖母だけを除去し、魔神は大蛇のまゝにして鬼王に替へ、寶明乃至善見の生贖譚を潤色したと見るべきこととなる。(そして流石に池中の神事のまゝとはせず、善見傳説の石室にしたといふことになる)。さすれば盲母を救ひ癒す末段も、前に説いた專童子の傳説から示唆を得て、謠曲風の場面を利用したことになる。施行の長者の名妙法を轉倒すれば其のまゝ、法妙である。

(二) 若し『百因緣集』との關係が直接でないとすれば、又二つの主な場合が想像せられる。即ち一は

(4) 『法妙童子』に作品化せられるまでに素材としての傳説が略、形を成してゐた場合である。それは『百因緣集』から出たであらうし、直接諸經又は傳誦的な説法に語り或は聴き、おのづと進展混融して行つた部

分もあつて、作品の内容のやうな説話が出来て来たとする場合である。そしてそれが一の草紙物語の體裁をなして書寫せられ上梓せられたと看るべき場合である。近古小説には此の種の物も少くないと思はれる。

他は
〔ロ〕『さよひめ』の方が先に成つてゐて、『法妙童子』は却つてそれから奪胎したが爲に魔神が大蛇のまゝに殘留してゐるといふ結果になつたと考へられる場合である。其の場合も實明或は善見童子傳説が説法として語り傳へられ、或は『百因緣集』類によつても傳へられてゐたのが参考せられたらうことも否まれない。

〔ハ〕延齡氏の關した寫本が若し『さよひめ』の原本であつたとして、それが刊本のやうな『法妙童子』の粉本となり、本輯底本の『さよひめ』が更に、右兩書に基づいて作られたのであるかも知れない。但し『延齡涉獵書目』本が必ず最も古いといふ確證も勿論無い。

更に又『さよひめ』『法妙童子』兩者が各、別に既に説話として展開しつゝ、あつた場合は、その展開の間に於ける相互の交錯影響種々複雑な事情が生じて來るのも勿論の事である。

そして『さよひめ』が『法妙童子』よりも早い場合は無論、後である場合でも（異本の方は構想も表現も十分に知悉し難いから、本輯底本について言ふと）、若し素材としての地方傳説との混融が自然に行はれてゐたのでなかつたとしたら、兎に角あれだけの形に融化して表現した作者の手際は、近古小説作者の中で決して凡下の方ではないと言へよう。『法妙童子』を粉本としたとすれば、大體の骨子は其のまゝであるとしても、之を一層自然に日本化し（若し地方口碑が存したとすればそれと比較的自然に融化し——或は謠曲『池費』又は『百因緣集』の堅陀羅國中では拙劣な方では決してないといふまでである。

作品としての
さよひめ

の孝子傳説に模本が仰がれたとしても、かなりそれを離れて作者自身のものとなつてをり、こんかの太夫の興味ある性格を創作し、「童子めくら」を更に物狂の謠曲化し、又專童子が比喩の如意珠を具象化した點（若し『百因緣集』の同説話に據つたとすれば）など、御伽噺的手腕は『法妙童子』作者の比ではない。若し『法妙童子』が粉本でないであつたら、全説話の結構の點にまで右の言が及ぼされねばならない。

無論此の作は甚だ高く價值づけられねばならぬといふのではない。時代の稚蒙の心は率として抜き去り難い。又特に怪奇的な幻想なり、切實な人情美なり、無邪氣な童心なりが迫つて來るといふのでもない。唯近古小説の中では拙劣な方では決してないといふまでである。

【題 號】 女主人公の名を題號としたのであること勿論である。

『延齡涉獵書目』（近古小説解題一九三頁所引、及び『延齡』には「八三八頁『延齡』の條）には

竹生島の本地

「按ずるに竹生島の本地といへるは此書にや、猶考べし」

と見えてゐるが、『竹生島の本地』の書名の記載が何に在るか詳らかにし難い。（原本並所在の項参照）

【年 代】 不明。延齡氏の關した寫本の内容が詳細にわからないから、それと本輯所收のものとの關係が明瞭でないが、本輯の底本についてだけならば、謠曲『隅田川』『松浦物狂』（及び或は『池費』）等以後の作であることだけは言へよう。『法妙童子』も刊行は寛文に入つてからであるが、寫本が早くあつたかも知れないから、本書との先後は即断を許されない。大體室町中期以後の作として不都合はなからう。

【原本並所在】 『新日本小説年表』に

「〇さよひめ 一卷」(一四頁、古代篇、室町時代)

異本さよひめ
(延徳巻)
書目所見

と出てゐる。

『近古小説解題』(一九三頁)には「さよひめ 寫一本」として、祖父延齡氏の『涉獵書目』の文を掲げ、次に「余未だこの書を見ず」と記してある。同書目の記載は甚だ簡略であるが、本書の一本であることは確である。特に相違してゐる點は、

1 生贄に供へられる場所が瀬田の橋であること

2 大蛇が成佛の謝禮にさよひめに與へたのは金千兩であつたこと

(「姫再び家榮えて母をよく養ふ」とのみで、如意寶珠のこと、盲目の母の眼の開くことは見えない)

3 「時の帝此事をきこしめし、あら人神といはひ給ふ」。即ち竹生島の辨財天と申奉る

といふに在る。若しこれが本書の原本乃至古本であつたとすれば、素材・構想の上にも攻究すべき問題が増すこととなる事は、前にも述べた。(「構想・表現の項参照」)

京大文学部本
(本輯所収)

本輯所収のものは、『ほうらい物語』と同じく京都帝國大學文學部藏寫本、上中下三卷三冊の奈良繪入十行本で、金砂子雲形金泥草花模様紺表紙の粘葉綴本(綴六寸)、『ほうらい物語』と殆ど同體裁のものである。題簽には「さよひめ 上」「さよひめ 中」「さよひめ 下」とあり、内題、奥書は無い。

舊葎亭文庫本

舊葎亭文庫本も上中下寫三卷三冊の奈良繪入、織物表紙の粘葉綴本で、渡邊氏宅で一度覽たことがある。内容は略、同じであるが、詞章に異同がある。全巻を通讀する機会が無かつたが、上巻の冒頭は

「あふみのくにちくふしまのへんさいてんのゆらいをくはしくたつぬるに、これもひとたひは
凡夫 ばんふにておはしける。くにを申せはやまとのくに、つほさかといふ所に、まつら長しやと
大和 國 壺坂 松浦者

て、くわほう人にておはします」

といふ文になつてゐた。題簽には「さよひめ 上」とあつたと記憶する。

本書の刊本は無い。

古淨瑠璃いけ

【影 響】 江戸古淨瑠璃の杉山七郎左衛門が語つた「いけにへ」などは、所謂人身御供説話を題材としてゐるが、口碑傳説としても珍しい素材ではないから特に本書に關係を結びつける要はない。若し影響を受けてゐるとすれば、寧ろ同名の謡曲の方からであらう。

説教節三莊太夫

説教節の「三莊太夫」で今語られてゐる「鳴子唄親子對面の段」について觀れば、本書の盲母と姫の再會、佛力によつて眼の開く歡びの場面は餘りによく似てゐる(『法妙童子』にも似てゐるがそれよりも)。尤も三莊太夫の口碑が説教節にも作られると共に、他方却つて本書などに影響を與へたといふこともあり得ようし、若しさうならば逆に又本書の素材なり構想なりの上に考證せらるべき資料が増すこととなる。(『和漢三才圖會』卷六五、陸奥國、岩城山權現の條参照)

倭文庫の法名

萬亭應賀の合卷『八相倭文庫』(第五五編・第五七編)、『萬應國文庫』(第五二編)の月蓋長者の娘如是姫の身替に立てられる法名童子の生贄物語は「法妙童子」を粉本とすること無論であらうが、本書とも類縁をなすものとして序に記して置く。

はもち中將

刊上下二卷二册

嵯峨天皇の御宇、二位大納言もちとをの卿といふ人、忍んで皇女に通うた科により筑紫日向に流罪の身となつた。其の遺子に平のもりなかとといふ利根第一、才貌雙無い優男があつたが、日向國羽持の里に住んでゐたので、羽持殿と呼ばれてゐた。

同國吉田の里に三人の姫を持つた吉田の某といふ有徳の人があり、其の姫の長は日向の神主に、次は長門前司に嫁し、一際美しい乙の姫は未だ定まる夫無しと聞いたもりなかは、懇望の文を贈つてみると、父の吉田は恐悦して、富貴榮耀は何ならず、氏系圖のよからん人と思つてゐたに、流人なれども正しく大納言の御胤、その上八千町の地行の主とあれば、願ふ處の幸ひと即座に婿取を承諾した。やがて姫君の輿入りあり、比翼の契陸まじく、龜鶴・若鶴・いや(彌)鶴といふ三人の若を設けて重なる慶び、それにつけても今一度世に出て都へ歸參叶はん日もかと待たれるのである。

其の望は空しく終らなかつた。帝或時羽持が事を思ひ出され、赦免の上、三年の大番を勤めさせよとの有難い宣旨が下つたのである。日頃の願、飛立つ喜ではあるが、妻子に暫しが程も別ればならぬ悲しさに心進まぬのを、北方に諫め勵まされて、後に心を残しつゝめでたく都上りした。

空圍を守る北方は、翌年の秋夫の安穩を祈るとして、宇佐八幡へ詣つて二夜三日籠つたが、それが却つて不幸を招く機縁とならうとは誰が思ひかけよう。偶然に同じ社に參籠したのが、豊後國の住人白杵左衛門とて、此の宇佐宮の代官の婿であつたが、美しい女房を見て、羽持の妻と聞き知り、忽ち道ならぬ心を起したのである。一度は思ひ切らうとしたが、女の夫が留守を幸ひと、俄に己が妻を離別して、歸國した羽持の北方に思ひのたけを書き贈つた。けれども北方の怒に遇つて、文は其のまゝ返された。

左衛門一計を案じ、急ぎ豊前國ひしたの里に住む新太夫を召し、其の妻あんなふとて色好みの女房が羽持の北方に親

概

梗

しきを謀に頼んだ。そして驚き辭む新太夫を感嘆して承諾させてしまつた。

けれども此の計策も見事失敗に了つた。貞女兩夫に見えぬ訓を固く守つてゐる吉田の姫は、再度の艶書を手にも觸れぬのみか、天竺・本朝の戀物語の故事を並べて口説き落さうとするあんなふを却つて諭し恥しめて逐返してしまつた。

白杵は最早羽持を討取つて望を遂げる他は無いと決心し、寛治元年六月廿一日、三百餘騎をすくつて豊後國を立ち、大番果てて歸國するもりなかを途に要撃すべく、備後國福の宿に著いた。折柄都から下つて来た一商賈に問うて、羽持の歸國が來春の豫定であると知り、今更引歸しても詮なしと、其の儘都に上り、大臣について羽持に異圖ある旨を諷奏した。羽持の太郎こそ備前のひめ(一本、播磨の姫路)に京を建て、筑紫九ヶ國よりの貢物を強奪し、九州の武士を召集めて、みづから平新皇と號して威を振はん企といふ根無しことである。

帝逆鱗まし、忽ち蝦夷が島へ遠流と事定まり、羽持に親しい出羽判官とをみつ(遠光)が陳辯も其の甲斐無く、佐藤判官すみずみ(季澄)勅使として、蝦夷が島は流石に遙なれば、陸奥國和田郡三百町の所を知行すべしと嚴に申渡した。

寢耳に水の勅定、返さん言葉も泣く、羽持は傳のせい、わうすみずみといふ者に細々と妻子の上を託して、僅に四人の供を連れ、打巻れて配所への旅路に上つた。(上巻)

すみずみが歸國したとの知らせ、嬉しの便りを齎したと思ひきや、白杵が讒言に流瀆の憂目と夫の水壺、餘りの事に動願した北方は、自害して果てようとするのを、すみずみ等に諫め勵まされて漸う思ひ止まつた。

奸謀始めて成つた白杵左衛門は、はや案の内ぞと、急ぎ筑紫に歸り、羽持が館に押寄せて、姫君を迎への宣旨承つて向うたと伴つて申入れたが、思ひ設けず立ち現れたすみずみに言ひ破られ、大長刀に懼ぢて道々逃げ去つた。忠烈なすみずみは幼子い、や鶴を乳母に抱かせて北方諸共落し參らせ、龜鶴・若鶴二人の公達を豊前國彦山の阿闍梨の坊へ預け置き、今は心安しと徐に敵の寄するを待つ。案の如く重ねて襲ひ来た白杵が三千餘騎、七尺五寸の大長刀を水車に廻して奮戦したが、衆寡敵せず味方悉く討死し、おのれも城に火を懸けて腹を切らうとするところを、武運拙く捕へられた。

左衛門の面前に引出されて、北方の行方を責め問はれても實を告げる答が無い。無慙や大鏡の樟木に懸けられての拷問にも落ちれば、左衛門怒つて古木の枝に吊上げ、矢責に苦しめるのを、飽くまで敵を調戲り罵つた末、惜しや大腹股

の矢先に露と消えた。まことに臣の鑑であつた。館を落ちた北方主従は、夫の配所へと志すのであるが、足弱の慣らぬ旅に行き備み、みくにの港の船頭まきへの太夫に實情を打明けて便船を頼んだ。心から同情してくれた太夫の女房が親切に感じて小袖を脱いで與へ、便船のみが十兩の砂金まで恵まれて愈、人の情に泣き、折から懸つた左衛門の追手をも、太夫が機轉で危く船底に免れ、やがて波路遙に難波の浦に著き、更に都まで送つて来てくれた太夫と終に袂を分つた。

大津の浦の旅宿で思はぬ災難が降つて湧いた。折節著いた數多の人買共、美しい上臈を見て垂涎するにつけ込み、俄に悪心兆した亭主は、北方を十貫文に賣つてしまつたのである。夜明けて見知らぬ荒し男に引立てられて北方の驚き、悲しみ、まきへの太夫の女房が路銀にと取らせたくし十兩を出して亭主に哀願したが、貪慾無慙の癡者は、一人賣つても十兩の思はぬ儲と北叟笑んで、若君・乳母をも別れ／＼に賣渡し、せめては一緒に泣き纏る北方に耳をも貸さず人買共は三人を冷酷に引離して連れ去つた。

賣る程に買ふ程にめぐりめぐつて陸奥國和田庄に隠れない五郎太夫の手に北方は買ひ留められた。父母の菩提の爲の身賣、如何なる苦役もいとほぬと殊勝の言葉、殊更に纏くばかりの美しさに、天人・乙姫の化現かと驚き、太夫夫婦は憐み敬うて、御客人と稱してかじづいた。北方は嬉しく且は氣の毒に思ひ、座敷の掃除なりとも勤めたいとひたすらに乞ふので、さらば客人の接待に御茶の給仕を望まれ、御茶の給仕は流石に恥づかしながらと死も角語つた。けれどもこれが奇しき喜の媒にならうとは。鷹狩の歸りに主人に切に請ぜられて立寄つた賓客の前に、思ひきつて御茶を捧げて出た時に、それが戀ひ焦るゝ夫羽持殿であつたには、互に夢に夢見る心地、抱き合つて泣くより他は無かつた。

一方、いや、鶴御前は橋本の長者に買ひ取られたが、都二條中將といふ人、武藏の國司を賜はつて任に赴く途に長者の許に泊り、花を眺めてゐる美しい少人を見て、強ひて養子にと懇望し、引返して召連れ養内すれば、帝の御感淺からず、少將を賜はるとの宣旨に、養父の中將は面目を施し、二條御所にかじづいて、自身は再び武藏に下つた。

さても白袴左衛門は其後或時彦山詣をして院主の坊に宿つた。馳走の給仕に出た二人の美しい若達を、羽持の子とは知らずして、いたくめでて一人を養子にと乞うたが、院主は預かり人故心に任せぬと答へた。龜鶴兄弟も敵とは思ひ寄

られば、唯、親戀しと互に泣き口説きつゝ、給仕の疲れにまどろむ夢枕、白髮の老翁鳩の杖に纏つて現れ、今宵の客こそ敵左衛門よと告げ、父母の悲運と今は一緒に落ち合つてゐる心安さ、やがて一家再會の慶あるべきを示し、我は宇佐の宮よとて消え失せられた。

畏き神の示現に兄弟勇をなし、師の坊への養育の恩、神の訓の今宵の仇討、後々の事共まで、且謝し且頼む由を細々と一通に認め置き、互に名残の顔見合はせ、いざとて左衛門が臥所に近づき、寢入つたるを討つは死人を斬るに同じと、枕を蹴つて名告りかけつゝ起しも立てず斬り伏せ、止刀を刺して庭へ還れた。

狼藉者よと上下の騒動、不思議や兄弟が障子を開けて連れ出る時、山鳩二羽飛入つて、燈火を消したので、如法暗夜の同士討見苦しく、二人は其の隙に裏山から都をさして落ち延びたのである。

津の國山崎の邊、尊げな御社のさまに道行人に問へば、八幡宮とのことに、兄弟は急ぎ瀧の水に揃んで、禮拜少時なる折柄、立願の旨あつて参り合つたはい、や、鶴少將の一行、由緒ありげな二人を見て、再三身の業性を尋ね問ひ、茲にはじめて知る同腹の兄弟、此處にも奇縁の再會の涙、これも偏に入幡の御引合と、急ぎ二人を伴ひ歸つて奏聞申せば、神妙なりとて、父が赦免の宣旨さへ下つた嬉しさ。

兄弟三人の文が届いた時の父母の喜び泣き。げに世の中に持つべき者は子ぞと今更に感激し、夜を日に繼いで歸落あり、大津の宿の亭主は引捕へて首を刎れ、二條御所に一家再び歡會を遂げ、それより父子四人参内して觀感にあづかり、羽持は豊前守に任じて本國日向を賜はり、嫡子は肥前、二男は豊後、三男少將は筑前に封ぜられた。和田庄の五郎太夫夫婦へは使が立つて砂金千兩與へられ、所知入の途にみくにの港のまきへ、太夫夫婦は召出されて、これも砂金千兩にさまさまの裝束を當座の褒美として下され、なほも知行の主に取立てようと約せられた。かくてめでたく入國あつて、一門富貴の家と榮えた。

唯、人の實は子に優るものは無い。三人の若君故、又もや世に出られたと感ぜぬ人はなかつたといふ。(下巻)

【性質】 冤罪の流人が其の三子の働きによつて恥を雪ぎ怨を復し、再び家門繁榮する物語である。武勇譚

でもあり、孝行譚でもある。そして敵討物でもある。敵役あり忠臣あり美人あり勇少年あり公卿あり沙門あり、情ある船頭あれば貪婪な亭主あり、邪怪な商人あれば親切な買主あり、人妻への横戀慕、叶はぬ意趣晴らしの譚奏、流罪・道行、老臣の忠死、一家の離散・艱苦、敵討、めぐり會ひ、大團圓といふ此の種物語の定型の構想で、かなり勸懲の色彩を帯び、『まんじゆのまへ』と共に舞曲及び古淨瑠璃型の作品といふことが出来よう。結局

子寶

「世の中を持つべきものは子なり」(本輯一九三頁)

これが此の小説の主題で、此の諺のもつ精神・意義を謳歌し、それを事實として證し語らうとしてゐるのである。筑紫不知火の國から遙々と尋ね來た一子の恩愛の切なさにもつべき物は子にて候」と感動するのは謡曲『苅萱』のシテ、小太郎が御身替に苦肉の忠節を全うし得た悲喜の涙を此の語に託するのは『寺子屋』の松王夫婦、境遇・事情は各、異なるものがあるが、同じ語によつて結びつけられてゐる此の心持は全く共通してゐる。もとより「たゞ、人の寶は子なりけり」(一九五頁)と繰返し歎稱し、又「まんじゆのまへ」のかね村も「扱人間の寶には子にましたる寶も候はず」(一九九頁)と誇るのは、『寶物集』(卷一、玉寶たる沙汰の事)の

「されば玉も無益に侍り。只人の身には子に過ぎたる寶なし」

の訓などの繼承であらうが、其の玉も銀も將た黄金も何せむと叫んだ萬葉詩人の絶唱は、實に美しい親子愛の直截眞實な表白の典型辭であると共に、又此の思想展開の淵源——少くとも最も主要な動力——としても考へられねばならない。

例によつて神明の加護、老翁と現じての夢想があるが、これは武勇の神宇佐八幡で、三兄弟の會が亦石清水

八幡宮の社頭である。

なほ曾我傳説の影響(刊本に於て特に著しい)、人買の習俗、寺稚兒の修學、或は

「氏のよからん人もがな。婿に取らん」(一六〇頁)

「富貴榮耀は何かせん。系圖よからん人もがな」(同)

と望む吉田の詞、

「我が朝の業平は大日の化身なりしが、齋宮を犯し給ひし科により、長く惡道には墮ち給へ」(一六八頁)

と論ず羽持の北方の詞にも、時代の影と其の思潮の一端とが遺憾なく現れてゐる。

【素材並構想・表現】 上巻では、羽持が上洛の留守中に其の北方を見初めた白杵が、己の慾望を満さんが爲に廻らす策謀のいろ／＼が主として語られ、下巻では、前段がすゑざねの忠烈、中段が北方母子の流離、夫婦の邂逅、後段が敵討と一家の再會、昌榮が述べられてゐる。素材としての傳説らしいものがあつたらしく思はれない。作者の創意に成るものであらう。

代
説話内容の年

ところで、近古小説の常軌に漏れず作者の歴史的及び地理的觀念の餘りに亂暴なのが先づ目につく。嵯峨天皇の御宇の流人二位大納言の子が堀河天皇の朝の寛治元年に大番を勤めるといふのでは、其の年代の懸け離れ方が問題にもならない。寛治の年號に捉はれずに考へるとしても、僞内裏の威を耀かした將門の亂以前には、如何にしても溯らせられまいから、天慶以後といふことになるが、それでも嵯峨天皇の朝からは百二十年前後の経過を見、それから又寛治まで約百五十年といふ計算になる。どちらにしても、記載の史的資料のまゝでは辯護が出来ない。寧ろ謀叛の譚構の、羽持が新京を建てて「平新皇」と號する企といふ一句に、却つて愛すべき作者の姿を思

平新皇

説話中の地名
(はもちとみ
くに)

ひ浮べしめられる。否作者の無邪気さは、羽持を赦免して大番勤に召された帝が即ち其の父を筑紫に流し給うた同じ主上でおはしますやうなので、もう十分である。物語の内容の年代としてはそれで矛盾がなくなると同時に、天慶の亂との時代錯誤などは最早問ふところでは無くなつてしまふ。大番も嵯峨天皇では少し上り過ぎる。

年代が斯うであるから、地理の方も疑はれて来る。日向國には、もちと舊名を呼んだ地が在るか如何かを聞かぬが、佐渡國には「羽茂(佐渡郡)」といふ地名が在る。本間の一族が住んでゐて「羽持殿」と稱せられてゐた。(『大日本地名辭書』二一八頁、佐渡國羽茂參照)本書の作者は唯ふと此の名を轉借したと臆測しては不當であらうか。それは羽持の北方が白杵の毒牙を免れようと、いや、鶴・乳母諸共館を落ちて著いた港がみくにの港で、これが都への途でなければならぬのみならず、追手が程なく迫るのであるから日向の國內か、隣國でもありさうに見えて、恰當の港名に逢著し得ない代りに、却つて有名な越前の船津(三國港)を想起させられると併せて、此の想像を益、可能ならしめる氣がする。「はもち」は刊本では假字であるが、寫本(京大國文本)には「羽持」と明記した箇處が在るので一層此の考が強められて来るし、人買の冷酷が母子主従を無慙に引離す場面に必ずや聯想せられ或は粉本をも與へたらうところの安壽・對王傳説の留存する佐渡若しくは其の方面の地名が流入して来たとしても唐突ではないとも言へる。そして右の臆測は、兩地名が日向地方に存在するとしても、作者がそれを知つてゐて用ゐたといふ事の明證が無い限り、やはり敢へてすることを許されるであらう。

構想の上に特に注意せられるのは曾我傳説の影響である。近古以來、流行の敵討そのものが既に曾我兄弟の復讐事件を搖籃としてをり、敵討文學が其の史實・傳説及び之を内容とする『曾我物語』を淵藪としてゐるのは改めて説くまでもないが、本書に於ては特に直接『曾我物語』(特に流布本)に擬してゐることを明らかに看取し得る。

安壽・對王傳説

曾我傳説乃至曾我物語の影

即ち彦山院主の坊で敵との不慮の對面に、箱根詣の頼朝に隨從した祐經と箱王との面會(『曾我物語』卷四「箱王祐經に遭ひし事」を、師の坊への暇乞の遺書に見物語の片鱗と共に曾我中村なる母への文(『曾我物語』卷九「曾我へ文書きし事」を聯想させる。いざ打立つとて互に名残に顔を見合ふこと(『曾我物語』卷九「兄弟出て立つ事」參照)、敵に近づきおふせて討たうとしたが、寢入つたまゝに討つは死人を斬るに同じとて枕を蹴つて名告りかけること(『曾我物語』卷九「祐經討ちし事」參照)に至つては全く粉本通りである。兄弟二人であるのも、敵の名が左衛門(尉)であることも誂へ向である。但しこれは刊本の構想に於て特に然うである。(敵討物としての曾我傳説乃至『曾我物語』の影響は、寫本でも同一である。寫本に就ては後に述べる)

又、謠舞曲の曾我物も間接に幫助してゐると看することも無論可能である。

八幡神の冥助は、其の事實・形式共に珍しきもないが、平姓の人の護り神では少し筋違ひの氣味がある。敵討の賜物か、それとも事の起りが其の社參の折節の見初からといふのであつてみれば、此の邪淫と奸謀とを默過して悲惨な命運を不慮に一家の上に招來した大菩薩も、責任の一半を負はされねばならぬ役廻に當るのも止むを得ない筈である。其の神使の鳩の奇瑞は、これもいつもながらの事で、附随せぬ方が却つて不思議な位であらうが、偶然か本書に用ゐられたと同じ年號の出來事として、義家に關する記事が『古事談』(第四、勇士)に見える。

「寛治五年八月十四日、義家朝臣許に有山鳩、居於渡殿欄上。義家成恐出拜。鳩更入寢屋中、居長押上、自口中落椋實三粒而死去畢。義家云、是八幡御使歟。近無可有慶賀之事。定凶事歟。仍以銀劍一腰・駿馬一疋、十五日曉使助道・惟貞等奉八幡云々」

土肥の杉山の伏木隠れ(卷二)、壇の浦の瑞祥(卷四三)いづれも『盛衰記』に名高く、そしていづれも二羽である。

大夫坊覺明に筆を振らせて越中國垣生新八幡に奉納した木曾願書（『平家』卷七・『盛衰記』卷二九・舞曲『木曾願書』・謡曲『木曾願書』『木曾』等）にも冥感空しからず、『盛衰記』と謡曲『木曾』には數を記さぬが、『平家』では靈鳩三羽を數へて神後の昔に比してゐる。

作中の人物

人物の描寫では、勇士すゑざねが拷問にかけられて怖れず却つて敵將を擲擄する態度・言辭よりも「苦しみに堪へかねて、今は落ちばやなど思ふが」（本輯一七九頁）と其の心理に立入つて加へた説明が興を催させ、羽持の御臺の美に魅せられた左衛門が一旦思ひ切るの聊か殊勝であるが、「それがしがにうぼう（女房）を、見ればなかく腹も立つ」（一六四頁）と離縁してしまふあたり狂言の氣分が横溢してをり、例話入りで長々と見當外れの戀愛禮讚の哲學を説く猫撫で聲のあんなふが面皮には、其の有難い樂師如來の本地物語と共に感涙を禁じ得ぬものがある。みくに港のまきへ、太夫が妻は、夫の太夫が宛然それである『義經記』（卷七、大津次郎の事）の大津次郎が女を逆に行つてをり、情ある人買、奥州の五郎太夫夫婦は『まんじゆのまへ』の直江夫婦と同斷である。そして兄兩人は前に述べたやうに十郎・五郎の佛を寫してゐるが、いや、鶴の少將の立身には末子成功型の童話の姿が遺留してゐる。羽持夫妻の中では北方の方が勝れても、同情も惹く。上洛の別離に、目のない愛から「我ならで新枕すな」（一六三頁）と未練を残す羽持太郎は、親切な作者の附してくれた豫感の表示と言ひ條、少し吉田の姫君を侮辱し過ぎてゐる。七人の子をなすとも、況や三人位では到底信ぜられない「女」は災なる哉である。

類種の商品

なほ全體として、舞曲の中で特に『信田』『百合若』、謡曲の『鳥追舟』『村山』、古淨瑠璃の『むらまつ』（寛永一四年刊）及び後に説く『よしうじ』など本書の類種の作として擧げ得られる。『信田』のちは、太夫の拷問の状などは

「餘り苦痛の有る時は、しや落ちばやと思へども、待てしは我が心、ちはらは入日の如くなり、信田殿を誓ふれば、出

づる日晝む花なれや。餘命を言ふとも限りあり。替れや命とて、如何に問ふとも落ちざりけり」

とすゑざねと其の心情まで少しの變りも無い。

はもちの中將

【題號】「はもち中將」のはもち（羽持）は主人公平もりなかの稱號であるから明白である。中將はその官名のやうに見え、現に刊本下巻の内題は「はもちの中將」となつてゐるけれども、本文中羽持が中將に任官した事の記載は全然無い。本文の中で、中將といふのは二條の中將の他に無い。即ち羽持の末子いや、鶴の養父である。然るに此の人に關して記すところは、僅に

「其の頃都二條の中將殿といふ人、武藏の國司を賜はり下り給ふが……」（本輯一八六頁）

として、橋本の長者が許でいや、鶴を見て之を所望し、一旦途から引返して相伴うて參内し、帝の愾感にあづかつて少將に任ぜられたいや、鶴を二條御所にかしづいて置き、自身は再び任國へ赴いたといふだけに留まつてゐる。羽持と相並んで全篇に活躍する人物といふのではない。尤も羽持の運命の展開は、彼の末子が此の中將に見出されて養ひ取られた事に機縁するのであるから、其の意味で重要でない人物とは言へないけれども、兩者を並べて附したとすれば、餘り適切な題名とは言ひ難いと思はれる。

はもち中將

併し刊本上巻の内題も（表題は新しい筆であるから直接舉證の資料にはなり得ないが）『讀書籍目録』の所載も「はもち中將」となつてゐるに見るも、やはりそれが正しい題號なのであらう。刊本下巻の「の」字は、題號だけをいつの頃からか誰かが「はもちの中將」と不用意に讀ませた——さう讀みたいのが寧ろ普通であると言へる——のが文字となつて挿入して來たのを其のまゝに梓に上せたに由るのであらう。

はもち中納言

京大本の表題が「はもち中納言」となつてゐるのは愈、妙である。詞章・内容の異同はあるが、やはり中納言や中

將に羽持が任ずることは無いのみか、二條中將はるるけれども、「中納言」の文字は本文の何處にも發見せられ得ず、亦中納言の官位を推しあて得べき人物も、記事も見當らない。其の題簽の新しいところから想像することが許されるならば、舊題簽に「はもち中□」と中の字の下が磨滅・破損或は剝脱でもしてゐたのを、書肆か舊藏者か手に在つた頃、何人かがさかしらに「中納言」と読み誤り或は測定してしまつたのではなかつたか。(舊題簽以前に又原題簽が在つた場合は其處へも此の關係は移し得られる事になるが)此の寫本各卷内題が無いので、他に憑據がないのを遺憾とするが、一面此の想像を益、可能ならしめると思ふ。(原本並所在の項参照)

【年代・用語】本文中「寛治元年」とあるが勿論それは著作の年代には關係ない。刊本では道行に「太平記」(卷二)「後基朝臣再關東下向事」の例の「落花の雪」の文、敵討に「曾我物語」の影響を受けてゐることが明らかに認められるから、兩書以後の作であるべきは確かで、寫本はその點では刊本ほど明らかな内證を有するとは言ひ難いが、いづれにしても素材・構想・思想・文體・用語等から推して、やはり室町末(若し徳川期ならば初世)のものとするべきであらう。用語として「おさあい」(一八六頁、一八七頁)「そでこひ(袖乞)」(二七一頁)「へんけ(變化)給ひ」(一八四頁)など注意せられ得る。

【原本並所在】元祿五年刊『讀書籍目録』(五之卷、物語書部、三五丁ノオ)に「二 はもち中將」と見えてゐる。『新日本小説年表』(四七頁、近代篇、假名草紙)には「○はもち中將 一 寛文年間版」として出でゐる。

本輯所收のものは、東北帝國大學附屬圖書館藏(舊狩野文庫本)上下二卷二册、繪入(丹綠)十四行の大形豎本(縦八寸九分)で、題簽には「はもちの中將鱗形屋上」「はもちの中將下」とあるが何れも新しく、内題は上卷は「はもち中將 上」下卷は「はもちの中將 下」とし、柱には「はもち 上」「はもち 下」、上卷末には「はもち上終」下卷末に

東北帝大本
(本輯底本)

は「はもち下終 うろこかたや新板」とあるものである。

附記 原本上卷の卷首(本文の前の空白の一枚即ち扉紙の裏)に、左記の書入がある。

「此書の如き者貳百年前行れしと見ゆ予が淺見意圖を以てすら見る所數十部あり 岩屋物語 甲賀三郎 鹽賣文章
はちかつき 三人法師 露の宮 若草双紙 玉取 行平 法妙童子 養老灌 子敦盛 全盛
依藤太

或は繪巻物とし又は大和とちの雲紙に壹頁の紙に兩面に書す其書はいづれも至而美也古き竹取物語を撰したる様に見ゆ後に其書を小字に書して割繪あり(鱗形屋 木下若石 杯板本とし小冊にて金平本と同じく賣れり)畫をば奥村文角政信杯直けり此書は小冊と不成前の書也

天保二年正月 皇 鈴木禮藏記

右の内「鹽賣文章」は「文正さうし」である。又「露の宮」は本輯所收の「朝顔の露の宮」であらう。「行平」は「行平物語」(家藏本は「ゆきひら物かたり」と内題のある鱗形屋版)で、「松風村雨」(萬治二年刊)の一本であるが、「甲賀三郎」「玉取」「養老灌」などいふものもあつたことが知られる。「甲賀三郎」は「諏訪縁起物語」の一名であらうと想像されるが「全盛」といふのは一寸判断がつかかねる。

又同様に原本下卷の卷首扉紙の裏にも

「後三年合戦記 圓光大師行狀記 駿牛繪詞 國牛十圖 三十六番歌合 七十一番歌合 十二番歌合 調
度歌合 蟲合 鳥合 福富草紙 雀松原 常盤廻物語 花鳥風月 太秦草紙 天狗問答 北野大茶湯
記 小町草紙 島わたリ 七草双紙 猫の草紙 浦島太郎 物奥太郎 二人比丘尼 七人比丘尼 四
人比丘尼 女郎花等 此餘いくばくも有べし皆繪巻物也 草子類にも入ル」

と書入れてあるが、これは「後三年……いくばくも有べし」までは全文馬琴の『燕石雜誌』(卷之四)「浦島の子」の

條)の文其の儘の抄出である。(上巻の方に出した『文正草紙』鉢かつき『若草草紙』子敦盛が除かれてあるだけである。)随つて『十二番歌合』『天狗問答』はそれ／＼『十二類歌合』『天狗内裡』の誤であること論無く、後者は即ち本輯所収の『天狗の内裏』である。

京大(國文)本
「はもち中納言」

本輯齋頭に「イ」として隨處に對照したのは、「はもち中納言」と題する本書の一本で、京都帝國大學國文學研究室藏の古寫十二行袋綴横本(八寸五分)、表紙・題簽は共に新しいが、普通の御伽草紙風の三巻本で各巻處々もと奈良繪の挿圖があつたらしい空白の頁のある物である。内題・奥書無し。此の書の題號に就ては前に愚見を述べておいた。(「題號」の項参照)

刊本とは詞章に異同ある箇處が在るばかりでなく、内容上にも多少の相違ある部分が在る。例へば羽持の北方への媒を頼むに、左衛門自ら新太夫が家を訪れること

あんなふが羽持の館に上つた時、北方は南面で草紙を繕いてゐたこと
白杵の讒奏の詞中、羽持が異心を企てて京を建てるといふのが播磨の姫路であること(以上寫上巻)

道行文が簡略で、刊本のやうな明白な『太平記』の影響が認められぬこと(これは御章上(寫中巻)の事であるが)
いや、鶴を買ひ受けて一旦都へ歸り、參内して少將に任せられた若をかしづくといふだけで、後、二條中將が任國へ下つた記事はないこと

羽持夫妻の歸洛に際して北方を賣つた大津浦の宿主に對する處分(刊本では首を刎ねられるのに、寫本では少將の意見で命だけは助かる)

みくにの浦のまきへの太夫が恩賞として四箇國の總政所を仰付けられること(奥州の五郎太夫夫婦に砂金千

兩賜はることはない(以上寫下巻)

などであるが、就中最も著しいのは、彦山に預けられた羽持の兩子の身の上と、そが復讐の情況である。今其の部分の文を、參考の爲に少しく次に抄出する。

これはさておきうすきの左衛門は、彦山まきうであつるが、院主の御坊にまいり、きやうだいのわか君たちをつく／＼見まいらせ、はもちの御子とはしらすして、あらいつくしのわか君や、あのきやうだいのおさあひをわれにたまはるべし。わがあとをゆづらんと仰ける。御坊このよし聞しめし、それがしがあとをつがせ申ちごなれば、おもひもよらすとの給ひければ、とかく仰候とも申うけんといふまゝに、兄弟のわか君をひとつこしにうちのせて、うすきにこそは歸られける。いつきかしづき給ふ事、中／＼かぎりなかりけり。二人のわか君も利根の龜鶴御ぜん十五にならせ給へば、げんぶくましくて、うすきの太郎ちかいへさて、あにの龜鶴御ぜん十五にならせ給へば、げんぶくましくて、うすきの太郎ちかいへとぞ申ける。おと／＼のわかづる御ぜん、次郎いへちかと申て、かみからしもにいたるまで、湯かつかうせぬはなかりけり。あるとき事なるに、きやうだひの人／＼、みなみおもてのゑんにいで、花をながめてる給ひしが、いづくよりかきたりけん、老人一人きたり、いかにわか君たち、うすきの左衛門どのは、御身のおやおぼすかや。御身のち／＼ははもちどのと申せしが、うすきどのがざんそうにて、ゑぞがしまへながされたまふと、こま／＼とのたまひ

て、かきけすやうにうせたまふ。
 兄^弟おほせけるやうは、いままではさやうのこともしらすして、誠のおやおもひ
 しことのむねんさよ。たいいましらする老人は人げんにてはよもあらし。われくがうちが
 みにてぞおわすらんと、なみだをながしての給ひけるは、いかにもおやのかたきをうたん。
 さりながらこのことをいろにいだしたまふな。よきすきねらひてうたんとのたまひける。お
 りふしそのころ、おほばんつとめよとのせんじなり。左衛門は、よきつわもの三百人そろへ、
 おや子三人して百騎づゝのともなりけり。このたび二人のわか君を御かどの御めにかげんと
 て、むま・ものぐじんじやうにこしらへて、さめきわたりてのぼらせ給ふ。
 あはれなりきやうだいの人々は、道すがらねらひ給へども、さすがうつべきひまもなし。
 そがせ給へばほどもなく山崎につかされたまひて、八幡宮をふしおがみ、おやのかたきをやす
 くとうたせてたべときせひしてとせられたまふところに、爰にまつ原のありけるに、しら
 ざぎあまたとまりぬり。左衛門御らんじて、いかに二人のわかたち、やつばはいかにとのた
 まへば、つかまつりて見せまいらせんとて、ゆみにやをうちつがひて、きやうだいして、一
 つづ、いとし給へば、左衛門これを見て、いたりやくとかんじける。さてきやうだいの
 人々は、かくてみやこのうちへいるならばあしかりなん。いかゞしてうたんとおぼしける所
 に、左衛門もむまよりをり、兄弟もむまにのりたまはずあゆみたまふが、左衛門さきにたちて

(二) あゆみ

(三) をと落し

あゆめるを、よきひまなりとおぼしめし、ゆみとやをうちつがひて、太郎のやにて左衛門の
 こしのつがいをいとをし給へば、左衛門これはとおもひてあとをみかへるところを、次郎殿
 はむないたをいとをしたまふ。いたはしや左衛門は、なにかはもつてこらふべき。あしたの
 つゆとぞきへにけり。きやうだいの人々は、ゆみとやをかりとすてかたなをぬいて、左
 衛門がほそくびをみづもたまらずうちをたまふ。左衛門がつはものども、のがすまじとて
 新^數きつてかゝる。きやうだいの人々は爰をせんと、たかひたまふ。きやうだいのてにかけて
 そのかずあまたきりふせて、たかき所にうちあがり、よろこびの色をなをし、すこしいきをぞ
 つきたまふ。

其處へ恰も熊野詣の途なるいや鶴の少將の一行が通りか、つて、茲に測らずも兄弟の再會となり、三人同車して
 二條御所に入る事になつてゐる。即ち刊本では彦山での敵討であるが、これは二子が敵の養ひ子となり、元服
 までさせて貰つた後に讐と知つて狙ふといふのであるから、事件としては一段悲劇的であるわけである。敵討も
 随つて彦山では都合が悪いから、大番勤めの上洛の途、石清水八幡宮に近い松原での出来事で、少將の來合はせ
 る場所だけは略、刊本と一致してゐるが、本望を遂げた場面での兄弟の邂逅は、これも此の方が餘程劇的構想で
 ある。神翁の託宣は刊本は夢の中で、今宵泊り合はせた左衛門を敵と告げるといふのが何れかといへば自然で、
 寫本の方は少し唐突の氣味はある。

其の他、説話の大筋と人名は殆ど同様である。寫本で、羽持への流罪の申渡の勅使が、「佐藤の判官すへみつ」

(刊本「すゑすみ」となつてをり、兄弟の若が元服して白杵太郎ちかいへ、同苗次郎いへちか、と名告る異同がある位である。(此の命名も餘りに智慧が無さ過ぎるやうに思はれるが)。又中巻に一箇所「うすきの左衛門のせう(討)」と記してある所があることを附記して置く。

詞章の上からは、寫本の方が幾分古いやうな感じがせぬではないが、構想の上からは却つて後のものではないかと疑はれるところもある。刊本の原本と、寫本との先後・交渉は、他の寫本でも發見せられたらもつと容易に判断の出来る手懸りが得られるかも知れない。勿論同一原本からの派生であることだけは確かである。本輯蠶頭の對校は、やはり一々の詞句に就てでは無くて、特に注意を要すると思はれる部分にのみとゞめてある。

古淨瑠璃よし
うじ

【影 響】 古淨瑠璃「よしうじ」(大阪毎日新聞社發行『珍書大觀』の内『金平本全集』に收む)の構想は恐らく本書から出たものであらうと思はれる。花山院の御宇豊後中津川の大將吉氏が帝郡守護の爲上洛の留守に、宇佐八幡に參詣した其の御臺を見初めた宇佐國司が艶書を返された怨から吉氏を讒して奥州なぐらの里に遠流といふ事になり、一方御臺は子息や臣従と共に夫を慕うて旅立つので、途中の難儀、從臣の忠死、夫婦の再會は奥州なぐらの里での饗宴の席なのも本書と變りはない。めのとの湯原藤太は大體すゑさねに當り、なぐらの里の文太の四郎が五郎太夫に相當する。人買もあるが、これはもつと複雑してゐて、一子松若が鷲に凌はれたり、三莊太夫式の悪妻とさん三郎といふ悪者などが出る。結局宇佐國司を討取り、吉氏は中津川の將軍と敬はれ家門再興する物語である。

「挿繪から判断すると、萬治もしくは寛文初年の版本と思はれる」

小説のよし氏

と水谷不倒氏の解題に見えてゐる。

草紙としても行はれたらしく、寛文の西村版の『増補書籍目録』(『舞草紙部』一五七丁ウ)にも「よしうち」と見え、元禄五年刊の『書籍目録』(五之巻『舞草紙部』二七丁オ)には、「よし氏」と出てゐる。『小説年表』(五二頁)には「出版年代未詳部」に「よし氏」一として收めてある。

【参 考】 なほ羽持の北方母子が人買の手に落ちて離れくゞに賣り廻される場面に、早く説教師の「三莊太夫」に語られ、後に出雲の「三莊大夫五人嬢」などに作られた有名な安壽・對王傳説が、口碑として或は文獻として粉本を示してゐるであらうことは、前にも一言したやうに容易に想像せられ得るが、羽持と北方との再會の場面に、同じく説教師の「小栗判官」の正清が照手姫との二度の對面の場を想起せしめるものがある、其の構想なり傳説なりの始源が何處に發してゐるかは直ちに明断せられ難いが、「はもち中將」の説話中の一場面と説教師との類似を指摘した前記の事實と併せて一應の注意を留めておきたいと思ふ。

説教師の三莊
太夫と小栗判
官

人皇七十代後冷泉院の御宇、安藝・周防・長門三國の主に清和天皇六代の孫、三河守ちかとしの子、周防判官もりとしとて果報ゆしき器量人があつた。藤原朝臣權中納言ゆきいへの姫君を北方に迎へ、老臣には、はらむしや(武者)兵衛尉かね村・さかた(坂田)刑部左衛門ともはるの兩柱石あつて、威を四隣に振つてゐても、世嗣の無いが一つの不足、大將常に之を歎き、それに引替へ家臣のかね村は自ら珠玉の寶に勝ると誇る男子八人女子五人の子福者なのを羨み、殊に其の子供等を召し寄せて褒賞してからは愈、身の不幸を喟つのみであつたが、御臺の勤めに俄に申子の立願を思ひ立ち、兩老臣を始め御馬副の勇士鬼一丸以下を従へ中山の親世音に詣つて祈願を凝らした。

中山の上人が三十人の高僧諸共三七日が間肝膽を砕いての祈、虚空藏菩薩の法驗空しからず、南方から光を放ち、内陣動搖して三十年ならでは開かぬ御扉さつとあき、尊い御姿を現じて、もりとし夫婦に水晶の玉を賜はると見えた靈瑞のいやちこさ。願望成就して北方は程なく懐妊し、やがて玉のやうな姫君を擧げた。判官の喜ばずやうもない。子孫廣き者なればと、かね村を名付親に頼み、まんじゆ(萬壽)の姫と呼ぶことになつた。

姫成人につれ美しきこと類なく、十歳にもならば源氏の英才を婿に取つて心安く老を過ぎさうと楽しみに待たれるのであつたが、満つれば缺くる習、無常の風に誘はれて判官は四十七歳を一期に俄に鬼籍に入つてしまつた。臨終の際に妻子をかね村に、國事をともはるに、懇に託したのであつた。

御臺母子の悲歎を他に、老臣のかね村は恐しい逆心を企てた。主君の逝去を好機として三箇國を横領せんと、嫡子太郎以下の子息と密謀して先づともはるを逐はうと謀つた。

かくて一味の徒輩を語らふ中に、御馬副の鬼一丸こそ究竟の剛の者と利を以て誘うたが、硬骨漢の一丸は却つて散々に面罵し、引出物を投棄て席を蹴つて去つた。

梗

概

梗

概

事破れたと見るより時を移さず本城へ押寄せたかね村の軍を、ともはる・一丸二人の忠臣は高音に聆しめ斬り散らし、手痛く奮闘した末、腹十文字に掻切つて命を亡君に捧げた。(上巻)

邪魔者を除いたかね村は愈、都上りして安堵の状を申下し、相伴うた嫡男は宰相に補せられた。嗣無きによつて日頃の忠を感じ、主家を繼がせるとの判官の譲り状を謀りして、まんまと三箇國の太守になりすましたのである。

こゝに哀れをとどめたのは、判官の妻子の上であつた。家國を奪はれたのみか、非道のかね村の命で、今日よりしては我が外に主は無い。御臺とも姫君とも呼ぶ者あらば忽ち罪科に行ふべしとあつて、北方は若狭、姫は鶴の前と名を改められ、而も屋形を逐はれて小庵に抑籠められることになつた。餘りの仕打に泣いて詰つた乳母も、御臺と呼んだ見せしめと打ち据ゑて同じく逐出された。今は憚る處無しと、己が屋形は嫡子に譲り自らは主の屋形に傲然と移り住んだ。其の頃越後から来たなをいへ(直家)といふ鎧商人があつた。此の商人から買ひ取つた鎧の價砂金千疋に代へて與へてしまはうとかね村が思ひつたのはかの若狭であつた。母子涙の生別れ、御臺は逃け北國路へと伴ひ去られた。

幸に鎧商人は情ある男であつた。その妻も一時は妬心をさへ發さうとしたが、思ひも寄らぬ氣高い上臈なのに驚き、殊に其の身の上を聞いて夫婦は肝を消し、俄に御所を新築してあたらし(新)殿と呼び、主君と崇め仕へたのは、まことに殊勝の至であつた。

國に残つた鶴の前の萬壽姫の不運は語るも涙の種である。邪慳なかね村に召使はれて十三の歳を迎へたが、かね村の乙の姫(十六歳)が備前の國司藏人に嫁すると其の侍女の中に加へられて憂き日を送り、刺へ藏人から附けられて投げ棄てた艶書を、讃岐の前といふ女に拾はれて冤罪の口實を與へ、乙の姫の面前で散々に打擲せられた上に本國へ送還され、更に讃岐が護口にかね村夫婦の怒を買ひ、水仕に追ひ使はれるつらさに堪へかねて、中山の親音に祈誓をかけたのを、又もや讃岐に呪詛と言ひ做され、いたはしくも水責・湯責の後、牛裂の拷問にさへ懸けられようとして、果てはかね村夫婦の黄楊の棒の折檻に、哀れあへなく息は絶えてしまつた。

こがねが窪といふ物淋しい葬りの野邊に棄てられた姫が亡骸は、不思議や虎狼野干の餌食にもならず、却つて守護を受くるのみか、夜な／＼中山の方から金色の光射し、又靈狐も身から光を放つて來り護り、なほも奇しきは佛神の御惠

三日三夜の後再び蘇生の喜を見たのである。折から尋ねて来たかの忠實な乳母と冥助の有難さに泣く時、法華經の八の巻が籠中に在るといふ靈夢を蒙つて弟子共を引連れて探しに來た中山の主人に發見せられて其の暖い懷に救ひ上げられた。(中巻)

御佛の加護、上人の情、姫はもとの體に復した。上人の勳もあり、且は、か、ね、村、が毒牙を免れ、且は母の行方を尋ねん爲、廻國を思ひ立ち、上人に乞うて乳母諸共制髮し、比丘尼姿の行脚の途に上つた。

かくて都に上り、清水に連夜して有難い觀世音の御告を蒙り、夢解の判じに隨つて越後國に立感えた。母に逢瀬の頼みあれば、慣らぬ旅の憂さも物かは。姫十六の春といふに著いたのは、越後國に聞えた直江の浦であつた。

まことに盡きせぬは親子の縁、二人の比丘尼が暫し憩うた門前こそは、家並も多きにかのなをいへ、の家であつたのである。周防の者と告ぐるに耳留まり、急ぎ驅け入つた女房が知らせに、やがて二人は喚び入れられて御臺の前に出た。

清水の夢想のあらたがさよ。一座は嬉し泣きに満ちたこと勿論である。けれども乳母が聲をかけるまでは、母子互に見忘れてゐたほどの互の様の變りやうであつたのも無理ならぬ事である。姫はそれから十八の春かけて三年を平和に此處で過した。

其の頃である。源氏の大將八幡太郎義家は、奥州の朝敵を十餘年に誅伐し、功に依つて奥五十四郡並に北陸の七箇國を賜つて陸奥守に任じ、越後國に在任してゐた。一日なをい(直江)の次郎は召されて、その美人の聞え高い姫を參らせよと望まれた。姫は持たず候。唯主を持ちて候と申上ぐれば、神妙なりと賞美あつて急ぎ伴へとの御説、天にも昇る思ひのなをいへは、足の踏み處も覺えず、己が袴の裾にけし飛んで烏帽子を落す笑も愛敬。俄に八幡殿の名たる家臣等御迎に伺候して、なをいへが館から萬壽の姫は入つて義家の北方に具はつためた。その上程經て姫が母に對面あつて素性を質せば、父伊豫守頼義の從兄弟周防判官もりとしの御臺であらうとは。繋る血筋、重なる奇縁、それにつけてもなをいへが志の殊勝さよと、義家悦喜有つてなをい(直江)の庄を永代に下し賜はる。

までも憎きは逆臣か、ね、村、と、上洛の後義家は勇臣瀧口に命を下せば、二萬餘騎にて周防國に馳せ下り、義家の使としてか、ね、村、が館に乗り込み、家國の横領と御臺母子の行方を詰り問ひつ、か、ね、村、以下を取つて押へ、都へ縛め曳く途に、

かの、か、ね、村、が乙の姫の備前の國司藏人と不縁になり歸國するに行き遇うて之をも引捕へた。

五條の右大臣を以て、不忠第一のか、ね、村、を所領に更へても申賜はらうとの義家の奏聞、尤も理ではあるが、當年は院の御年忌、非常の大教行はれる際とて、教し難き奴ながら生命ばかりは助け置け。源家重代の封地、藝・防・長の三國を汝に與へるに免じてとの宣旨の趣である。

私になり難い事故、無念とは思ふが、罪人共を追放した。科無き者はおのづから新しく明りが立つと、惡さげに滅らす口をたもいて八幡殿を嘲弄するか、ね、村、を、憎さも憎しと瀧口が丸裸にして逐ひ放つ折しもあれ、一天俄に鳴りはためき、雲中より火車が舞ひ下ると見るまに、か、ね、村、夫婦を引纏んで讃岐の方へ飛去つた。終に天罰を通れ得ぬ身の末、恐しい極であつた。

さても所知入の慶あつて後、情深かつた中山の主人は召されて三千町の所を祈禱料に寄せられ、又幼児に手を引かれ参候した八十餘の老尼には、忠臣ともはるが母と其の遺孤と問召して、か、し、き、の、あ、と、といふ所を安堵に添へて下し賜はる面目、持つべきものは子、すべきものは忠の道と、御前の人々齊しく感歎の聲を放つた。

其の後もりとしを始め、ともはる・鬼一が跡懸に供養あり、義家夫妻の御仲は愈々睦まじく、御子數多出來て子孫繁榮した。後年保元の名將六條判官爲義と聞えたのも、此の萬壽姫の腹であつた。(下巻)

梗概

概

【性 質】 中山の觀世音の申子の姫が一旦逆境に沈淪してゐたが終に善報を受けて榮達する物語である。但し單なる童話的な申子立身説話ではなく、それに御家騒動が絡まつてゐる。靈驗譚の分子と武勇傳説の分子との混錯したもので、且「はもち中將」と同じく例の人買説話の分子が挿入せられてゐる。

人物は、御家の兩柱の忠奸の對立、美姫と勇將との佳配、悲境の御臺母子、至誠の乳母、義侠の高僧、殊勝な鎧商人夫妻、邪智の侍女、そして筋立は、主君病歿後の佞臣の御家横領、忠直の勇臣の節死、女主人公母子の離散艱難、冤枉の責苦、佛神の冥助、異郷の再會、名將の援助、惡人の誅伐、善人の榮昌といふ套型の勸懲小説で

勸懲小説 (御家騒動物)

申子立身譚

散艱難、冤枉の責苦、佛神の冥助、異郷の再會、名將の援助、惡人の誅伐、善人の榮昌といふ套型の勸懲小説で

散艱難、冤枉の責苦、佛神の冥助、異郷の再會、名將の援助、惡人の誅伐、善人の榮昌といふ套型の勸懲小説で

これも「はもち中將」と同じく、舞曲及び古浄瑠璃型の作品である。女主人公が其の御臺となる爲に八幡太郎義家が登場するなど一寸驚かされる。如何にも金平式の空想で、古浄瑠璃や古い歌舞伎狂言の氣分に通ずるものがある。

すべては中山觀世音の奇しく有難い御計らひであらう。同時に、奸賊滅び孤忠の老臣の母子が厚く褒賞せられるのを見て、

「たゞ世の中に持つべきものは子なり、すべきものは忠の道也」(本輯二三〇頁)

と感じ合ふ侍共の詞は、又此の物語が説く思想の或結論であると言へる。そしてこれが亦「はもち中將」の主題でもあり教訓でもあつた。羽持夫妻の再び天日の光に浴したのも、萬壽母子の名將の値遇を得て復榮えたのも、逆臣かねむらぎが得意すらも、皆「子寶」の生きた訓であり無上の誇であり、又「あゝ、あゝ、あゝ」ともはる。鬼一丸が剛勇節義いづれも臣道の鑑として、時人の感激に訴へたところである。いろいろの點で此の兩書は共通したものを有してゐる。

兎も角「はもち」と共に、純御伽草紙から愈、古浄瑠璃風物語への推移を示してゐる作である。そして本書に於て一層古浄瑠璃に近きを見る。

【素材並構想・表現】 上巻は發端の立願から、主君もりの逝去、かね村一族の異圖、ともはる等の忠死まで、悪人一旦勝ち誇ることが敍せられ、中巻はかね村の君臨、舊主遺族の虐待、昨の榮華に引替へて、母は鑑と交換せられて越後路にさすらひ、子は舊臣の女に侍させられて不慮の冤罪に泣き、更に痛ましい酷使と苛責とに玉の緒まで断えて葬りの野邊に棄てられ、悪運益々盛んであるが、御臺も娘も意外に暖い心に拾はれて身も魂

も蘇る。下巻は祥運漸次に展開して、別れた者は會ひ、弱き者は助けられ、正しき者は報い惠まれて、奸邪は終に天誅を遁れぬ大團圓に到るのである。これも傳説を取扱つたと言はんよりは、作者の創案といふべき類のものであらう。

申子の立願

中山觀世音の申子を女主人公とする物語であるだけに、其の申子の立願が中々仰々しい。其の應感もいつもの簡易な夢想では物足りないと思へて、眼のあたり光明赫奕と現じ給ふので一段のあらたかさを覺えるが、それにしては御授けの品が水晶の數珠では聊かあつけ無い氣もする。頻りに寶玉の功德を述べ立てる老臣かね村が名付親だからとて、「滿珠の娘」を利かせた譯でもあるまい。「とり上げ見れば、玉のやうなる娘君」(本輯二〇一頁)は、此の君に限つた事では無い。

此の佛縁深い娘が中山の上人に救はれ、又尼となつて廻國するのも、おのづから宿世であり方便であらう。かね村に責め殺されて、かね村に棄てられた身が再び蘇生の喜を見るのも、偏に觀音の利生によるのであるが、靈狐を始め虎狼野干が守護するといふ姿形に、英雄生立説話の一型態として世界大播布説話の一種をなす動物傳育傳説の分子を包含してゐる。娘の酷使苛責には例の安壽・對王傳説の片影も閃く。

又清水に參籠して「戀しくば尋ねても行け云々」(二一九頁)の託宣歌を賜はるののは、「おもかけ物語」の考説(構想・表現)の項)に説いた『古今集』の古歌乃至葛の葉型怪婚説話に附隨した歌物語からの派生であり轉化である。(四九二頁參照) 夢解に占はせるのは王朝以來の習俗であるが、夢解を俟たずして自ら發明してもよさうな言葉の謎を、勿體振つて判断するのは流石に商賣柄とでも言はう。

御定まりの道行の後、母子の再會は偶然の尋ね當ての奇縁、『阿波の鳴門』のお弓親子の悲劇でないのがめでた

託宣の歌と其の本歌

動物傳育傳説

い。人買の手に落ちた北方が意外に慈悲深い夫婦に買はれて愛護せられるのは「はもち中將」と同じである。その御臺にかしづいた鑑商人は、最初は「なをいへ」（直家）といふ名告のやうで、後には「なをい（直江）の次郎」といふ名になつてゐる。「なをい（直江）の庄を恩賞に賜はるのであるから、直江次郎は確かと思はれるし、「なをいへ」も「なをい」の訛讀かとも考へられたりするが、「なほへ」と記したところもある。二三四頁参照）、後半「なをい」の次郎」と記した後も、やはり別に「なをいへ」と記し、義家も「よしいへ」と記してゐるに見れば、なほ名告と見ておかう。義家に召されて姫を所望せられ、雀躍して退出するところが面白い。（因に、古淨瑠璃「むらまつ」にも越後の直江次郎がゐる、これは村松の姫を奥州たけひ殿に賣渡してしまふ人物である。〔國語刊行會本「徳川文藝叢書」第八冊「淨瑠璃むらまつ」参照〕）

その八幡殿の御臺に具はる萬壽姫が、保元の勇將六條判官爲義の母となるのであるから愉快である。爲義は義家の二子對馬守義親の子で、後祖父義家の嗣となつた人である。史實を無造作に抹殺してゐるところ、否尤もらしい空想を躍らせてゐるところ、なほ俗説にいふ義經の義朝三男説の類で、御伽草紙らしい氣分である。ちかとし、もりとしの系譜も、義家との血縁関係も、作者の筆に生れ結ばせられたものであらう。

坂田刑部左衛門ともはると鬼一丸が忠烈な戦死は、舞曲中の英雄を想起させる。ともはるとは即ち「信田」の忠臣浮島太夫と伯仲し、評定の席を蹴つて歸り、櫓に上つて寄手を罵り、奮撃突敵前に腹掻切る大剛の鬼一丸は、「和泉が城」の忠衛其の儘である。

「あつばれ一丸が命二つ欲しいいな。一つは婆婆に留め置き、汝等がなれの果てが見たきなり」(二〇六頁)と大音揚げて呼ばはる詞まで

「あはれ忠衛が命今一つ欲しいぞと云(とよか)。一つを我君に奉り、一つを思ひ残し置き、兄弟の人々のなれの果てが見たいと云(とよか)」(三七九頁)

と同じく大音揚げる泉三郎の再来である。十文字に腹切つて臍を掴んで繰出す豪勇も互に劣らぬが、己れと首を撮落して「大剛の者の腹切る」手本を示す一丸は一段の派手者である。『太平記』(卷七、吉野城軍事)の村上彦四郎、『義經記』(卷六、忠信最期の事)の佐藤四郎兵衛等がその指南役であること改めてことわるまでもない。

結局がすべてそれ／＼應報に漏れぬのも、観音靈驗譚ならばさもあるべきでもあらう。奸賊かね村の終に至つては、全く淨瑠璃の時代物式である。

類種の商品

全體として『はもち』の條に擧げた類種の商品を此處でも亦繰返して指摘せねばならない。特に「信田」は全説話として先づ相似た内容を有してゐる。人買もあり忠臣の戦死もある。信田の小太郎が姉の名は「せんじゆのひめ」(千壽姫)で、「まんじゆのひめ」にも通ふ感じが聯想せられぬでもない。又古淨瑠璃の中で「安口の判官」(寛永一四年刊)も類似的構想を内容としてゐる。これは「判官」の名が本書の「周防の判官」に通ずるといへば言へようが、それほど一々を強ひて傳會するのは、却つて滑稽な穿鑿に墮する事になるかも知れない。たゞこれらの諸作品或は其他傳存せぬ幾多の作品との間に直間接の交渉影響等が多少づつでも在つたであらうことは揣摩を許されるであらう。『はもち』との關係も既に述べた。

萬壽の前

【題 號】

女主人公の名が題號となつてゐる。「まんじゆのまへ」は萬壽の前であらう。男にも幸壽丸・徳壽丸・千壽王丸など、女には安壽・愛壽・力壽・覺壽など、壽の字の附く名は多い。同じ御伽草紙の「唐糸草紙」の唐糸が女は即ち「萬壽の姫」で、(共に頼朝の御前で今様を歌ふ十二美姫の第一番「せんじゆの前」は、「手越の長者が娘」であるから、「平家」(卷一〇)に名高い、そして「吾妻鏡」(卷三、元暦元年四月廿日・卷八、文治四年四月廿五日)にも見える千手であらう。舞曲「烏帽子折」の義朝の女もさうである。「信田」の「せんじゆのひめ」は前に述べた。

まんじゆのまへとまんじゆのひめ

但し、本書本文には「まんじゆのひめ」とあるのみで「まんじゆのまへ」と明記した箇所は一も無い。内題がさうなつてゐるだけで、表題も「入萬じゆのひめ」とある。だから『小説年表』には此の二つの書名を別書のやうにして掲げてある。「まんじゆのひめ」の名が刊本の表題でもあり、本文にも矛盾せぬが、内題のみならず古い書籍目録にも「まんじゆのまへ」の名で出てゐるから、なほこれを用ゐることにした。兩様に呼ばれてゐたのであらう。

(「原本所在」の項参照)

【年 代】 不明。『はもち中將』と同じく室町末或はもつと降つて徳川の初期の作であらう。『はもち』の方が幾分古さうな感じがする。

【文體・用語】 語り物めいた形式と口吻とが見える。刊本の『はもち』にも(寫本よりも)其の感じがあるし、一體に近古小説には此の傾向があり又事實語られた物も多いやうであるが、本書は、冒頭などさながら時代淨瑠璃乃至は後の讀本流の書起しである。結文も舞曲や古淨瑠璃型である。

用語の中で、「宮仕ふ」(他動四段)を受身にして、「宮仕させられる」召使ばれる」の意に用ゐられた「宮仕はれ」(二〇頁、二二頁)といふ語を一寸擧げて置きたい。(五九三頁「小式部」考説「文體・用語」の項参照)

【原本所在】 寛文の西村版『増補書籍目録』(舞草紙部、一五八丁ウ)・元禄五年刊『藏書籍目録』(五之卷、舞草紙部、二八丁ノオ)等に「二まんじゆのまへ」と見えてゐる。

本輯所收のものは、東北帝國大學附屬圖書館藏(舊狩野文庫本)上中下三卷三冊、繪入(無彩)十五行の大形豎本(横八寸九分)で、題簽には「入萬じゆのひめ 中」(入萬じゆのひめ 下)とあるが、(上巻のは「まんじゆの姫 上」とあるが新しい)内題は「まんじゆのまへ 上」「まんじゆのまへ 中」「まんじゆのまへ 下」となつてをり、柱には「まん

東北帝大本
(本輯所收)

とあるのみで、上・中兩卷の末にはそれ〴〵「上巻終」「中巻終」「下巻の末には本文の終に示したやうに

「寛文十三丑歲陳月吉辰

江戸大傳馬町 鱗形屋板」

とあるものである。

『新日本小説年表』(四七頁、近代篇、假名草紙)に

「○萬壽の姫 二 延寶元年」

と見えるから、延寶版の二卷本も在るのであらう。同書(五二頁)「出版年代未詳部」に

「○まんじゆの前 二」

と重出してゐるのは、恐らく上記古版書籍目録に此の名で載つてゐるのを、書名の異なるところから別書と思つて掲げたのであらう。

小式部

寫一本

中頃、紫式部とて上東門院に仕へ奉る才色無雙の女房があつた。采女の上童の中の花と稱へられ、院中一の聞えが高かつたが、或夜不思議の夢を見て孕むことあり、月満ちて玉を欺く女兒を擧げた。此の世ならず美しく生立つて、早六歳にもなつた姫の髪を搔撫ててやりながら、或時母の式部はくれんく和歌の道の大切な事を説き聞かせ、伊勢・小町の古歌を手本に學べ。好めばあがるぞ」と訓へると、姫は莞爾して

は、やはしこのめ(好木芽)ば歌のよまるゝに 播粉の鉢に血添へて賜べ
と言つた幼氣さに、皆々笑聲に入つた。

其の後式部は宿願の事があつて、暫く姫を繼母に預けて石山の觀音へ詣つた。憎まれるなと諭して行つた式部の懸念は杞憂であつた。餘りに可愛くて美しく、繼母も憎めないのである。伊勢土産に或人から貰つた土の小鍋を、繼母が自分の二人の子だけに呉れたのを見て、子供心に羨ましく、欲しさに泣いじやくりながら姫は軒竹の鶯に呼びかけた。

鶯よなどきは啼くぞ乳や欲しき 小鍋や欲しき母や戀しき

繼母御も動かされて、一つを我子から乞ひ取つて姫に與へた。石山から歸宅した式部も繼母御の芳志を喜んだ。式部は彼の寺で源氏物語六十巻を作つて大般若の裏に書きつけ、其の後繪師に自身の姿を畫かせて、それを其處に遣つた庵室の本尊と安置し、所領を寄せて菩提の事を頼んで下向したのであつた。

姫益々美しく育つて殊に琵琶に巧であつた。然るに十三の春俄に重病に罹つて今を限りと見えた。大事の靈の祟であつて、變らうと願ふ所も驗なく、母も弟と顔を見合せて泣くより他はなかつた。折節一聲訪れた卯月の空の郭公に、息の下から姫かくばりの

郭公死出の山邊のしるべせよ 親に先立つ道を知られば

梗

概

恐しい聲が突然頭の上から落ちた。見上げる天井板の間から、角五つ顔三つの異形の赤鬼が白玉のやうな涙を流して、大音に、冥府の十王も諸神も今の歌を憐れむの餘り定命を延ばし給はる旨と、秋の比内裏から召される慶びとを告げ終つて破風から上ると見えたが、程なく病は本復した。そして果して此の趣上聞に達して門院から召出され、聽しの色の御衣を賜はるのみか、霓裳羽衣の舞までも許されたのは眞に身に餘る面目であつた。泉(和泉)式部とは彼の女の事である。

その頃都に物騒な事件が起つた。それは酒吞童子といふ恐しい鬼が夜々美しい稚兒姿に化けて人を奪るといふ善の取沙汰である。源頼光・藤原保昌二人の將軍勅命を奉じて、頼光は綱、保昌は一人武者とて各、武勇に名を得た家來を隨へ、山伏姿に身を窶して、西山・愛宕山・老の山を尋ね巡つて鬼が城に到り、童子が好む酒を用意して來たので勤め辭はせて之を退治した。頭八つ、足九つ、眼十六の怪鬼であつた。これとても住吉明神の冥助、且は鍾の威徳であらう。操勳功によつて兩將軍に天下を預くるとの繪旨あり、頼光には所領數多賜はり、保昌には所望の物をとの忝き宣旨を長み、然らば泉式部をと望み申したので、今更惜しくは思召しながら、なほ宮仕はさせよとあつて下し賜はつた。

保昌との契も濃かに、何不自由ない生活が續いたが、其の頃都に名高い歌人道命法師に就いて時々歌の大事を習つたことが端なくも怪しい噂を生み、保昌との間も讒する者あつて、いつか荒んで來た。此の事を耳にした母の紫式部は娘を呼び寄せて、女房の振舞事細に訓諭するのであつた。そして母の式部は復石山へ參つて、源氏六十巻の内から五巻を取り置して深く秘めた。これも「雲隠」の秘事の一説である由。

泉式部の上に同情して赤染左衛門といふ歌人も一首を寄せた。

移ろはて暫ししのだの森を見よ かへりもぞする葛の裏風
返 し

年經ると變らん物は和泉なる 信太の森の木の葛の葉
和泉國信太の森の明神は、男女の道を守り給ふ神であるといふ。

其の後泉式部はやさかなの巫女の勳によつて、節分の夜いづも(出雲)の社の神前で霓裳羽衣の舞を舞ひ、「保昌・泉式

梗

概

部」と認めた板を驛して

千早振る神の見るめも恥づかしや 身を思ふとて身をや棄てまし

と語り上げながら、形の如くの祭式を修したので、神も納受あり社壇頼りに動き、観衆漫に感涙を止め得ぬ中を、社壇の陰に隠れてゐた保昌は保へず走り出て、かの舞姫を抱くと其のまゝ宿所に伴ひ歸り、夫妻再び和合の歡びを見たのは、偏に此の御祭の故と聞えた。

泉式部が十七といふ春、玉のやうなあでやかな女兒が生まれた。然し官女生活の身を恥ぢて、泣く／＼玉の宝箱に容れたまゝ、嬰兒を東寺の門の唐石敷の上に捨てたのである。折もよし通りかゝつたおうぢとてばに拾はれて育てられることになつた。河内國から出て、申子の祈願に清水に三七日籠つての歸るさの老夫婦であつたのであつた。

丹誠の甲斐あつて、姫は美しく成人したばかりか、誰教へれど歌・連歌の道にさかしく、而も心やさしい孝行者であつた。奥夫婦が掌中の玉といつくしんだのも無理はない。

姫が十一の年を迎へた或日、其の草の屋に一夜の宿を求めた旅姿の都上萬こそ生みの母泉式部と乳母のれんぜい、(冷泉)であつたのである。式部は漸う年たけて三十近くもなるにつけ、我が身の行末亡き跡の事共心もとなく、其の後子とても無いので、頼りに姫の上懐かしく、夫に暇を乞うて旅の首途し、先づ泊瀬に籠つた後、御告を頼みに心細くもさ迷ひつゝ巡り巡つて此處へ来たのであつたが、慣らはぬ山里の夜もすがら夢驚かす松風に寝られぬ心を口吟んだのを、

山里に寝ぬとはいかにぬればこそ 松吹く風の驚かすらん

と嘆ひ難する利登な少女があるに驚き、殊更賤の子とは覺えぬ様子なのを訝かしく、よく／＼問ひ質してそれが尋ねる我が子であるのを知つた。捨てた折蒔繪の箱の蓋に記しておいた歌まで符合したので、今は疑ふところもなく、急ぎ都へ伴はうと言ひ出すと、おうぢ・うばが承け引かぬのみか、何苦有つて、何が憎くて現在の生みの子を捨てられたぞと母を怨み、由縁無き老夫婦のこれまでの親身の養育に思ひ比べて、いつか姫はうべなばうとせぬ。實に理と母の式部も面目無く、さりながら泊瀬の御利生と忝く、やがて都の指圖を仰いで皆々打連れて歸洛するに決し、奥夫婦が事は程無く上聞に達して、丹後國與謝郡を賜はり、彼の地へ下つて富貴萬福に暮らす身となつた。

櫻

櫻

其の後の事である。帝住吉行幸の折、波間の浮鳥を人々争ひ射て興じようとする景色の面白さに、一首仕れとあつた時、泉式部は姫に譲つて獻らせた。然し姫が恥づかしげに父の方を向きながら細い聲で「千早振る」と申しも敢へぬに、「あれは」と母が叱つた。鳥類の歌に「千早振る」とは勿體ないと制したのである。幼き者の事苦しからじと重ねて宣旨あり、母の許しを得て誄み上げたのは、

千早振る神のい垣にあらねども 波の上にも鳥居立ちけり

一座の柳相一度にとつと感嘆の聲を上げた。やがて聴しの色の御衣を賜はり、小式部の内侍と召された。姫は十三歳であつた。

櫻

又泉式部が久世の戸の文珠を拜みに丹後へ下つた間に、帝御寵愛の小松が俄に枯れた。歌の徳は草木にも及ぶ例、松の祈の歌誄ません爲急ぎ式部を召上せよとの宣旨に、小式部代つて

ことわりや枯れてはいかに姫小松 千代をば君に譲ると思へば

と誄すると、松頼りに動いて忽ち復榮えたので敏感いとゞめてたく恩賞を賜はつた。譏する者があつて、丹後から昨日人が上つた由、これは母の歌と承ると申す。召して御尋ねがあると、昨夜丹後からの文は、急ぎの御召にまだ披見致さずとて

大江山生野の道の遠ければ まだふみも見す天の橋立

御感更に新であつた。

泉式部は歸京の後、永く榮華に誇つたが、かへす／＼嗜むべきは歌の道ぞと申し傳へた。めてたし／＼。

【性 質】 御伽草紙である。其の中でも『小町草紙』や『和泉式部』のやうな中古以來の歌物語の流れを承けてゐる作の系統に屬するものと言ふが適切であらう。

小式部についてだけの物語でなく、紫式部・泉(和泉)式部及び小式部の三代(本書に隨へば)の物語である。それが實事・訛傳・空想さまざま混錯紛淆を極めてゐる。